
六天楼の宝珠

伯修佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六天楼の宝珠

【Nコード】

N10260

【作者名】

伯修佳

【あらすじ】

陶家とうかの名を持つ一族が支配する、ある東の異文化交じり合っ国。領主の館には「六天楼」という名の後宮があった。

若き陶家次期当主碩有せきゆうは、屋敷内で祖父戴剋たいこくの新しい側室・翠玉すいぎよくと出会う。

数年後祖父の遺言により、碩有は翠玉を妻として迎える事に。

「私はお飾りの妻なの？」

当初遺言に反発していた翠玉だったが、自分に触れようとしないうる態度にやがて疑惑を抱き……。

二人それぞれの煩悶と、陶家に関わる様々な人々が織り成す物語。

一部ずつで完結形式、第二部完結。

序

最初に碩有せきゆうがその女ひとを見たのは、自室近くの庭を迷っている姿だった。

春にしては気温の高い日だった。雨戸と内扉を開け放しての読書の途中、庭で物音がしたのに目を向けると、緑ばかりの色彩の中にひとときわ目立つ、紅梅色が見えた。

てつきり花だとばかり思っていたのに、よく見ればだんだんと紅梅は移動している。こちらに近づいている様な気がして、ようやく彼はそれが花ではなく人の着物の色なのだと理解した。

しかも若い女で、なおかつあどけなさの残る大きな瞳に涙をうつすらと浮かべている。豪華な着物や髪飾りに、全く頓着する風もなく木々を掻き分けて進んで行くのは明らかに迷っている様子。

生まれた時から暮らしている碩有は広さを感じないほどに慣れてしまったが、新参者にこの邸やしきは広大な迷路にしか映らないだろう。

楼閣と呼ばれるいくつかの建物から構成される場所が東西南北に一つずつ。お互いを回廊が繋いでおり、中庭を取り囲んでいる。構造自体はそう煩雑ではないが、庭は入り組んでいた。ふとした拍子に帰り道がわからなくなっただのかもしれない。

「待ちなさい。そちらに行っても、六天楼りくてんろうには戻れませんよ」

思わず声をかけると、女は文字通り跳び上がった。

次いで、恐る恐る声の持ち主を振り返る。

「……じゃあこ、此処は一体何処なんですか」

碩有は軽く溜息をついてから、それまでいた机から離れ彼女の近くまで縁側に進み出た。

「こちらは東の奏天楼です。六天楼は逆方向。侍女はどうされたんです？ 元来た道を引き返すより、侍女を呼んで一緒に帰った方が早い」

東、の言葉に女の白い顔が青褪あせめた。

碩有は苦笑する。目の前の女性はどう見ても、仕事の途中で迷い込んだ新米の使用人には見えなかった。それで六天楼の言葉を出してみたのだが、的中してしまうとは厄介だ。

西に構えるその建物は、主 現在は彼の祖父、戴剋たいこくの側室が住まう処ところである。新しい側室の噂は聞いていた。正妻が亡くなってより今までの間、数多あまたの側室を迎えた祖父であったが、今度のそれは人目に触れさせず、掌中の珠の如く大切にしているとも。

「待っていて下さい。今、使いの者を」
「駄目！」

使用人を呼ぶ為ために踵かかとを返した碩有に、女は走り寄ってその腕を掴んだ。

最初に掴まれた腕を、次いで掴んだ相手の顔を彼はまじまじと見つめた。

女の顔には恐怖に近い表情が浮かんでいる。

「他の人には言わないで。楼を出たことが知れたら、戴剋様に叱られてしまうわ」

「そうですね。ついでに言うと、見知らぬ男性に触れてもいけないとは言われませんでしたか？ 貴女はもう、この屋敷の主の妻なのですから」

冷静な碩有の言葉に、女は顔を赤らめて手を離れた。

「思い出していただけたようですね、琳夫人」

「な……っ。どうして貴方、私のことを」

「やはりそうでしたか。でしたら尚のこと、一刻も早くお戻りになった方がいい」

もし見つければ、孫の自分でさえもどんな咎めを受けるかわからない。

側室の彼女など、論外だ。夫人側室が不貞を働かない為にこそ、六天楼には掟が定められている。来たばかりでも必ず教育されるはずなのだが、この人は果たしてきちんと理解しているのだろうか。

「で……でも。莉が まだ見つからないんです」

「らい？」

「猫です。白い猫。あの子も、私と同じで迷っているのかも」

「では僕が探しておきます。偶然見つけたことにして届けますから、貴女はとにかくお戻りなさい。今頃あちらは騒ぎになっているでしょう。反対側に向かえば、探しに出ている者に見つかるかもしれない」

多少苛立って彼がそう言った時、遠くから人を呼ぶ若い女の声が聞こえた。

女 琳夫人は目に見えて狼狽している。

「紗甫だわ……」

「お行きなさい、早く！」

怒鳴り声に弾かれたように、彼女は走り出した。その背中に声を掛ける。

「もう二度と、ここに来てはいけませんよ」

夫人は首だけで振り返り、遠慮がちに微笑み礼を言って去って行った。その後姿を、気取った所のない人だと、意外に思いながら見送る。

商家の出という話だが、そのせいなのだろうか。

猫はすぐに見つかった。奏天楼の廊下を堂々と歩いていたらしい

そう報告を彼は使用人から受けた。

丁重に持ち主に返すよう指示を出して、ほどなく伝言でお礼が返ってきた。それで解決。

もう二度と会うこともないだろうと、この時は思っていた。

それが全ての、始まりになるとは知らずに。

一 遺言

「……今、何とおっしゃいました。戴剋様」

聞き間違いだと、翠玉すいぎよくは思った。でなければきっと、夫は熱に浮かされておかしなうわ言を言っているに違いないと。

広い寝台に横たわった姿で、齡七十八になる陶家領主戴剋は辛抱強く、ゆっくりと言葉を繰り返した。

「儂わしもそろそろ天命を待つ時期が来たと思うてな……以前より考えておったのじゃ。もう後のことは全て、この碩有に任せておいてある。この家の財産の管理も、領地の政務もな。ただ気がかりなのは翠玉、お前の行く末のみじゃ」

かつて落雷の如き苛烈さで一族を牛耳り、精力的に政治を行った賢君ではあったが、年老いたせい、ふとした折に得た病が悪化、医師に余命を宣告されることとなった。

それは枕頭に侍るこの女も聞いてははずだったが、彼にとつては覚悟を決めた今でも、現実逃避はいささか嬉しくもあり、心配でもある。

二十八という実際の歳より若く見える妻を、彼は愛情の籠もった眼差しで見つめ、同じく愛すべきたった一人の肉親に視線を移した。

「孫の碩有はお前より年下ではあるが、幼い頃より儂が手塩にかけて育て上げた男じゃ。今では立派に陶家の当主として跡を継いでいる。年齢も近いし、身内褒めをするのは何じゃが、儂が若い頃よりも佳い男になりおった。優しい性格じゃから、大切にしてくれるであらう」

名指しされた当の碩有は無言無表情のままである。翠玉と同じく寝台の脇に控えてはいるが、礼儀正しく彼女より一步下がった位置に膝を付いてこちらを見ている。

これはこれで不憫な子だったと、老人は回顧した。

父を早くに亡くした孫息子は、その心痛で母が心を病んだ為、両親の愛情をほぼ受けずに大人の世界に投げ出された。だからだろうか、四つ年上であるはずの翠玉よりも大人びて見える。

「良いな、碩有。この翠玉を正夫人として娶り、大切にするのじゃぞ。普段は明るいばかりの娘じゃが、寂しがり屋な所もあるぞの」

畏まりました、と返事は短い。

「お止めください！ 第一、まるでご自分がもうお亡くなりになるかのような仰いよう。悲觀的にもほどがありませんわ！ 碩有様、貴方も何をあっさりと受けてらっしゃるのですかっ」

他の男に話しかけてはいけないという掟を無視して、翠玉は非難の声を上げた。視線を寝台に戻して必死に訴える。

「戴剋様、私は良家の出でもない、普通の商家の娘です。貴方様の側室にしていたただけでも驚きだったというのに、跡継ぎの方の正妻などんでもありません！ 碩有様にはもつと、若くてご立派な出自の娘さんが相応ふさわしいのではありませんか」

「儂は其方達はきつと、良い夫婦になれると思うとるよ。そう思わぬか、碩有？」

戴剋は面白そうに笑っている。

「お心のままに。私に是非はございません」

淡々と応える声は何を考えているのか判別しがたい。

「碩有様！」

「翠玉。其方はこの碩有が気に入らぬと申すのか？」

少しばかり哀しげな表情になって問う夫に、彼女は慌てた。

「そういう問題ではありません！ 私は夫を貴方一人と決めた身なのです。万一貴方に何かあったとしても そんなことはないと思ひ信じていますが 慣例通り、尼僧院に入るつもりであります。以前から申し上げていたではありませんか！」

「琳夫人。病人の前です、お静かにされた方が」

彼女はきつと背後を睨み付けた。

「貴方が冷静過ぎるんですっ」

「まあ、落ち着きなさい。翠玉には悪いが、これはもう決めたことなのじゃよ」

二人のやり取りを微笑ましく思いながらも、戴剋は堅固たる意思を翻さなかった。

「少し疲れたようじゃ。この話はこれで終わりとしよう。……碩有、退がって良いぞ」

まだ何か言おうと口を半開きにしたままの翠玉をわざと無視して、戴剋は目を閉じた。

かすかに扉の閉まる音がする。傍らに人の気配を感じないので薄目を開けてみると、予想通りそこには翠玉の姿もない。

あれもなかなか、頑固な所もあるからの。碩有は手を焼くかもしれん。

自分の命数が尽きる予感が確信に変わった時、まず懸念したのがあの娘の処遇だった。

良かれと思つて迎えた西楼で、五年も拘束してしまうとは予定外もい所である。このまま徒いたづらに花を散らせるには忍びない。

お前が遊学なんぞに行つてしまったのが悪いのだぞ、と彼は独りごちる。おかげで隠遁する時に実行しようとした計画が先延ばしになったのだからと。

拗つて僕は黙つたままでいる事としよう　　独り愉快な心持になつて、彼は今度こそ本当に眠りに就いた。

「碩有様！　お待ち下さい、碩有様！」

自分より歩みの速い青年に、翠玉は回廊を早足で追いつがった。純然たる陶風な木造の建物にあつて、碩有の装いは異彩を放つて見える。それが此処では次期領主の証なのだと言かされていたが、今彼女自身が抱えている問題も相まつて、得体の知れない印象さえ受けた。

彼が着ている異国渡りの『背広』という衣服、その上着の一部を、必死に掴んで食い下がる。

「何故承諾しておしまいになるのです？　第一、一族の方々が反対なさるに決まっています！」

「御館様である祖父の決定に、抗う者はありません。例えお亡くなりになつても、遺言は書面で残されず。側室の譲渡は先代にもあ

ったこと、ご心配には及びませんよ」

翠玉を振り返りもせず、碩有は静かな言葉だけで反応を示した。

「心配とか、そういうことじゃなくて……っ。貴方はそれでいいの
かってことよ！もし他に思う人とかいたら」
「……とりあえず、手を離して頂けませんか」

掴んだ所がはっきりと皺になっているのに気づいて、慌てて彼女は手を離す。

「ごめんなさい　でも、私は一夫多妻じゃない世界で育つたの。
だから……相手の人が悲しむんじゃないかと思って。周りも……」

碩有は振り返って翠玉に向き直った。頭一つ高い位置から刺さる視線は冷ややかで、威圧感さえ覚える。

何年か前に一度会ったきりで、彼女にとっては久しぶりの再会である。以前は親切にしてもらったと思うが、こんな冷たそうな人だっただろうか。

夫の言葉通り、立派な青年ではあるけれども

「僕の恋愛にまで配慮頂かなくても結構ですよ。……色々と方法はあるでしょうから。それより祖父についてあげてください。医師から話は聞いていると思いますが、ああ見えても本当に危ないのです」

素っ気無く言い置いて、碩有は元通り歩き出した。その昂然とした背中を、絶句したまま見送る。

そういうこと。

庶民育ちの翠玉は、父に母以外の妻がいることなど想像出来なかった。両親は仲も睦まじく、彼女自身いつかは一人の男性と家庭を持つことをなんとなく思い描いてはいたものだ。そういう環境で陶家に入るまで暮らしてきたから。

六天楼に現在、他の側室はいなかった為失念していた。高齡になつて尼僧院に入ったり、氏族の者に下げ渡されたとは聞いていたけれども、ここでは、側室を持つのが当たり前なのである。人格者で聞こえた碩有でさえも、所詮は貴族の男なのだろう。

冷たい態度は、暗に自分がお飾りの正妻になることを示しているように思えて、何だか哀しくなつた。

いいわ。それならそれで、尼僧になつたと思つて役目を果たせばいい。

怒りなのか悔しさなのか、よくわからない気持ちを追いやつて、彼女は夫の寝室へと引き返して行つた。

医師の宣告を不幸にも裏切ることなく、その後間もなく戴剋は七十八年と五ヶ月の生涯に幕を下ろした。

葬儀は盛大に執り行われた。領民も平和な治世の一つの終焉つひを肅々とした面持ちで受け止めていたのか、参列を許されないはずの葬儀の場に、遠まきに群がる人々の姿もかいま見られた。

それは陶家の中でも言うまでもなく、翠玉を始め一族の者は一年間喪に服すこととなつた。間に遺言は公開され、彼女の期待は外れ碩有の言葉通り、否と申し立てる者は誰一人いなかった。

新たに当主となつた碩有は、同時に宣言した。

一年の喪が明けたら、その時は翠玉を正妻として迎えると。

そして四つの季節が通り過ぎ、やはり彼女の期待は外れることになったのだった。

二 妻の役目

いつの間にか手が止まっていたらしく、あまりに静かな部屋に気づいて翠玉は溜息をついた。

薄曇の昼下がり、庭に面した扉を一杯に開けていると柔らかな風が時折頬をくすぐる。手にしていたのは、音箱が真円な事から月琴げつきんと呼ばれる異国渡りの弦楽器だった。

外出が容易に叶わない身なので、六天楼むつてんろうでの生活は結局いかに暇を潰せるかに懸かっている。幸いにも翠玉は学芸に興味があつたので、側妾時代から戴剋たいこくに望んで与えてもらった楽器や道具などで屈を覚える事は少ない。

今弾いていたこの月琴も、故郷の地歌が得意だと言ったら彼が買
い与えてくれたものだ。

だから溜息の理由は、退屈などではない。

「奥方様」

いつもと違い改まった紗甫の声がして、彼女はびくりと身構えた。

来たわね。

側仕えの少女は、普段ならば自分を「翠玉様」と親しげに呼ぶ。

表立つての呼称を口にするのは、他に第三者が居合わせる時のみだ。しかも様子からして礼儀に気をつけなければならぬ相手らしい。

となれば、おおよそ相手の察しはつくというもの。

「槐苑様かいいんがお見えになりました」

房の入り口、開け放たれた格子戸脇に控えた紗甫は、主の表情を

読み取ってかこちらにほんの一瞬だけ苦笑を向けた。

「……お通しして」

内心断りたい気持ちで一杯だったが、相手が相手だけにそうもい
かない。

もっとも、「だからこそ断りたい」というのが正直なところなの
だが

紗甫が廊下を振り返るのを待たずして、質素ながらも隙のない身
形をした老婆が「失礼致します」と房内に入って来た。

「槐苑様。ようこそいらつしやいました」

「奥方様にもご機嫌麗しいご様子で、何よりじゃ」

につこりと愛想笑いをして椅子を勧める翠玉に、おざなりな言葉
で顔色一つ変えずに老女は当然のごとくどっかと腰を下ろした。

噂では八十を優に越えているというこの女性は、娘時代より六天
楼に入り人生の大半を過ごしていると聞く。何代か前の当主の側妾
であったのを、才能を買われてそのまま世話役として残ったとか。

同じ側妾出身だからなのか、それとも元からこうなのか。槐苑は
概ね翠玉に対してぞんざいな態度を取った。

「今日は何の御用でしょうか？」

紗甫が円卓に茶器を並べていく様子をじろじろと眺めている槐苑
に、翠玉が辛抱強く問いかけた。

本当は用事などわかつている。碩有の妻となつてからというもの、
三日に明けずやってきては同じことを繰り返すのだから。

「用事というほどでもないですがね。その後どうですか、御館様は

こちらにお泊りになられますか？」

予期していたにも関わらず、翠玉は一瞬返答に詰まった。

「……いいえ」

老婆は大仰に眉を上げて見せる。

「いけませんね。ご結婚されてからもう半年にもなるのですよ？
お気楽に構え過ぎなのではありませんか」

「そうおっしゃられましても。こればかりは、私の一存ではどうにもなりません。御館様はお忙しいのでしょう」

槐苑は彼女を睨み付けた。

「女としての努力が足りないのでは、と申し上げているのです」

またか。

槐苑の問いは、単に「寝泊りしたのか」という意味ではない。

つまり「肉体関係を持ったのか」と聞いているのだ。

領主の家にはこのようなことを気にする人間は多い、それは翠玉も頭ではわかつている。当主が妻に手を出す出さないは、跡継ぎにも関わる重大な問題だからだ。

碩有は今のところ翠玉以外に女性はないが、この先もし他に寵愛する女が出来れば話がややこしくなる。

六天楼ご意見番としての槐苑は「まず正夫人に第一子を。それが争乱なく収まる方法じゃ」と常に言っていた。

言いたいことはわかっているのだが
翠玉は唇を噛み締めた。

「聞けば、御館様は毎日こちらへはおいでになるそうではありませんか。夕餉ゆいけを召して、貴女と語らった後自室にお帰りになるとか。御館様のような成年の男子に、一人寝を続けさせるなど以ての外。奥方様は確かにお美しいですが、たまには紅をさしたり香を焚いたり、しどけない格好なぞしてみてはいかがです？ 若いお二人のこゝと、一つ褥ふしに入ってしまったえばあちらの方も」

「槐苑さま！ 言い方が露骨ですっ」

延延と続きそうな説教を、彼女は顔を赤らめて遮った。老女はきよよんとしている。

「おや。これは戴剋さまの元寵姫とも思えぬ発言ですの。生娘でもあるまいし」

「……それはともかく。理由なんて、ご本人に聞いてください。私は別に、普通に接しているだけです」

「いけませんのう。このままではその内、足元をすくわれることになりかねませんぞ」

「わかりました、わかりましたから！ 私、することがあるので。申し訳ありませんが」

もう礼儀とか半ば追いやって、いつも通りの追い払い文句を言う。にも関わらず、これまたいつも通り槐苑の説教は半刻ほど続いた。

「……今日も長かったですね」

招かれざる客がようやく帰った後、茶器の後片付けをしながら紗甫が笑い混じりに言った。

長椅子の腕置きに顔を伏せた状態で、翠玉は呻く。

「もう、何なのよあの人！ そんなに世継ぎが気になるのなら、碩有様に直接話せばいいじゃない。私だって聞きたいぐらいよっ」

「翠玉様」

紗甫の戸惑う声に、彼女は顔を上げた。

「お前なら毎日見ているから、わかるものね。気を遣わなくていいのよ。……きつと、槐苑様の言う通りなんだわ」

「御館様は、翠玉様を大切になさっているんですよ。一応、戴剋様がお亡くなりになってまだ一年半しか経っておりませんもの」

確かに、そうかもしれないとは翠玉自身も思う。世間一般では、夫を亡くして『まだ』一年半なのだ。一生独り身を通す人だっているだろう。ましてや、当初自分はこの話に反対していた。

だから今の状況を、これ幸いとしていれば良いのだが。

「……ねえ、紗甫」

「はい」

「やっぱり、紅ぐらい差した方がいいのかしら」

侍女は少しの間呆気に取られたような顔をしていたが、くすりと笑って「畏まりました」と、化粧道具を取りに物入れへと向かった。

「今日はいつもと雰囲気が違うような気がしますね」

食材豊かな芸術的とも言える食卓を囲んで、碩有は屈託のない笑みを見せた。

「え……、違うって、どの辺りですか？」

内心どきりとしながら、翠玉はあえて聞き返す。

「どこと言つか……そう、貴女の。顔色がいつもより良く見えます」

気づいてくれたのだ、と喜ぼうとして彼女はふと引っかかりを覚えた。

「それって、いつもは悪いってこと？」

いや、と碩有は幾分か慌てた様子である。

「貴女はそのままでも充分 別に他意はないですよ」

翠玉は思わず顔を赤らめて何も言えなくなった。

「ああ、何だかさらに顔色が良くなりましたね」

「……何言ってるんですか！」

からかう夫の笑顔の眩しさに、直視することが出来ない。思わず顔を料理に向け、食事に集中している振りをする。

戴剋から婚約を言い渡された時が嘘のように、碩有は翠玉に優しくかった。

毎日楼には花が届くし、こうして語らう際に少しでも彼女が興味を持っているとわかれば次の日にはその物が届けられた。

さすがに一度たしなめてからは回数が減ったが、戴剋も似たようなことをしていたから、話を聞いているのかもかもしれない。

黙っている時にはいかにも伶俐れいりそうな顔が、こうして笑うと一瞬にして暖かな印象に変わるのも驚きだった。

「そうそう、明日からしばらく桐きりに行くので、二日ほど夕餉きりは一緒出来ません。お土産を買ってきますので、何か希望はありませんか？」

領主の責務として、彼は度々遠方へも足を運んで現地を視察している。工業の町桐の噂は翠玉も聞いていた。形の良い眉をひそめる。

「お土産はともかく、大丈夫なの？ あの町は、最近良い話を聞きませんが……自ら出向かれるのは危険ではないかと」

碩有は微笑んだ。

「だからこそ行くのですよ。領主が椅子に隠れて命令だけでは、油断して従わない者が出てくるのです。それに、朗世ろうせいや護衛も連れて行きます。心配されるには及びませんよ」

「……そうですか」

持っていた箸を置いて、翠玉は目を伏せた。

戴剋は高齢なものもあり、邸宅からは滅多に外には出なかった。だが碩有は違い、何事も自分で確かめるのを基本としていた。腹心の部下で切れ者と名高い朗世を使って、さらに何人もの精鋭を動かして政治を行っているという。

安寧を貪っていた古参の家臣には、それを良しとしない意見もあるらしい。

「領民から不平の声が上がっているのです。私も以前あの町に滞在していたことがあるが、その時には平和そのものに見えました。何かが変わったのかもしれませんが」

食事が終わると、彼はいつも翠玉の房でしばし話をした。内容は政治のこと、お互いの趣味のこと、家族のこと。さまざまだった。だから今日桐の話題が続いても、翠玉は全く不思議に思わず聞いていた。

「それより、お土産何も希望はないんですか？」

「え、だって桐は機械工場の町でしょう。特産物なんて、螺子ねじとかでは」

大真面目に彼女が言うと、碩有は吹き出した。

「そりゃあそうかもしれませんが。わかりました、螺子以外で何か見つけて来ましょう」

「あ、いえ本当に、気を遣わなくてもいいの。私は」

自分はまた、その顔が見られさえすれば　と思わず口に出そうになった。

何故か槐苑の言葉が蘇る。

しどけない格好をするとか。

「しどけなく、そうじゃなくて！」

「どうしたんですか？」

顔を上気させて激しく首を振り出す妻に、椅子に並んで座っていた碩有は不思議そうな顔をした。

「いいえ！　何でもないのですっ」

今度は、引きつった笑顔を浮かべつつもやけに強く否定する。

「ならば良いのですが。随分と落ち着かないみたいですよ」

心配そうに、彼は翠玉の額に手を伸ばして来た。温かい手の平が、ひたと彼女に触れる。

「熱があるのでは……」

手を離して、今度は自分の額をそこに付けた。

翠玉は固まった状態で、ただ目の前の夫の顔を凝視している。

近い……!

「……翠玉」

「は、はい?」

青年は顔を離すことなく、今日初めて妻の名前を呼んだ。いつもと同じく、ほんの少し照れくさそうに。

「どうやら、調子が悪いわけではないようですね。良かった」

額の感触が消え、あっけなく夫の気配が遠ざかった。椅子から立ち上がったのだ。

「碩有さま……?」

「今日はこの辺りで戻ります。明日、朝早くに発ちますので」

「あ、は、はい」

慌てて彼女も立ち上がり、見送りに戸口に付き添った。

笑顔を見せて去っていく姿に微笑み返して、その背中が視界から

消えると脱力して椅子に倒れこんだ。

「……………紅だって……………効かないじゃない」

ぼそりと呟く。

それでも触れられただけ、進歩したのだろうか。いつもはそれすらもないのだから。

翠玉はすでに碩有に恋をしていた。ここに来るまで、恋愛経験がなかったわけではないのでそれは自覚している。

だが夫は、全く自分に手を出そうとしない。

「しどけない格好、するしかないのかしら……………」

半ば自棄気味に独りごちて、彼女は 明日からの会えない二日間をどう過ごすかと 途方に暮れた。

三 彼我（ひが）の憂鬱（ゆううつ）

領国内のほぼ全ての工事業を請け負う東の町桐は、碩有達が住まう都『鳳』より三十里ほど離れた場所にある。

領主の住まう都は『洛』といい、名を冠して領民は都を『鳳洛』と呼んだ。

極彩色の薨の連なりは洛ならではの繁栄を表して美しい。にも関わらず、さして感銘も受けない様子でぼんやりと眺めながら、公務用の背広姿の碩有は後部座席に座って部下朗世の報告を聞いていた。

「……上納書を見る限り、ここ半年の交易品の取引高は横這い状態です。しかし、私が独自に調査させた関所での貨物通行量は、増加の一途を辿っています。なのにその報告はなされていない。この数字は改ざんされている可能性があります」

広い車内には彼と主の二人きり。運転席は仕切られている為、上部に設けられた小さな窓を通してしか、彼らの会話を聞くことは出来ない。

しかも今は遮断用の内戸を降ろしているから、車内は完全防音となっていた。

内からしか透過しない車窓、外の景色から視線を外そうとしない碩有に構わず、朗世は白晳の色を全く変えることなく報告を続ける。

「町長扶慶殿に上納書の不備を指摘し、理由の説明を求めましたが七日の間音沙汰がございません。彼は先代より町長を勤めておりまして、支持する者は多いと聞いております」

碩有は初めて、顔をほんの少しだけ車内 向かい合って座る部下 に向けた。

「民の支持『だけ』高いとはな」

朗世も頷く。

「町の貧富格差は以前より激しくなっているのにも関わらず、支持は依然高いまま。人心の操作を考慮してもよろしいかと存じます」
「わが陶家も見くびられたものだ……これは早々に処理せねばなるまい」

碩有は端整な面に冷笑を浮かべた。

元々表情に乏しい朗世は、表面上は何事もなくそんな主の顔を眺めながら、内心疑問を禁じ得ない。六天楼で夫人に接している男と、とても同一人物には思えなかったからだ。

物心ついた時から仕えている彼だったが、「こちら」の顔しか知らなかったので始めはひどく衝撃を受けた。

確かに家族に対しては優しい一面を持ち合わせている主だったが、若くもない、義理でもらい受けた妻に対してあそこまで尽くすとは。

「既に園氏^{えんし}らを現地に潜り込ませてあります。工員達の間には不衛生故の病気が広まりつつある様ですので」

碩有の両眼に苛烈な怒りが宿った。

「処置は」

「薬と知識を。隠密裡にはそれが限界でございます」

「そうだな。ご苦労だった。後は奴を片付けてからの話だな」

是、と短く朗世が返事をする、彼はまた車外の風景に目を向け始める。

主をそのままに手元の書類を読みながら整理していたが、ふと眩
きが聞こえて来て目を上げた。

「何かおっしやいましたか」

「ん？ いや、ちよつとな」

碩有は微苦笑を浮かべた。

表情から朗世はおおかたの内容を察知したが、あえて追及はしな
かった。再び書類に意識を戻す。

ややしばらくの間を置いて、予想通り相手の方から問い掛けがあ
った。

「桐の特産物で土産になりそうなものはあるだろうか」

「……夫人へのお土産でございますか」

碩有は頷いた。聞き返す声に熱が全く入っていなかったのは、気
付かれなかったようだ。そこに皮肉が含まれていたことも。

「農耕器具や自動車、産業用機材などが主流な商品ですからね。お
土産となると車辺りになりますでしょうか」

「車か……」

悩む様子に朗世は呆気に取られる。

「考え込まれる必要はございますまい？ あの御方は館から出るこ
となどないのでしょうから」

「いや、少し考えていることがあってな」

嫌な予感がして、朗世は自身に驚いた。何故『嫌な』予感なのか
がよくわからない。主が女にうつつを抜かしているからだろうか？

「他には細工物の装身具などもございますから、そちらの方がよろしいかと」

理論と現実を重んじる彼には似合わず、理由はさておいても車を買わせたくなくて話を逸らした。

「なるほどな、装身具とは良い思いつきだ」

「夫人は瓊瑶（はるかに）を最近お付けにならないと、以前おっしゃっていたのを思い出しまして」

「そうなんだ。お祖父様から贈られたものはしまつてあるらしくてな。着物ぐらいいは身に付けているが」

「夫人なりに気を遣われているのでしょう」

世間一般的な感情としては、前の夫の思い出の品を見せるのは相手に失礼と思うからか。朗世は男女の機微にあまり関心がないので、あくまでも一般論でしかこういった場合にものを言うことが出来ない。

「御館様が新しいものをお与えになるべきでしょう。そうすれば、気を遣う必要もなくなりますから」

「……ああ」

短い返事の後、主はまた窓の外の風景に視線を戻す。だが長年仕えて来ただけに、朗世にはその顔が上機嫌にとても、が頭に付く　なつたのがわかつていた。

凶兆ではない。夫人は必要なのだから……例えどのようなものであっても。

いかに新婚早々だったとしても、当主の責務を疎かにする主ではない。それはわかっている。

けれども彼は有能な臣下の顔に戻り仕事を続ける際に、知らず諦めの溜息を静かに吐かずにはいられなかった。

車で一刻を駆け桐の町に入ると、予想以上の荒廃ぶりに碩有らは顔をしかめた。

「……何だこの変わりようは」

朗世はその呟きに答えられないことで同意を示した。

まず一見して、町の様子が暗い。今はまだ午ひるには時があるとはいえ、あまりに雰囲気が悪く見えるのは、道の隅に身形の悪い者達がうずくまっているからばかりではない。

建物の外壁はくすんで色が悪く、かつて街路樹が植わっていたはずの歩道は殺風景な石畳に変わっていた。役所として町を支える公く文もん関かんなどの公共機関や、周りに並び立つ露天商街でさえもひっそりとしていて活気がない。遠くにぼんやりと見える工場の煙突からはさすがに稼働の証として青黒い煙が立ち上っていたが、ただ空気が悪いことの証明にしかならないとも思えた。

数年前碩有が領主の政務勉強の為に滞在していた時には、朝から夕方過ぎまでさまざまな食物や物資が所狭しと並んでいたのに町民にとっても、貴重な市場であったはずである。

「南なん邑ゆうに回ってみましょう」

主の許可を得ると、朗世は仕切り小窓を開けて運転手に行き先を指示した。

町の区画は『正区』と『間区』に分けられる。

内北の正区は公文関や官邸などの役所、東のそれは富裕層の住宅、西は工場が立ち並ぶ。それぞれを北^{ほく}邑^{ゆう}、東^{とう}邑^{ゆう}、西^{さい}邑^{ゆう}と言い、北東などの庶民の店や家が並ぶ間区を北^{ほく}肆^し、東^{とう}肆^し、などと言った。

陶家が治める町は大体において、以上の様に造りを同じくしている。故に南の正区は歓楽街　今の時間ならばひっそりと静まり返っているはずの　となっていた。

「区の端に車を止めてくれ。歩いて様子を見よう」

部下の意図を、碩有も理解したらしかった。

南に下ると、打って変わって派手な色の建物が目に入る。道行く人はいないが、建物の傷み具合はさほどでもなく、むしろ豪勢に飾られていた。

「どうやら抜き打ちで視察に来たという情報が漏れたらしいな」

碩有は吐き捨てた。

「だとしても、建物までは急にどうこう出来ませんまい。これは相当娯楽施設に力を入れている様子。洛庁への届出もせずに、言い逃れ出来ると思っているのでしょうか」

「……西邑へ回るぞ」

町の産業には決まりがあり、変える場合には鳳洛の公文関『洛庁』に届出、許しが出た場合にのみ変更が叶う。領土内の物資や貨幣の流通に関わるからだ。

守らなければ国は均衡を失い、経済の混乱を招きかねない。

何より領主を主と思わない不遜な行いである。

扶慶という男、ここまで浅慮を為すとは思わなかった。

声の低さにとてつもない怒りを感じて、朗世も黙って後に従い車に戻った。

三 彼我（ひが）の憂鬱（ゆううつ）（後書き）

脚注：瓊瑤と書いて「ほづぎょく」「はあてルビ」です。

言葉自体は、美しい玉やすばらしい贈り物という意味となっております。

四 疑惑の兆し

碩有が訪れない最初の一日は落ち着かず、いた翠玉だったが、気晴らしにと始めた花細工に殊の外熱中してしまい、二日は矢のごとく過ぎ去った。

この地方に伝わる活花は、ただ花瓶に切花を活けるものではなく、緻密な技術によって考えた形に則^{のっと}って花を挿^さしていく。完成度が高ければ、正に芸術品とも見紛うものが作られるのだ。当然時間も結構かかる。

「これでよし……と」

出来上がった花細工を彼女は満足そうに眺めた。
流線美を誇る、絶妙な形の色とりどりの花。

碩有様に差し上げたら、喜んで下さるだろうか。

それでもこの二日、夫のことを考えなかった時はほとんどないと言っても良かった。花を活けている間も、思い浮かべていたのだ。仕草を、声を、言葉を。

触れられた手の平の感触を。

「お美しゅうございますね」

はつと振り返ると、紗甫が食器盆を持って卓の側に立って微笑んでいた。

「まあ翠玉様。食事に手をお付けになっていないではありませんか」

すっかり冷めてしまっている食膳を見て、侍女は困惑の表情を浮かべた。

「あ、ごめんなさい。つい作業に夢中になってしまつて」

「あまり根をお詰めになると身体に毒ですよ？ 温かいものを代わりに持つて参りますから、お食事をなさつてください」

そう言つて膳を下げようとする娘を、翠玉は手をかざして止めた。

「そのままでもいいわ」

「ですが」

「作り直しなんて勿体無いもの。今食べるから、ちよつと待つてもらえるかしら」

紗甫はにっこりと微笑むと「わかりました」と脇に控える。

六天楼に入った時より自分に仕えてくれるだけあつて、主の行動に慣れてくれた様だ。他の使用人には『流石は卑しき庶民の出』と陰口を叩く者もいると、彼女は知っていたが　そうではない者もいるのが嬉しかった。

着物も食べ物も、生家においては一片たりとも無駄にしないで活用していたから、ここに来た当初は驚愕すると同時に呆れもしたものだ。

民の血税を搾り取つて、領主は浴びる様な贅沢をしている、と。

「うん……流石ね。冷めていても美味しいわ」

「料理人に『美味しかった』と伝えておきます」

翠玉は侍女に「よろしくね」と柔らかく微笑んだ。

戴剋は自分に色々なものを買い与えてくれた。それはそれでありがたく、勿体無いものだったと思う。優しくしてくれたのもまた

事実だったから。

ただ、引き換えに『自由』というものは生涯手に入らなくなったけれども。

彼女の生家は事業に失敗し、一家が離散の憂き目を見て翠玉は人買いに売られる羽目に陥った。

滅多に外出しない戴剋が、年に一度の寺参りに向かう途中で偶然馬車に乗せられる現場に通りがからなければ、今頃彼女はどこぞの豪商の妾にでもなっていたかもしれない。

確かに領主の側室、というのには世間一般では妾と同じなのだが。

翠玉は前夫には複雑な気持ちながらも、感謝していた。

「そう言えば」

食事を終えた後、さりげない風を装って切り出した。逸る気持ちを紗甫に悟られるのは少し恥ずかしかったので。

「今日は御館様の戻られる日ね」

「はい、先ほどより表の方が騒がしゅうございますから、もう戻られたかもしれません。奏天楼も人が出入りしている様ですし」

紗甫は膳を手にして「確かめて参ります」と言い残して去っていったが、程なくして怪訝そうな面持ちで戻って来た。

「どうやらお戻りになられたのは間違いない様ですが……奏天楼の方にも荷物が入っているそうです。お客人を連れていらっしやっただけだとは思いますが」

「お客様……？」

南の蓉天楼は公用に使われる棟だから、紗甫の言う通りなのだろう。

だが夫は出かける前、極秘に現地調査に行くと言って出かけたはずだ。領主に刃向かう様な地で、迎えるべき客人とはどんな人間なのか。翠玉は少しばかり引っかかりを覚えた。

流石に問うほどの事はないので、その晩碩有がやって来た時にはすっかり忘れてはいたのだが。

食後にまず彼女の方から自分のお手製の花細工を見せると、彼は手放しで喜んでくれた。

「お祖父様から伺ってはいましたが、やはり貴女は多才ですね。僕は文芸の方はさっぱりなので、尊敬します」

照れる翠玉に「代わりと言っては何ですが」と碩有は懐に手を入れる。

久しぶり　と言っても、会わずにいたのはたったの二日。なのに随分と顔を見ていなかった様な気さえして、どきまぎしてしまう。

「貴女に似合うのではないかと思って、持ち帰りました」

彼は小さな包みを卓に置いた。

細長い、天鷲絨テンジュウモンと呼ばれる異国渡りの布張りの匣ひらだった。

「これは……？」

「開けてみて下さい。螺子よりは増しなものが入っていると思います」

碩有は冗談めかして微笑わいらいった。

恐る恐る匣を手にとって、繊細な意匠の金具を外し蓋を開ける。布に埋もれた中身が目に入った瞬間、思わず息を呑んだ。

「すっかり失念していましたが、桐は装飾品の加工も行っている町

なのですよ。北の瑤ようから石を運び込んで作るのです。貴女には、碧へき玉ぎよくが似合うのではないかと思ひまして」

絶句している妻の代わりに彼は説明した。対する翠玉はというと、余りの見事さに声が出ない有様である。

それは大きな碧玉を縁取った首飾りだった。

瓊瑤の周りには小さな黄緑色の石がならんでいる。その造形美の見事さもさることながら、留め金や首周りの鎖にも蔓の模様が幾重にも重なり繋がっていた。新しいものではないらしく、鈍く光るさまが逆に何とも言えない風合いを醸し出している。

戴剋の元で豪華な装飾品に少しばかり慣れた筈の翠玉の目にも、この首飾りは素晴らしいものに見えた。同時に非常に貴重な芸術品であるということも。

「こ、こんな高価そうなものを、私に？」

彼は頷いて、並んで腰掛けていた長椅子から身体を前にかがめると「付けてもらえますか」と、首飾りを手に取った。

「い、いえそんな。あまりにも……」

恐縮する翠玉には構わず、引き輪の形になった留め具を外す。

「もう持ってきてしまいましたから、辞退はなしです」

笑いながら彼女の首に腕を回して、項うなじの辺りで留め具を繋げる。ぱちり、と音がした。

翠玉は視線を下げ、襟元に広がる美しい光景と　これを夫が自分の為に選んでくれたという事実^{じじつ}にただ啞然としていた。

「ああ、やはりよく似合う」

さつきよりも間近で紡がれる声は心なしか低く、彼女の心に染み入る。

既に息苦しいほどに早鐘を打つ胸を宥めるべく、彼女は「この縁の石は何というものですか？」と質問で場を凌ごうとした。

「橄欖石かんらんせきと言うそうです」

「……聞いたことのない名前ですね。桐ではよく知られているのか
もしませんが」

「いえ、多分珍しいものだと思います。あそこには知り合いがいたのですが、たまたま装身具などに詳しい人だったもので。その人を通して譲り受けたのですよ。百年ほど前に作られたものとか」

「ひゃくつ……!？」

本来それ相応の宝物殿に納められる様な代物ではないか　驚きのあまり、翠玉は伏せていた目を見開いて　故に、自分を見つめる碩有のそれにまともなぶつかってしまった。

「碩有様　」

何かが来る、としか言いようのない感覚に縛られて言葉を失う。

次の瞬間、彼女は碩有に抱きしめられていた。

えっ。

顔が近づいた瞬間、正直なところ「これはもしかして接吻ではないか？」と軽く身構えていた翠玉は、夫の身体の感触に真っ白になりながらも頭の中では混乱を極めていた。

順番を飛ばして来たのかもしれないし、どちらにせよ今日こそこ

ちらにお泊りになるのでは　そう期待したのも確かだ。
碩有の腕の中は、予想以上に心地よい居場所だった。

気が遠くなりそう。

自分の鼓動が、彼に聞こえてしまうのではないだろうかと心配する。ふと気づけば、逆に翠玉の耳にもそれは然りだ。少し早めに思える心音が、寄せた頬の辺りから聞こえてきた。

どの位そうしていたものか、いきなり碩有は彼女の身体をぐいと引き剥がした。

「せ、碩有様？」

呆気にとられて見上げた顔は、複雑そうな表情をしている。そこで初めて、翠玉は彼自身もどうやら混乱しているらしいと理解した。理由は全くわからないけれど。

「今日はそろそろ戻ります」

「えっ!？」

思わず大きな声を上げてしまった彼女を一瞬不思議そうに見たものの、彼はすぐさま扉に向かって歩き出した。

まさに房から出ようとする時、首だけで振り返る。

「その首飾り、僕と会う時には付けてもらえますか」

「は、はい。あ……りがとうございます、大切にします」

慌てて礼を言うと彼は少し照れた様に笑みを浮かべて、去って行った。

「……私、何かしでかしたのかしら」

取り残された翠玉はしばし呆然と先ほどの出来事を反芻^{はんすう}していた。でもまあ、抱きしめてくれたということは全く望みがないわけでもないのかもしれない。

首を彩る、新しい贈り物に触れた。碧玉の輪郭を指でなぞる。膚にあってもひんやりと冷たいのは、貴石の証と聞いていた。

それにしてもどうということなのだろう。最後に離れた時の、彼の顔はまるで。

「私に、触れないと決めているみたいだわ……」

戴剋様と約束でも交わしていたのだろうか　そう思えるほど、

碩有の態度は理解しがたいものだった。

石は冷たいのに、彼女の身体の熱は鎮まらない。

翠玉は己を醒ましてくれるものを求めて、侍女を呼ぶ声を上げた。

四 疑惑の兆し（後書き）

脚注2：橄欖石は、ペリドットをイメージしてください。

五 桐にて

鳳洛に戻る前、西邑に車を向けた碩有らは陶家所有の紡績工場へ辿り着いた。

桐は元々陶家の直轄地、邑の三割近くの敷地を埋める工場は規模も大きく雇っている工員も多い。実に領土内のほとんどの糸の生産をここで行っていた。

「朗世、使いの者を遣って扶慶殿にはしばし遅れると伝える」

車を降りた碩有の言葉で、朗世は主がこの工場を視察するのを内密にしたがっているのを理解した。歯切れ良く返事をして別の車にいる供の一人に指示を出す。その間にも、碩有はさつさと裏門から敷地に入って行った。

傾斜の急な独特の屋根は色も灰とくすんでいて、かつては白壁であつたらう外壁も汚れて漆喰にひびが入っている。百は優に超えるであろう同じ造作の建物が均一に並ぶさまは、まるで廃墟の群に紛れ込んだようだ。建物の煙突から煙は立ち上っているが、人の活気をまるで感じない。

「奥には工員達の住居もあるはずだが……本当にこのような場所で暮らしているのだろうか」

碩有は建物の脇道を進んで、換気をする動力施設の方へと向かいながら顔をしかめた。

「気缶室」と札が掲げられた別棟は、建物の割に扉が小さかつた。扉に手を掛けてみるが、木造のそれは見かけよりも頑丈でびくともしない。

「園氏はまだ来ないか」

朗世は懐中時計を取り出して「少し時がある様です」とだけ告げた。

そもそもこの視察を行うと桐に告げた後、碩有は潜入させる部下園氏にある指示を与えていた。

まず工員の身形と健康状態を報告する事。

それに気缶室の合鍵を作って、決められた時刻にこの場所に来る事であった。

紡績工場はその作業過程でどうしても糸埃が発生する為、換気を良くしなければ働く者達は肺を患う。

気缶室がきちんと動作しているかを確かめるのは、「病気が発生している」という報告の裏づけまたは原因の消去法の為であった。

扶慶が機械の手入れをさせていないのであれば、案内してもらえない可能性があるかと踏んで先回りしたのだ。

「お待たせ致しました」

工員の作業着を着た男が足早に碩有達に近づいて来た。四十代ぐらいに見える、くたびれた出で立ちをしている。髪も櫛を通していないのか、という乱れ具合だ。

「園氏か？ 随分と見違えたな」

「冷静に言わないで下さい、朗世様。この格好は工場内では普通なのですから」

園氏と呼ばれた男は苦笑している。間諜として潜入した彼は朗世の部下、普段は身形に気を遣う風流人で知られていた。

「鍵は作れたか」

上司に促され、園氏は懐からそれを取り出した。

「よくやった」

碩有も労いの言葉を掛けて鍵を受け取る。だが園氏の表情は晴れなかった。

「ですが御館様、少しばかり厄介な事態になりました　扶慶殿が、今この工場に到着されました」

「情報が漏れたというのか」

「何れからそうなったのかは推測の域を出ませんが……申し訳ございません」

跪ひつれいて許しを請う園氏を、碩有は制した。

「お前のせいではなからう。むしろ扶慶がそう暗愚ではないことの証だ。方向が誤っているのが何とも残念だが　また別の方法を考えれば良い」

「……は！　寛容なお言葉、身に染み入りましてございます」

感極まって結局ひれ伏した部下に、特に表情も変えずに朗世は問いかけた。

「それで園氏、扶慶殿は我らが到着しているのに気づいているのか？」

「いえ、それはまだですが……工員達の服装を着替えさせております。建物内も、昨日からいきなり清掃をし出しまして」

受け取った鍵で気缶室の扉を開け、碩有は中に入った。室内を歩

きながら吐き捨てる。

「悪あがきを。せめて体裁を整えるつもりか　朗世」

彼は換気装置の計器を指差した。

「はい」

「報告書を見せてくれ」

朗世が鞆から取り出した書類を受け取ると、見る見る顔が険しくなった。

「機械のこの目盛を見てくれ。現在の稼働出力が数値でわかる様になっっている。一月の工場内装置の稼働数値一覧の総数値を操業日数で割っても、この数値にはならないぞ」

朗世も覗き込んで眉をひそめた。

「そうですね……確かに、報告書では二倍近くの稼働数値になっています」

「考えられるのは他に機械を操作しているかもしれないという可能性だが、届出のある機械は別に報告数値がある。となればもはやこれは、水増し報告しかあるまい」

「工員が病気になるわけですね……しかし御館様。どの様にこれについて証拠を突き付けますか？　確たるものがなければ、のらりくらりとかわされるのが目に見えています」

「確かにそうだな　」

元通りに扉に鍵を掛け、碩有はしばし考える素振りを見せた。だがそれもすぐにやめて、再び歩き出す。しかも正門の方に向かって。

「御館様？」

怪訝そつに後を追う朗世達に、振り返りもせずには彼は言った。

「それは当人に会ってから出方を決めよう」

「ああ、こんな所にいらしたんですか！」

絶妙の時機というべきか、表の方から恰幅の良い五十絡みの如何にも貫禄のありそうな男が姿を現した。背後に何人が供を連れていく。

彼らが近づくと直前、碩有は背後の部下にだけ聞こえる程度の声で「むしる堂々と突き付けて動きを見るのもまた一興。この程度隠せない者、狼狽して余計な足掻きをするかもしれないからな」と嗤った。

「ああ扶慶殿、申し訳ない。どうやら正門を間違えて裏から入ってしまった様だ」

剃刀の様な皮肉だ、と感心する朗世を尻目に、主は余裕の笑みを浮かべて扶慶に歩み寄った。

「はは、御館様は仕事熱心でいらっしやいますな。先に現地を視察すると一言仰って頂けますれば、ご案内致しましたものを」

「どうやら連絡が遅れた様だ。若輩者の至らぬ点、ひとえにお許し頂きたいものです」

台詞とは裏腹のつらと悪びれない態度に、ただただ扶慶は恐縮し

て見せた。

「いえいえ、とんでもございません……こちらこそ報告書の作りなおしが遅れておりまして、申し訳ない限りでございます」

正門へと促しながら、扶慶の口上は続いた。

「作成した担当の者が急病に罹りましてね。何とか報告させながら私が自ら作っております次第で……」

碩有達は正面玄関に辿り着いてやや面食らった。工員達が勢揃いして入り口から内部へと、一列に並んで道を作っていたからだ。

「扶慶殿。ここまで気を遣わなくとも。私は普段通りの皆の姿が見たいと思っているのだが」

何を仰います、と町長は大仰に異を唱えた。

「皆御館様のお出でを心待ちにしていたのですよ。せめてもの歓迎の意を表したいと申し出がありました。何となれば、我々が元気に働けるのは陶家の方々が領地を平和に治めてくださるおかげなのですから」

碩有は一瞬言葉に窮した。主の表情を一瞥した朗世も、そこに激しい嫌悪を押し隠しているのを看取り対応に迷う。

皮肉の応酬だな。

だが次の瞬間、碩有の顔は面を被った様な笑みを取り戻していた。

「それはこちらの言葉でしょう。扶慶殿は民の信頼も篤いご様子。長い年月には様々な出来事があるでしょうに、町を発展させ続けるのはかなりの手腕を問われるものと思います。期待しておりますよ。数値だけではなく、内実の伴った正確な報告を頂ける事を」

「いやはや、お手柔らかにお願いしたいものですが……では工場内をご案内しますよ」

はは、と笑って扶慶は二人に先立って歩き出した。

園氏の姿はいつの間にか消えている。持ち場に戻ったのだろうと、朗世は居並ぶ工員達を視線で一撫でした。

工場の男女の比率はほぼ同数。やや女性が多い、という程度である。領土内の特徴として、男女に職業の別はほとんどない。衛兵でさえも女性がいる位なので、それはごく普通の光景だ。

問題は 清潔そうな作業着を着てはいるものの、皆一様に顔色が良くない点だった。

唇は干からびて皮が固まっているし、指も乾燥して荒れている。確かに普段の園氏の格好では全く馴染めないだろう。

労働者が領主一族の様に装う事は出来ないにしても、多数の人間が健康を損ねるにはそれなりの理由があるに違いない。

そこまで観察して彼は、一步前を歩く碩有の視線がある場所に固定されているのに気づいた。

「御館様、どうかなさったのですか」

どうという事のない状況に見える。並んだ者達の年齢層は結構広い。若い女も何人かいた。彼はその内の一人を凝視している。

夫人に夢中な先刻の様子を見ていたから、すっかり失念していたが možいや気に入った娘でもいたのだろうか、と考えて 漸く彼は、その女性に見覚えがある事に気がついた。年の頃は二十二、三。記憶が正しければ二十三になる筈だ。

様子が変わっていたから、わからなかったが。この娘。

今日は貴重な一日として記憶に残るに違いない。御館様が惚気たり狼狽えたりするなど、かつてない出来事だ。

「……………榮葉」

主の呆然とした声を聞きながら、朗世は思わず我が耳を疑った。

六 亀裂

「聞いているのですか、奥方様」

虚ろな内心を押し隠して、翠玉は椅子に座って猫の莉を撫でながら、いつもの『招かれざる客』に愛想笑いを向けた。

「勿論聞いておりますわ、槐宛様」

毎日手を変え品を変え、よくもまあこうも同じ話題で盛り上がるものだ。

当初はそれでも真に受けて辟易していたが、最近では自然に耳が聞くのを拒んでしまいうらしい。受け流す癖がすっかり身に付いていた。

どうせまた、お得意の『房中の心得』を蕩々と語っていらしたに違いないわ。

桐より戻った直後に会った晩以来、碩有は以前とほぼ変わらない様子に戻っていた。

ただ一つ変わった所と言えば、時折まじまじと翠玉を見つめる様になったぐらいか。

それは息を呑むほどにどこか切迫感をはらんで、尚目を離せないものだった。

決して触れもせず、ただ見つめるだけ。

視線がこれ程までに責め苦を与えられるなんて、今まで知らなかった。

何を思い悩んでいらっしやるのだろう。

せめて、理由を話してくれば良いのと思う。
強い眼差しは、ともすれば自分に何かを訴えたいのかと勘違いしてしまいそうで、苦しかった。

「おやおや、随分と奥方様は悠長に構えていらつしやる。いつまでも御館様を遠ざけられるから、こんな事になったと言つのに」
「……え？」

「殿方は基本的には皆永遠に子供な所があります。人の心は移ろいやすいもの。おあずけを食らつては、さつさと他に鞍替えしてしまう場合だとあるのですよ」

嘆息混じりな言葉に翠玉は眉をひそめた。

この人は、一体何を言っているのだらう？

「あの、槐宛様。それは一体、どういう」

「どうって、南楼の客人の話に決まっているではありませんか」

「南……。もしかして、最近来られた方の事かしら」

ではやはり、碩有は桐から誰かをここに招いて来たのだ。上の空でいた間に、どうやら槐宛はいつもとは違う話をしていたらしい。

怪訝そうに首を傾げる翠玉に、「やはりお聞き逃しになっていたのですね」と老婆はしみじみ溜め息をついた。

「ただの客人ならばこの様な話を致しませんよ。問題は、連れ帰ったのがあの『榮葉』であるという点です」

「榮……？ どなたです、その方は」

少なくとも夫の話には出て来た記憶がない。

「槐宛様。お控えなさいませ」

それまで黙って部屋の隅に控えていた紗甫がいきなり口を挟んだ。
「単なる憶測を奥方様のお耳に入れてはならないと存じます」

常にないきつい調子に、言われた当人よりも翠玉の方が驚いて振り返った。

槐宛は鼻を鳴らして、意に介した様子もない。

「何を言う、紗甫。お前こそ侍女の癖に主人に邸内の話を聞かせないとは何事か。もはや奥方様は枯れ気味の老人の愛妾ではないのですぞ。いつ敵が来るとも知れないと言うのに」

「翠玉様！ 槐宛様のお話を信じてはなりません」

「だから一体何の話をしているのかわからないって」

眉をひそめる女主人に、「客人は女だという話ですよ」と槐宛は吐き捨てた。

「女性？」

「桐の榮葉と申せば、二年前まで御館様の情けを受けていた者なのです。邸の人間は誰もが知っている事実。奥方様だけが知らないというわけには参りませうまい」

「槐宛様！」

叫び声を上げた紗甫は、次いで恐る恐る主人の顔を窺った。

翠玉は答えない。不思議そうな表情をしたまま、まるで凍り付いたかのように見える。

突然それまで彼女の膝でくつろいでいた莉が、飼い主の手が毛を掴むのに驚いて「ギャッ」と短く鳴き声を上げた。

「莉!？」

翠玉が我に返った時には既に猫は庭先へと逃げ出してしまっていた。

「奥様……」

気遣わしげな紗甫の声。彼女は普段通りに侍女を安心させる様に苦笑してみせる。

「どうしたのかしら。……困ったわ。また何処に迷い込んでしまうか……」

「奥方様、どちらに行かれるのですか」

槐宛は内廊下へと足を踏み出した翠玉に向かって鋭い声を投げ掛けた。

「莉を探しに行かないとなりません。申し訳ありませんが、お話はまたの機会になさって下さい」

「お待ちなさい! 猫など侍女に探しに行かせれば 奥方様!」

背中を追う声を全く無視して、彼女の姿は見る間に庭の木々の間に消えていった。

後に残された槐宛は呆気にとられている。

紗甫はこの上なく不機嫌そうな顔をしていた。

「槐宛様。というわけですので、早急にお引き取り下さい」

「何と。そんなざいな扱いにも程があるではないか」

「わたくしも主のお手伝いをせねばなりません。無人の部屋に用向

きもございませんでしょう。さあさあ」

「こゝ、これ！ 押すなど言つのにっ」

立ち上がったその肩をぐいと押しやり、紗甫は無理矢理老婆を部屋から締め出した。

ぶつぶつとぼやく声が廊下を遠ざかったのを確認すると、彼女は庭を思案げな目で眺める。

「翠玉様……」

部屋を空ける、というのは客人を追い返す口実。

主が戻った時、他の者より自分が迎えるのが一番と、紗甫は猫探しの為の人を呼ぶ事にした。

「らーいーっ。 莉、何処にいるの？ 出ていらっしやい」

さわさわと風に揺れる木々を掻き分けて、翠玉は気付けば六天楼より遠く離れてしまっていた。

ここはどの楼かしら……。

ぼんやりと考えながらも、猫探しも何処か上の空である。

さつき、槐宛様が仰っていたのは何だったかしら……確か、そう……

女性を。

夫が女性を連れ帰ったと、そう言っていなかったらうか。

不意に胸が苦しくなつて、思わず手を添えた。

それは。

殿方は子供な所があると言つていたのを思い出す。いつまでも放置していると、他所へ行つてしまふとも。

だが、考えてみれば確か結婚前に夫は「他に思う人がいる」という様な思わせ振りの態度を取つていた様な気がする。だとすればそれは、自分の話ではなく。

「……もしかして、琳夫人ではありませんか？」

聞き慣れぬ女の声がして、翠玉はその出所を求め辺りを見回した。

内廊下も階も様子さまじは西のそれとは変わらないが、開け放たれた室内の様子は生活感が薄い。一目で客房とわかる。

声の主は、その中からこちらをじっと見ていた。

もしかして。

翠玉はその場に縫い止められた様に動けなかった。

「貴女は……」

二十半ばに見えるその女性はあまり顔色がおもわしくなく、疲れで見えた。

だが元々は清廉な美貌であつた事が容易に伺える。知的で儂げな、それはまるで。

私には、きつとない要素。

それきり何も言う事が出来ずにいると、女の方がこちらに向かつて二、三步近寄って来た。

何故か彼女は切なげな表情をしている。

しばらくまじまじと見つめられて、翠玉は幾分落ち着かない気分させられた。

「あの、失礼ですが……何処かでお会いした事でもあったでしょうか？」

問い掛けると女は軽く息を吐いて哀しげに微笑んだ。廊下に膝を付いて頭（うづ）を垂れる。

「いえ。初めてお目に掛かります。……その瓊瑤があまりにお似合いで、つい見惚れてしまいました」

確かに彼女の視線は顔かやや下に向いていた様な気もした。翠玉は首飾りに手を当てる。

「不躰な真似を致しまして申し訳ございません」

「い、いえ。お褒め頂きまして ありがとうございます」

答えながらも何かが引つ掛かる。

「あの、貴女は何故私の顔をご存知なのですか？ 一体何処のどなたなのでしょうが」

女は笑んだまま答えた。

「わたくしは夫人のお顔を直接は存じません。ですが、首飾りの方はよく存じておりましたので、すぐに判りました」

彼女の言葉は柔らかく、他意めいたものは感じられない。なのにその一つ一つが、とても嫌な予感を翠玉に伝えてならなかった。

「……ここは、もしかして蓉天楼ではありませんか」

自分でもぞつとする位、問いかける声は低かった。女は頷いた。

「はい、その通りでございます」

「では貴女は、もしかして」

その先を続けられず、翠玉は黙り込んだ。聞かずとももう わかっていたから。

「わたくしは榮葉と申します。故あって、この度しばらくこちらにご厄介になっております者。夫人には一度お目にかかりたいと」

榮葉の話はまだ続いていたが、翠玉はいきなり踵を返して走り出した。

「琳夫人！」

「ごめんなさい、探し物の途中なの。失礼します」

余りにも混乱していて、振り返る事も出来ない。背中越しにそう言うのがやっとだった。

桐で知り合いに譲ってもらったと。そう碩有様は仰っていたか。か。か。

二年前まで、関係のあった女性。

それは自分と結婚するほんの少し前の話だ。

戴剋が自分を枕頭に呼んで彼と引き合わせたのは一年半ほど前だが、もし以前から内々に話していたとしたら？
勢いを付けて、思考は暗い方へと傾いていく。

お祖父様思いの碩有様。それに当主の遺言は絶対だ。断れるはずがない。

だから自分に今まで触れなかったのだろうか。
庭の半ばまで引き返して翠玉は立ち止まった。

首飾りの留め金を外そうとしたが、指が震えて思うように外せない。
そうこうしている内にふと思いとどまった。

待つて。まだ。……ご本人に、確かめてみよう。

日ごと向けられる暖かな笑顔。

優しい言葉や眼差し、壊れ物を扱う様な仕草。

戴剋も守ってはくれたが、碩有のそれは全く違う。

ただそこにいるだけで安心するのに、それでいて己の何かを深くかき乱される。

あの日々が全て気のせいだったなんて思いたくない。

結局莉を探す事もせず、彼女はとぼとぼと六天楼に戻った。

心配そうにしている紗甫の気持ちはありがたかったが、今は会話を
する気力もない。

一人にして欲しいと告げ、翠玉は長椅子に伏せて時を待った。
いずれ来るであろう、その時を。

妻の浮かない顔に碩有は怪訝そうな顔をしていたが、とりあえず

すぐにはそれを口に出す気配はなかった。

だからいつもの様に今日あった出来事を話した。しかし翠玉は生返事をするばかりで聞いているのかいないのかわからない。それでもあくまでも優しく、「具合でも悪いのですか」と問いかけて来たのだった。

「いいえ」

今までの返事と同じ様な、素っ気なく短い答えが返される。

碩有は困惑の表情を浮かべた。

「では何か……怒っている様に見えるのは、気のせいだろうか」

「……碩有様こそ、私に何か隠されている事がありなのではありませんか」

「え？」

低く、何かを堪える様な震えた声。驚いて彼は妻の顔を凝視した。

「翠玉……？」

「今日、蓉天楼で榮葉さんとおっしゃる方にお会いしました。槐苑様より、昔……ご寵愛なさった方だと伺いましたが、本当ですか」

平静を装って言葉を紡ぐのは大変な労力が要った。

言葉が震えない様に、上ずらない様に。

もう泣き出してしまいそうな程、言いたくない台詞だったから。せめて「出任せだ」と否定してくれないだろうか。

夫の顔を見るに耐えず、顔を背けていたのでどんな表情をしていたのかはわからない。

しばらくの間、碩有は無言だった。

「 本当です。だがもう、それは二年も前に終わった事だ」

ようやくぼつりと、彼は答えた。声音には不快さが滲んでいる。

「ならば何故、今頃こちらにお引取りになるのですか？」

「それは今、残念だが答えるわけにはいかない」

「何故ですか」

「貴女の知るべき事ではないからです」

不快さに苛立ちが加わったかに思える、初めて聞く低い声。

それで翠玉の砦が決壊した。怒りを瞳にみなぎらせて、正面から夫を睨む。

「そうでしょうとも、夫婦とは言っても形ばかりのもの。隠し事の
一つや二つあってもおかしくはないでしょうね。戴剋様が亡くなっ
て、もう一年半経つのです。義理は果たしたのではないですか？」

碩有は傷ついた様な顔をした。

「翠玉、貴女は誤解しているのだ。私はそんな」

「何がです？ 最初に貴方は仰ったわ。『思う方がいるのなら、そ
れなりの方法がある』と。私の事など構わず、そちらに行かれたら
宜しいのです 見えない場所で仲良くされるには、一向に構いま
せんもの」

怒りは嘘を次々と呼び寄せた。どうせ叶わないのなら、目に付か
ない場所で幸せになって欲しい。

「翠玉！」

僅かに翠玉の身体が跳ねた。

「本当に そんな風に思っているのですか」

場違いな位穏やかな声だった。

いつもの様に椅子に並んで座っている。伸ばされた手が彼女の華奢な肩を掴むのにそう時間はかからなかった。

「せ……碩有……様……？」

「私が」

視線は熱をはらんで見る者を射抜き、翠玉は自分が夫の逆鱗に觸れてしまったのをようやく悟った。

「どれだけ先に心を掴もうとしても、貴女はそんな風にしか私を見てくれないのですね」

一瞬の出来事だった。翠玉を横抱きに抱え上げると、碩有は房を奥へと大股で突っ切る。

寝台の上に妻のその身体を投げ出した。

「ち、ちょっと、待ってください。落ち着いて」

常にならない様子に恐怖さえ覚え、夫の身体に手を当てて何とか押し戻そうとする。が、びくとも動かない。

灯火の届かない寝室は薄暗く、碩有の下に組み敷かれた翠玉に闇が訪れた。

不穏な気配の、闇。

「それとも 最初から、祖父の妾として扱えば良かったのか」

聞く様に吐息と共に吐かれた言葉は、翠玉には死刑の宣告の様に聞こえた。

七 桐にて

扶慶からの説明を受けつつも、碩有達は一通り施設を見て回った。事前に浮かんだ疑問を裏付ける様な設備の老朽化。

例え今日明日清掃した所で、広大な工業地帯全ての体裁を整えるのは不可能に近い。それをさも誇らしげに、町長は己の管理を説明している。

「御館様、今晚はこちらにお泊まり頂けるのでしょうか？ 歓迎の酒席を設けてございますよ」

紡績に次いで車、装飾品と工場を立て続けに見た後車に乗り込もうとした碩有に扶慶は申し出た。

「お気遣い有難く思います。ですが、此处には二日の滞在を予定しております。宿を提供して頂くだけで充分ですよ」

愛想笑いで辞退する主に「そう仰らず、この町にも良い酒がございましたな」と彼は食い下がった。

「御館様は何年か前にこの町にご逗留なさった事がございますでしょう。私はその頃お会いする機会はありませんでしたが、旧交を暖めるべき懐かしい方もおられるではありませんか」

びっくり、と碩有の眉が動いた。

叶うも何も、先代のみを畏れ跡継ぎの若造などと齒牙に掛けなかつただけではないだろうか。

少なくとも今までの扶慶のその様な言動は、園氏によって逐一彼に報告されていた。

「……そうですね。ではご相伴に与りましょうか」

扶慶のたるんだ丸顔が喜びに明るくなった。

「おお。もし良ければ何なりとご希望をお伺い致しますぞ。肴でも女でも、卓に揃えて見せましょう」

では一つだけ と、彼は工場の方を仰ぎ見てから微笑んだ。

「紡績工場で見た娘を呼んでもらえますか。私の知己でしてね……」
「もしやそれは、榮葉という娘ではございませんか？」

榮葉、と扶慶の口から言葉が出た瞬間、彼の端正な顔を嫌悪の表情がよぎった。

「ご存知ですか？」

確かに榮葉はこの町の娘。長が知らぬはずもないが、この男の口から名を聞くと、ひどく嫌な予感がしてしまう。

扶慶は好色でも有名だ。しかも、聞いた限り若い娘ばかりを好むという。

「ええ勿論ですよ。あれはこの辺りでは一番の器量佳しですからな」
「風の噂に、結婚が決まって余所の町に移ると聞きましたが。まだ桐にいたのですね」

扶慶は記憶を辿る様に、目を宙に這わせた。

「ああ、そう言えばそんな話もありましたな。

残念ながら、破

談になりましてね。今は縁あって、私が屋敷に引き取っております」

桐の正区の中心部にある扶慶の屋敷は、それだけを見れば大層豪華なものだった。

公邸であるにも関わらず、贅を尽くした佇まいは寂れた他の住宅街とは全く趣を異にしている。故に遠目にはひどく浮いて見えた。

敷地や建物の形さえも、他の町長邸よりは随分と大きい。増築された離宮や四阿^{あずまや}、庭には見事な築山に鳥や瑞獣の銅像が並ぶ。

扶慶は侍女達に酒肴を持って来る様に指示し、最後に「榮葉を呼んできなさい」と付け加えた。

「むさ苦しい処ではありませんが、どうぞおくつろぎください。あの娘も、もうしばらくで参るでしょう。しかしお目が高い。榮葉は佳い女です。少し取り澄ましている嫌いがあるが、教養高さ故風流に長けてましてな」

碩有は黙して答えない。扶慶は場を取り繕おうとしたのか、「いえ、勿論御館様がお持ちの瓊瑤には比ぶべくもございませぬが」と続けた。

「何の話です？」

「またまたご謙遜をなさいますな。六天楼に一瓊^{いっけい}ありとは有名な話でございますよ。閨房を彩った先代様より譲り受けた玉なれば、さぞやのものと思われませんが？」

それが『何』の事を指しているのか、碩有も朗世もわかつていたが、表立って名前を挙げられたわけではない。正面きって怒る機を逃した。

「……瓊瑤ならば倉にあるが、私が譲り受けたのはその様な『もの』ではない」

碩有は抑制された声で穏やかに答えるのが精一杯だった。

確かに、この領土内では『妾の譲渡』が半ば公然と行われている。身分卑しき女性だとしても、貴人が己の所有物と認めた場合、その女は主の名誉を受ける者になるのだ。

つまり、主が公けに宣言すれば妾といえども貴人に準ずる資格を得られる。翠玉がそのいい例だ。流石に領主の正妻にしたのは珍しい事ではあったが。

だから扶慶の様な考えの人間も当然存在する。咎める者の方が少ない位だ。

だが。

「おや、これは失礼を致しました。玉なれば眺めるのみで摘むに非ずですか　どちらにせよ、ご寵愛が深いというのは間違いない様で」

苦笑混じりの扶慶に彼が殺意めいたものを覚えたその時、客間に使用人が料理を持って次々と現れた。

「ここは堪えて頂きますよ、碩有様」

「わかっている」

小声でたしなめる朗世に同じく囁いた。

どこからこれだけの食材を調達出来たのか、疑う程の料理が次々と運ばれて来る。海のもの山のもの、それらが芸術的な形に積みあがって皿に載っている。いずれもこの辺りでは珍しい料理や珍味ば

かりだった。

余りの豪華さに、二人とも絶句して仮初の賛辞すら浮かばなかった。

貧乏な振りをすれば良いものを。愚かにも程がある、と。

ようやく料理を捧げ持つ者の列が途絶えたかという頃、高台に瓶子と杯を載せた娘　榮葉が部屋に入って来た。

彼女は卓の手前で膝を折り、膳を掲げたまま頭を垂れる。

「ようこそいらっしゃいました。ごゆるりと、おくつろぎくださいませよう」

全く感情の窺えない声だった。

「おお、榮葉。こちらに来て、御館様に酌をして差し上げなさい」

はい、と返事して彼女は碩有、朗世、扶慶と順に杯に酒を満たしていった。見るのは手元ばかりで、碩有に視線を合わせようとはしない。

碩有も彼女を見なかった。代わりに朗世に目配せをする。

己の部下が足元から扶慶の死角になる様に小さな紙包みを取り出すのを確認すると、碩有はにっこりと愛想笑いを浮かべた。

「流石は扶慶殿。かように桐の食が豊かであるから、領民より指示を得ているのでしょうね。素晴らしい」

「いやいや、御館様からその様なお言葉を頂けるとは。この扶慶、汗顔の至りでございます」

酒で上気した顔ににやけ笑いを浮かべて「ささ、もっと召し上がってくださいませ」と料理を勧めた。

「美姫の酌も結構ですが、労をねぎらって私からも酒をお注ぎしましょう。　　榮葉、瓶子を貸してくれるか」

扶慶と客人の間を行き来していた娘はびっくり、と肩を震わせた。彼は榮葉と視線を合わせ、小さく頷いてみせる。

無言で差し出されたそれを受け取り、後ろ手に素早く朗世から紙包みを受け取り手の平に隠し持つ。

「いやはや、これは何と恐れ多くてとても……」

「まあそう言わず、ぐっと一気に飲んで頂きたいですね」

「そうですね、ではお言葉に甘えて」

会話に紛れて包みを開いたので、扶慶の耳には何かがさらさらと瓶子の口に流れ込む音が聞こえなかった。言われるままに、並々と注がれた杯を仰ぐ。

彼は酒も強い自負があると見えて、一瞬の内に飲み干してしまっ

た。
「そうそう、先程の話ですがね」

赤ら顔に愉悦の表情を浮かべる。

「瓊瑶は例えが違うのならば、鳥でしょう。『貴人鳥を愛でる』と歌人も申します故。飼い慣らされた鳥なれば、さぞかし良い声で啼なくではありませんかな……」

ガタン、と激しい音を立てて椅子が倒れた。

「碩有様！　落ち着いて下さい」

朗世の鋭い叱咤に、彼は身体の傾いた扶慶の胸倉を掴んだ右手を離す。床に横倒しになっている椅子を元通りに立てて座りなおした。それでもこの上なく険しい顔をして、卓に突っ伏した頭を睨み付ける。

「……下衆がー！」

「私もこの男は殺しても良いと思いますが、もう少しだけ生かしておきましょう。そうすれば、無様な間抜け顔を見れますよ」

淡々と進言しながら、手際よく彼は主に鞆より出した書類を渡した。

「あ、あの……」

おずおずと話しかける榮葉の目の前で、碩有は動かない扶慶の右手を取った。人差し指を掴むと、卓に同じく朗世が置いた朱印台にそれを当てる。更に逆の手に持った書類に塗料の付いた指を押し付けた。

「……これでもう、こいつに用はない」

指を布で丁寧に拭き綺麗にすると、拇印の付いた書類を朗世は鞆にしまった。

碩有は椅子の背に身体を倒し、改めて榮葉に顔を向ける。薄く笑った。

「気にするには及ばない。酒に薬を仕込んで眠らせただけだ。……まあ明日の朝まで殴っても起きないだろうが……久しぶりだな、榮葉」

彼女はその言葉を聞くなり、いきなり地に跪いた。

「榮葉？」

「申し訳、ございませんっ……………！」

唐突な展開に彼がすぐには動けないでいると、「外で見張っております」と朗世が部屋から出て行った。

二人きりになったのを確認して、碩有は榮葉の肩に手を掛け頭を上げさせる。

「一体、何があつた？ 何故、扶慶の処になど」

答えを聞く前に、彼女の様子を見た瞬間に大体事情を察してはいた。

最後に会つたのは二年前。人を変えるには十分な時間だったとしても、榮葉の面やつれは常軌を逸していた。余程辛い目にあつたと思えない。豪華な着物と宝飾品に今は身を包んでいるというのに、ここまで憔悴する理由はただ一つだろう。

「……………婚約は破談になりました」

心労。それしかない。

「この男のせいか」

榮葉は答えなかったが、はらはらと頬を零れ落ちる涙が全てを物語っていた。

「くそっ……！」

碩有は辺りを見回した。卓の上にあつた魚介料理の為の串を手取る。

垂直に持つと、その手を扶慶の頭目掛けて振り下ろした。

「お止め下さい！」

慌てて榮葉が止めに入る。

普段からは想像出来ない程、彼は激昂していた。

「何故止める！？ 今ならこいつを自殺に見せかけて始末する事も出来るのだぞ。私が其方を手放したのは、こんな畜生の自由にさせる為ではない！」

振り上げられた腕を掴んだまま、榮葉は哀しげに笑う。

「そのお言葉は嬉しゅうございますが、貴方様の手を汚す価値もこの男にはありません。それに……親も親戚も、この街で生計を立てております。万一屋敷の者にでも知れたら、どうなるか！」

ゆっくり手を下ろし、碩有は椅子に力なくくずおれた。卓に両肘を突き手で顔を覆う。

「……婚約者は、吏^じ庚殿はどうしたのだ。其方をあれ程望んでいたというのに」

「吏^じ庚様には……私から手紙でお断りをさせて頂きました。ここに困わればばらくの間は、部屋を出る事すら叶いませんでしたので……」

その言葉の裏に潜むおぞましい事実、碩有は絶句してしばらく言葉もなかった。

榮葉と彼が出会ったのは五年前、鳳洛を離れ桐に遊学していた際の話である。身分を隠し経済の勉強と正区の一角に部屋を借りた彼と、実家がすぐ隣にあった彼女は顔を合わせる内に親しくなった。男女の仲になつて三年が経った頃、碩有が鳳洛に戻らねばならなくなつた。

連れて行くのかと考えた矢先、それを告げる前に榮葉から別れ話を切り出して来た。

「他に思う人が出来た」と。領主の側室にはなりたくない、とも言つた。

本来ならば次期領主の情けをはねつけるなど、有り得ない無礼だ。だが碩有は追う気にはなれなかつた。榮葉本人の心が他所にあるのに、無理強いをすべきではないとも思った。相手の男には複雑な感情を覚えたが、吏庚は富裕な良家の出、何より誠実な人柄に結局納得してしまつた。

時を置かず予定通り彼は鳳洛に戻り、直後祖父の病を知る

「吏庚様からは今でも手紙が届きます。でも、どうする事も出来ません。……幾度扶慶様に申し出ても、撥ね付けられ暴力を奮われるだけで。逃げ出すのを恐れるのか、最近では何処に行くのにも連れて行かれます」

榮葉は泣き崩れた。

「こんな姿を貴方に見られるとわかつていたら 工場になど決して参りませんでした」

「榮葉……」

「この方は私を物として見せびらかしたいだけなのです。閉じ込め自由を奪い、着飾らせ贅沢を与えるだけ。そして意のままにならなければ力づくで従わせようとする……もう、何の為に貴方から離れようとしたのかわからなくなつてしまいました」

せめて彼女を宥めて嘆きを受け止めようと、手を伸ばしかけた頃有の動きが止まった。

慟哭の合間に、途切れ途切れに紡がれる言葉。

閉じ込めて自由を奪い。

着飾らせ、贅沢を与えるだけ。

勿論榮葉を哀れに思う気持ちに嘘偽りはない。だが。

腕の中に他の女を抱きとめながら、彼は遠く鳳洛に置いてきた女を思い眩暈めまいを覚えた。

立場こそ違えど、まるで自分がしている事に似てはいないだろうか。

八 恋着（前書き）

ここから軽い性的描写が入ります。

苦手な方はご注意ください。

八 恋着

「妾」という言葉に、翠玉の胸が痛んだ。

息が苦しくなったのは、寝台に押さえ付けられ身動きが取れないからだけではない。

視界を塞ぐ夫の顔は影になっていて、どんな表情をしているのかはよく見えなかった。だが何処かが痛むのか、という様な苦しげな様子は何となくわかった。

それでいて危険な雰囲気を漂わせていて、抵抗するのも躊躇ためらいわれたのだが。

「……貴方こそ、私をそんな風に思っていたのね」

視線を逸らし、不自由ながら首を横に回して呟く。

これは本人以外誰も知らない事だが、戴剋は生前翠玉に指一本触れなかった。

生家にいた頃に婚約者もいた。しかし清らかな関係で終わった為、当然今も男性経験はない。戴剋の本意は今となっては不明だが、側室とは言っても人目に触れさせず、ただ大事な孫娘の様に扱われていた。

世間一般の側室がどの様に見られているか、彼女も知らないわけではない。ましてや自分は戴剋が亡くなる寸前まで、片時も離さず側に侍していた。いくら遺言があっても内実は所詮身分低い愛玩用の女、そういう扱いなのだろう。

結婚当初は翠玉もある程度の覚悟はしていた。けれど碩有は自分を本当に大事に扱ってくれたから、この人は違うのだと思い始めていたのだ。考えてみれば高が結婚して半年。仮面が剥がれただけの事かもしれない。

そう思うと、何もかもがどうでも良いと思えて来た。

「ならばその様に扱われたらよろしいじゃありませんか……もう、思い悩むのは沢山です」

翠玉は目を閉じた。

何だかよくわからないが、怒らせたのだから殴られたりするかもしれない。せめてその時、碩有の顔を見ていたくなかった。

自分がよく知る彼は、いつも優しく暖かに微笑んでいたから。

全くの暗闇が訪れる。碩有と己の息遣いだけが、彼女の五感を支配した。

どの位そうしていたものか。予期したそのいずれも訪れず、恐る恐る翠玉は目を細く開けた。

いつの間にか、身体が自由になっている。碩有は上体を起こして妻から離れていた。

「……済まなかった。少し、取り乱してしまった」

寝台の縁まで動いて、向こうを向く様に腰掛け前かがみになる。

肘を膝に付け、両手で顎を支えた。ひどく打ち沈んでいる風に見える。

「確かにこれでは、あの男と何も変わらないな……」

小さな声で、ぼそりと呟く。

「碩有様？」

立ち上がった背中に翠玉は思わず声を掛けた。

「しばらく、こちらには来ません。全てが片付いたら、改めて事情

を話しに伺います　　ですが」

碩有は振り返り、いつものあの思いつめる様な目で彼女を見つめた。

「私は榮葉をここに置くつもりで引き取ったわけではない。彼女とはこれからどうこうする気も全くない　　妻は貴女だけだ。それだけ、信じていて欲しい」

翠玉が咄嗟とつさに返事出来ずにいる内に、彼は戸口へと歩き出してしまった。

「……待つて！」

寢台から転がり落ちる様にして夫に追いつき、背中に縋りつく。今この人を去らせてはいけない、そう思ったら身体が動いてしまっていた。

広い背中は凍りついた様に動きを止めている。
構わず彼女は頬を当てた。しどけない格好など出来はしないが
思えば、彼女から夫に手を伸ばしたのは結婚以来初めてだ。

「行かないで、ください」

「翠玉……？」

「私が飾られるだけの妻でないと言うのなら、証明して見せてください。それともこんな事を言う女は、『妾』扱いをされますか？」

啖呵を切ったはいいものの、それ以上どうしていいかわからず、不安な面持ちで翠玉はただ彼を見上げていた。

ゆっくりと振り返った彼は、何ともいえない表情を浮かべた。あまりに妖艶な印象に、瞬時に翠玉の心音が早くなる。

大それた事を言ってしまったのかもしないと、少しだけ後悔した。

「……いいえ。でもそんな風に言われると……」

低く間近で囁いたかと思うと、彼は上体をかがめ妻の唇に自分のそれを重ねた。

軽く触れるだけだったものがあつという間に深く激しくなり、頭の奥が痺れそうになる。

「私の歯止めが効かなくなるかも……しれません」

慣れない舌の動きに戸惑う翠玉から一瞬唇を離し呟くと、再び重ねて絡め取り、繰り返す。

ようやく開放された時、既に翠玉は身体に力が入らない状態になっていた。床に倒れそうになる身体を抱き上げ、碩有は寝台に今度は優しく横たえる。動きはよどみなく、唇で顔から身体をなぞりながら帯を解き、次々と妻の衣服を脱がしていった。

口付けが終わった時点で頭が真っ白になっていた翠玉は、気づけば自分の上半身が露にされている有様だったので、更に混乱した。出来るものなら逃げ出したい。赤面しながらも、薄明かりの下に初めて見る夫の身体に目が惹き付けられる。

背広をすらりと着こなしていた普段とは違って、無駄なく付いた剥き出しの筋肉が見えた。仄かな灯りに鎖骨から連なる隆起が照らされ、美しい中にも猛々しさを思わせる。

宣言通り碩有の動きは止まらない。常々彼女が密かに見惚れていた長い指で、唇で、舌で全てを感じ取ろうとするかの様に触れる。その度に、白い肌はそれに反応し薄紅色に上気していった。身体を中心に落ち着かない感覚に支配される。

びりびりと弦を弾かれる様な、かつて感じた事のないそれに翠玉

が戸惑っていた時、夫の指がその場所に入り込んで来て思わず声を上げた。

「え……待って……そんな」

碩有は妻の制止を聞き入れなかった。ただ掠れる声で、

「……力を抜いて」

と言っただけで、指を更に動かし奥に突き進む。

およそ人間の指が入るなど想像も付かなかった場所に、それが入り込むだけでなく中をかき回されるとは、信じがたいと共に、恥ずかしくて堪らない。しかも動きに伴って甘い痺れのような感覚はどんどん上昇して行く。

溢れ出るもので、やがて指は水を混ぜるのに似た音を立て始めた。

「ああっ……！」

自分が出しているとは思えない程、切なげな声が漏れる。

碩有の指が更に奥へと進んだその時、彼は唐突に動きを止めた。

驚愕した様に妻を見る。

「翠玉、貴女はもしかして」

「え」

何かおかしい事でもあったのだろうか、翠玉も不安げに見返した。

だが次の瞬間には碩有は彼女の唇を自分のそれで塞ぎ、更に指の動きを激しくした。

荒い息遣いと、お互いが動く音が響き渡る。

理性は根こそぎ奪い去られ、翠玉は深く考える余裕を全く与えられなかった。

故に受け入れた時に夫が一層自分を気遣い始めた様子にも、翌朝目が覚めて冷静になるまで、さして疑問を持つ事はなかったのである。

まさか、初めてだとは思わなかった。

疲れきって寝入ってしまった妻を腕に抱きながら、碩有は愕然としてその寝顔を見つめていた。

普段は天真爛漫に見える翠玉が快楽に惑う姿は艶かしく、触れた瞬間から彼は己を制御するのが非常に難しいと悟った。中に入る時は流石に何とか自制したが、今も穏やかに寝息を立てている姿を眺めるだけで、切実な衝動にともしれば駆られそうになる。

これだけの美しい女を、祖父は何故手付かずで置いたのだろうか。病み付くまでは健康そのものだったと、医師からは聞いていた。最盛期には数十人も美姫を六天楼に揃えた戴剋が、最後に迎えた側室に何もなかった、というのは俄かには信じがたい。それだけでなく、翠玉への寵愛ぶりは屋敷内に知れ渡っていたのだから。

翠玉を、大切にするのじゃぞ。

戴剋の言葉が、脳裏に蘇る。

祖父は気づいていたのだろうか。自分が遊学を隠れ蓑に屋敷に寄り付かなくなった理由を。

碩有は汗に湿って額に掛かった翠玉の前髪を、手を伸ばして払い除けた。長く艶やかな黒髪は、乱れた後を示して枕に滝を形作っている。

「…………ん…………」

腕の中で、僅かに身じろぎし吐息が漏れた。煙る様な睫毛に縁取られた瞼が震える。

今目覚められたら、自分はまたも執拗に妻を求めてしまつかもしない。

だがそんな碩有の危惧を嘲笑うかの様に、翠玉はまたも深い眠りに落ちて行った。僅かに上下するきめの細かい肌　胸元には、碧玉の首飾りが相変わらず煌いている。

安堵と落胆の入り混じった複雑な思いで、彼は夜明けまでの僅かな時間を眠らずに過ごした。

己の中の『執着』という名の魔物と戦いながら。

九 囚われ人

碩有様？

頬に柔らかく触れられる気配を感じて、翠玉は眠りの世界から徐々に抜け出ようとしていた。

現つとも思えぬ不確かな意識の内に、自分に寄り添っていた夫の温もりを感じていたのを覚えている。

そうだ、昨晚……。

『私がお飾りの妻でないと言うのなら、証明してみせて下さい』

碩有は彼女に証明してみせてくれた。充分過ぎる程に。

私つたら、何て台詞を。

記憶と共に羞恥を取り戻し、勢いよく瞼を開ける。

うつすらと光が射し込む寝台の中、猫の鳴き声が聞こえた。

「……莉」

どうやら、頬を撫でていたのは莉だったらしい。

「何だ……お前なの」

首を巡らせて左を見ると、寝台には自分と枕元に座っていた白い毛玉の様な姿の愛猫のみ。応える様にまた一鳴き声があった。

上半身を起こして、莉を抱き上げようとして気付く。

私、寝着を着ている。

一瞬昨晚の事は妄想が為せる夢かと思ひそうになったが、首には首飾りが掛かったままだ。辺りを見回しても確かにいつもとは寢具の様子が違う。普段上げてある帳とばりが下りていて、外が見えない様になつていたのだ。

となれば導き出される答えは一つしかない。

「あの、翠玉様…… お目覚めになられましたか？ もし宜しければ、帳を開けさせて頂きますが」

ぼんやりと人影が布地に写つて、紗雨の躊躇いがちな声がした。

翠玉は慌てて首飾りを外すと「ええ、いいわ」と出来るだけ冷静に返す。

程なく音がして、開けられた場所から清々しい光が真つ直ぐ彼女に降り注いで来た。朝というには、時が過ぎているのだとようやく気づく。

「おはようございます」

侍女の振る舞いはいつもと変わらない。変わったのは自分の方だろう、振り払おうとしても昨夜の出来事が頭から離れない。

「湯殿の支度が出来ておりますので、ひとまずこちらにお召し替えを」

差し出された着物を羽織ろつと、寝台から立ち上がる。途端に全身にきしむ様な痛みを覚えた。

怪我のそれまでは行かないが まさか、昨夜の行為のせいだろ

うか。そう気づくと顔が火照るのを止められない。

「どうかなさいましたか？」

「あ、いえ。何でもないので。それよりも、この子をお願い」

翠玉は猫を侍女に預け、覚束ない足取りで房の隣の湯殿へと歩いていった。

夫婦というものが、あの様な真似をするなんて知らなかった。

湯殿を使えば頭もさっぱりするかと思えばそうでもない。むしろ身体が暖まって、ますます思考ばかりが空転している気がする。

留守を紗甫に任せて中庭の四阿あずまやに出向き、脇を流れる遣水やりみずを橋から眺めながら彼女は途方に暮れた。

次に碩有様とお会いする時、どのような顔をすれば良いのだろう。

生家にいた時も六天楼こくに来てからも、こういった類の知識に付いて知る機会はほとんどなかった。知っていたら、あんな事はとても口に出せなかつただろう。

「……はあ」

思わず溜息が零れる。

「こんな所で溜息ですか」

背後から声がして、文字通り翠玉は固まった。

「全く貴女は、西楼の掟を悉く無視してよく出歩きますよね」

怒りの声ではない、諦観とも取れる穏やかなもの。ただ声を掛
けられただけなのに、全身が震えた。
恐る恐る振り返る。

「……碩有様。どうしてここに？　まだ、執務中では」

碩有は破顔した。

「少しばかり抜け出して来たのです。庭に貴女の姿が見えたもので、
また迷っているのかと」

翠玉が辺りを見渡すと、確かに遠目にはあるが誰かの部屋が木
々の合間に見える。一人になりたくてぶらりと庭に出た。偶然見付
けた瀟洒なこの建物が気に入って来てみたのだが、こんなに奏天楼
に近かったとは気付かなかった。

「わ、私だっていつもそんなに迷ってばかりいませんよ」

ばつが悪くなって、つい尖った言い方になってしまう。

だが碩有は気分を害した様子もなく、彼女の隣に立って橋の欄干
に手を掛けた。

「そうですか？　貴女の飼い猫、莉でしたか　あれもよく迷い猫
になりますよね。飼い主に似ると言うのは本当らしい」

翠玉は答えに詰まった。確かにそうかも、と思ってしまう。だが。

「籠に入れたり紐に繋ぐのは可哀想だから、放し飼いにしているの
です。ちよつと歩いてばかりだけど……猫は本来、気紛れなもの

でしょう?」

言い逃れてみようと試みる。碩有はそれには答えなかった。代わりに指を伸ばして彼女の首筋に触れる。白い中にそこだけが赤く、色づいていた。

「なっ」

「……ここも、痕あとになってしまいましたね」

翠玉は飛びすさる勢いで夫から離れ、指された場所を己の手で隠した。召し替えの時にも考え事をしていてろくに見ていなかったのが迂濶だった。紗甫に見られたに違いないと思うと、顔に朱が上る。

「ほ、本当ですか!？」

生憎と鏡の様なものは持ち合わせていず、遣水を覗き込んでみるしかなかった。せせらぐ小川は日の光を反射して穏やかに流れ、人の姿を鮮明に捉えるには用を成さない。

ふと、伸ばしたままの手を空中で静止させ、碩有が黙ってこちらを見ているのに気づいた。

「あ、いえ別にその」

逃げたわけではない　　そう言おうとした時、彼はほろ苦い表情を浮かべた。

「怯えさせてしまった様ですね」

「ち、違います。今のはものの弾みというもので」

否定しようとして手を振った。その指が、彼に一本一本絡め取られる。

「でも半分は貴女にも責任があるのですよ。……気づいていない様ですが」

後頭部が別の手で引き寄せられる。

「貴女がこうして此処に在るだけで、どれだけ私が」

近づいて来る顔に抗いがたい磁力を感じながらも、翠玉は目の前に自由な方の掌をかざすのが精一杯だった。

「ま、待って下さい！ まだ昼日中ではないですか。こんな場所で誰かに見られたら」

碩有は待ったを掛けた妻の掌を避けもせず、笑って言った。

「では昼でなく、人に見られる場所でなければ良いと受け取っているのですね」

「何言っているんですか！」

今までの穏やかさが嘘の様だ、翠玉は狼狽えた。こんな困らせる様な事を言う人だったなんて 確かに、引き金を引いたのは自分かもしれないが。

「……翠玉。貴女は此処から自由に出たいと思いませんか」

不意に聞こえた、真剣な声音に驚いて夫を見上げた。自分の掌がまだそこにあるせいで、表情の半分は見えないが 黒い双眸はもの問いたげで、悲哀に似たものが感じられる。

「それは一体、どういう意味ですか？」

一瞬嫌な予感がして、翠玉は眉根を寄せた。

「言葉通りです。正室も側室も、当主の妻は六天楼から出る事が表向きは禁じられて来ました。私は以前から考えていたのです。自分の妻には外を見せてあげたいと。もし望むなら、外出用に車を使える様にしますよ」

「あ……なるほど。そうね、確かにそうなれば嬉しいと思うわ」

思わず安堵の溜息を付いて笑った。

「翠玉、もしかして何か早とちりをしたのではありませんか」

怪訝そうに凶星を差されて目を逸らす。まさかここから放り出されると思ったなんて、絶対に言えない。

「何でもありません。それよりそろそろ、開放していただけませんか。お仕事に戻らないと部下の方々が探していると思いますよ」

ほら、人の声がする　　そう言おうとして翠玉が首を巡らせた先、木々の向こうから朗世が主を探す声が聞こえた。

ただ執務を怠けた主を咎めるにしては、切迫感に溢れた響きだった。

苦笑して渋々視線を動かした碩有の顔が、一瞬にして硬く張り詰めた表情に変わる。

「朗世！ 此処だ」

彼が鋭く叫ぶのと、近くの茂みから一人の男が飛び出して来るのとはほぼ同時だった。

「御館様！ これは、この文書は一体どういう事ですか！！」

目の前に躍り出たのは部下の朗世ではなく、太った中年の男だった。書類を握り締める手が小刻みに震えている。上気した表情から恐らくは怒りに拠るものと思われた。

誰？

ここに来てより、戴剋と碩有以外の男性を見たのは初めてである。翠玉は状況の異常さに為す術もなく、立ち竦んでただ傍らの夫を見上げた。

「これはこれは、扶慶殿」

冷やかな笑みの貼り付いた碩有の顔は、先ほどまでとはいっそ別人にさえ見える。

すい、と前に出て背中に翠玉を隠した。

「次の間にて控えている様にと伝えた筈ですが、何故このような場所に？」

「申し訳ありません、御館様。見張りの者の目を盗んで房を抜け出した様です」

答えたのは問われた本人ではなく、次いで茂みより現れた朗世だった。後を追う様に次々と屋敷を守っている衛兵が現れる。

「これが黙っていられるか！ 何だこの書類は 儂はこんなもの書いた覚えなどない！」

朗世が手を挙げ合図すると、衛兵達が扶慶を取り囲んだ。持っていた槍で首根を押さえ、彼は正座のまま地面に這いつくばる格好にさせられる。

その手から書類を取り上げて、朗世は皺を伸ばし読み上げた。

『領土の監督不行き届きに付き、町に悪弊及び病を蔓延させてしまいました。責任を取って免職を申し出ます。付きましては民の治療の為に私財を全てこの弁済に充てさせて頂きたく、申し添えます』

ここに貴方の爪印もあります。事実がどうであれ、この書類は正式な用紙に書かれていますので、御館様の名の元に効力を発します。召喚状にその旨記載があつたと思いますが」

「だからそれがおかしいと言うのだ！ その用紙は洛庁でなければ手に入らぬ筈ではないか！ 貴様等、儂を嵌めおつたな！！」
「無礼な！ 控えられよ」

扶慶の首に槍の柄が一層食い込んだ。呻き声が聞こえる。
尚も拷問を続けようとする朗世を主の声が制した。

「止さないか。翠玉の目の前だ」

は、と短く答えて朗世は衛兵に力を緩める様に命じた。

「碩有様……」

いつの間にか背中に寄り添って布地を握り締めている妻を振り返って、彼は穏やかに微笑んだ。

「心配されるには及びませんよ。とりあえず、房に戻りましょうか」
肩に腕を回して、庇う様に扶慶の脇を通り過ぎる。

「待て　お待ち下さい！　榮葉は、あの女はどうなさるおつもりか」

「朗世、連れて行け。私もすぐに戻る」

碩有の言葉に衛兵達が動き出した。その腕越しに翠玉は振り返り、連行されてゆく扶慶を目で追う。

「あ、あの。今確か、榮葉って」

「はいはい、此処にいては危険ですから帰りましょうね」

「碩有様！　私は子供ではありませんよっ」

翠玉は無理やりに立ち止まると、夫に正面から向き直って睨み上げた。

「どういう事ですか？　説明して頂くまで、ここを動きませんからそのおつもりで」

「……困りましたね」

碩有は僅かに眉をひそめると、いきなり翠玉を横抱きに抱え上げた。

「きゃっ!?!」

「話すにしても、ここから一刻も早く離れた方がいい。私の心臓を止めたいと思うのでなければ、供も連れずに抜け出すのは金輪際お止め下さい」

十 証明

「あれは扶慶殿を引きずり出す為の小細工です。正攻法を色々やりましたが成果が挙がらなかったので、そうでなければ、流石に最初から騙し討ちの様な真似はしませんよ」

夕餉の席で翠玉は口も利かずに膨れていた。食事が終わり長椅子に場所を移しても状況が変わらず、碩有は苦笑しながらようやく打ち明けたのである。

結局あの後彼は妻を六天楼に送り届けるなり「詳細は夜に」と言い置いてさっさと戻って行ってしまった。

朗世や仕事、そして呼び出したあの扶慶とか言う男の件などで忙しいのだろう、それは翠玉も充分わかつている。

けれど言い訳もしないままいなくなられた事に多少なりとも腹を立てていたので、素直に話を聞く気にはなれずにいた。

「あの男は桐の町長を長年務めていました。お祖父様の頃にはそれなりの政治を心掛けていたものを、代替わりした途端に領主の言葉を聞かなくなつた。面白い話です、亡くなる五年程前からほとんどの政務を私が継いでいたというのに」

碩有は少年の頃から領土内の主な町には特に調査を進めていた、と続けた。特産物が何で、全体の内どれ程の産業価値があるか。そして長たる人物がどの様な素行をしているか。

職務を全う出来ない者や長として不適格な者を、近年では彼が実質処罰していたのだと打ち明けた。

「騙し討ちにせよ、書面を突き付けられれば選択肢は二つしかありません。観念して認めるか、違つと訴え覆す為の証拠を揃えるか」

翠玉は横を向いたまま、ちらりと視線だけを夫に動かした。

「もし覆せる様な証拠が出て来たら……全くの冤罪になってしまうのではありませんか？」

「証拠は既にこちらで押さえてましたし、反証があるならば尚の事彼はもつと早い段階で出さなくてはならなかったのです」

「そんなものかしら……」

「厳しい様ですが、本来領主より詮議があつた事を軽んじるだけでも処罰するのは可能です。私がそうしなかつたのはひとえに扶慶殿の対処の仕方を測る為でしたから、失策を犯したと言う他はありませんね」

いつもと変わらない、天気のことを話す様な碩有の穏やかな表情。

彼は紛れもなく政治を行う君主なのだ、改めて思い知らされる。祖父戴剋が名君と称されていたのはただの領民だった頃、彼女も知っていた。周囲で賞賛する声を聞いていたからだ。

民が平和に暮らせるのは君主がきちんと政治を行っているからなのだが、陰には色々な苦勞があつたのかもしれない。

自分は本当に彼の一面しか知らないのだと、翠玉はいたたまれない気持ちになつた。

「……榮葉さんは、あの人と何か関わりがあつたの？」

単なる嫉妬に取られたくなくて、渋々顔を正面に戻した。

案の定碩有の視線をまともに受けて戸惑う。

また「関係ない」と言われてしまつたらどうか。

「あの、どうしても話せない様でしたら無理にとは……」

「でも、気になるのでしょうか？」

翠玉は慌てた。いつの間にか夫が自分の手を取って弄び始めている事に気付いたから尚更だ。

「私はただ……榮葉さんの様子がちょっと腑に落ちなくて、それで聞いただけですっ」

「腑に落ちない？」

「一度だけお見かけしましたが、随分とお顔の色が優れませんでした。それに」

自分の首飾りを知っていると云った　　続く言葉を彼女は呑み込んだ。

「いえ、何かひどくお悩みを持たれているのかと思っただけです。だから昼のあの人の様子が関わりがあるのではないかと」

「そうですね」と、碩有は少し表情を曇らせた。

「これは本人の名誉に関わる事なので、詳しくはお話し出来ませんが。……彼女は私と別れた後、結婚が決まっていた相手がいました。それを、横恋慕した彼に邪魔されたのです。だから私は彼女を一旦こちらに引き受けて、婚約者の元へ送り出そうと考えました。蓉天楼に置いたのはその為です」

「邪魔？　他に婚約者がいたのに、ですか」

「はい。彼の女好きは有名でした。相手がいようがいまいが、然程重要な事ではないらしいのです」

確かにそれだと「終わった話だ」と云った碩有の言葉の辻褄は合う。

自分が許婚と別れなければならなかった時の記憶が勝手に蘇って

来た。今でこそほろ苦い思い出になりつつあるが、当時はひどく悲しかった。複雑な思いがあったから余計に、だったかもしれない。

初恋、だったから。

榮葉はどうだったのだろうかと思う。碩有の言葉通り許婚を好いていたとしても、勿論哀しくて苦しくて堪らなかったはずだ。

だが考え過ぎかもしれないが、本当に単なる心変わりで碩有と別れたのなら、自分の事をあんな風に見たりするだろうか。

「何を考えているのですか？」

頬を撫でられる感触がして、翠玉は過去の記憶から我に返った。

「いえ……何でもありません」

手を当て逃さない様にして、覗き込んで来る碩有の視線が少しだけ後ろめたい。翠玉は目を伏せた。

「そうですか？」

少しばかり口調が不快そうに思えるのは、きっと気のせいだと思う事にする。

「扶慶殿は許せませんね！ 領地で民に迷惑を掛けた挙句、好き合っているお二人を引き離すなんて。極刑にすべきだと思います！」

それは本心からだったので力強く断言すると、彼は毒気を抜かれた様な表情を見せた。

「碩有様、勿論処罰なさるおつもりなんでしょう？」

「あ、はい。それは　そう、なんですが」

余りに釈然としない顔をしていたので、多少不安になる。

「また私、何か可笑しな事でも言いました？」

「……いえ。誤解が解けたのなら、それで充分です」

とはいえ、本心からの言葉ではないらしい。夫は失笑を堪えている風に見えた。

「じゃあ何故、そんなに笑っているのですか」

笑いを納める気配のない彼に、翠玉は段々本気で怒ってやるうかという気持ちになって来た。

無言で離れようと立ち上がった瞬間、腕を取られ引き戻される。

「……碩有様っ……」

「断言しておきたい事がありますが、聞いてもらえますか」

倒れ込んだ妻の身体を胸に抱き寄せて彼は囁いた。

「覚えておいて下さい。この先もし貴女が少しでも私の心を疑う様な事があれば、私は全力でそれを阻止します。例えどんな手を使っても」

愛の告白にしては余りに不穏な気配がして、翠玉は顔を強ばらせた。

「……』どんな手を使っても』って、た、例えば」

「知りたいですか？」

昨晚と同じ様な、妖しい笑みが返って来た。

「いえやっぱり結構ですっ！ もう今日は私、そろそろ休みますのでこれで」

翠玉が必死に夫の腕から逃れようとしていると、「失礼致します」と侍女の声がした。

「就寝の支度をさせて頂きます」

「えっ？ でもまだ、私呼んでないけど」

いつも翠玉は眠る前に月琴を弾いたりするので、支度をして欲しくなったら呼ぶのが習慣だった。

「ああ、ありがとう」

代わって当然の様に答えたのは碩有だった。

「碩有様？」

「私は取り敢えず今日もこちらに泊まります。さっきの話の続きですが、もし証明してもらいたいなんていう事があつたら何時でも引き受けます。是非遠慮なく言って下さい」

妻を羽交い締めにしたまま彼はそう言って、にっこりと笑った。顔が瞬時に赤くなるのがわかる。

「いえっ！ もうそれは大丈夫ですから。お気になさらず戻って頂いても」

「紗甫、寝着の他に水差しと器を置いておいてくれ」
「はい」

無視？ 無視なの！？

結局碩有はそのままつづがなく寝支度を終え、呆気に取られた翠玉を尻目に寝台へと潜り込む次第となったのである。

隣に横たわったはいいものの、翠玉は中々寝付けずもの思いに耽っていた。

堂々宣言したくせに碩有は早々と眠りに入ったらしい。妻の身体にしつかりと腕を回した状態で、穏やかな寝息を立てている。

もしかして、お疲れになっていたのだろうか。

昨晚実は夫が一睡もしていない事など、彼女は知らない。

だったら尚の事、ご自分の部屋で心おきなく休まれた方が……。

来て釈明してくれたのは嬉しいけれど、無理をされては困る。
ふとある事に気付いた。

もし、今日碩有様がお帰りになったら私はどう思っただろうか。

思わず夫の顔を見上げた。寝顔を見たのは初めてだが、無邪気さすら感じてつい笑みを浮かべた。

ありがとうございます、碩有様。

翠玉は夫の胸に頬を当て瞳を閉じた。

満たされるのと同時に苦しさを覚える、こんな強い思いを他に知らない。

そういえば首飾りの事、結局聞けなかった。

余りに些細な問題の様な気がして聞けなかったが、何故榮葉は知っていたのだらう。

もう少し、さりげない機会を掴んで。きっと、その内に。

緩やかに音を刻む鼓動は彼女を安心させる。まるでその存在に包まれているかの様に。

耳を傾ける内にいつしか翠玉は眠りに落ちていった。

十一 乖離（かいり）

それから七日の時が過ぎた頃、翠玉は桐の町長が代替わりする事を改めて聞かされた。

お決まりと言う所か、情報源は懲りずに毎日の様にやって来る槐苑である。領主夫妻の關係に変化を認めたらしく、「まだまだ安心は出来ませんぞ」と釘を刺した後、さらりと云つてのけたのだった。

「存じています。御館様が昨日仰っていましたから」

少し鼻を明かしてみたくなくて、翠玉が鷹揚な笑みと共に静かに切り返してみせると老婆は予想通り鼻白んだ。だがちつとも気分は晴れない。こういうのを「八つ当たり」と云うのだろう。

あれからも碩有は毎晩こちらに泊まる様になった。それは嬉しかったけれども、仕事で疲れているのか自分を抱えて眠るばかり。一日は温もりに安堵していた翠玉であったが、そろそろ疑問を感じ始めていた。

まさか、また私から言われるまで何もしない気なのかしら。

ついそう思つて、恥ずかしさに彼女は勢い良く頭を振り、考えを打ち消した。まるで欲求不満を感じているみたいではないか、と。

「どうされた？」

「い、いえ。何でも、ありません……」

不思議そうな槐苑を余所に、一人慄然とし頂垂れた。

確かに急に町長を代える為の政務で、日中彼が忙殺されているのは何となくわかつていた。碩有は仕事の愚痴など言いはしないが、

「外の世界を見せられない代わりに」と領土内の様々な話をしてくれる。本来数月を要する手続きを、出来るだけ短縮させようとしているのだそうだ。

榮葉さんを早く開放させたいから、よね。きっと。

意に染まぬ状況にいる彼女が気の毒だと思う気持ちに嘘偽りはないと思う。多分。

「そう言えば、南楼にいる榮葉という女。近々桐に戻るそうですね。僕はつきり六天楼に入るものと思っておりますが」

頭の中を見透かされた気がして、翠玉は思わず顔を上げた。

「おや、こちらはご存知なかった様子じゃな」

老婆は得意げな笑みを浮かべている。

「聞けばあの女、桐でも有名な工匠の娘じゃそうですね。北肆の名前を何と申したか。細工物では領土でも一、二を争う腕とか。正室には分不相応じゃが、側室には充分なれると言うのに」

「……細工物」

記憶の琴線に何かがかつかかって、翠玉はぼそりと呟いていた。だが槐苑はお構いなしに嘆かわしい、と続ける。

「御館様が淡泊なのは争いにならず結構じゃが、先代様に比べてこは人少なに過ぎる。数多の側妾が跳梁跋扈してこそ、儂の出番があるというものですのにのう」

「仰る意味がよくわかりません……」

翠玉が眉をひそめたその時、紗甫が房の外から「お客様でございます」と告げる声がした。

「通して頂戴。申し訳ありませんが、槐苑様」

「何と！ 奥方様はまたこの年寄りを邪険に扱うおつもりかっ」

どんなに冷たくあしらっても毎日来るくせに 翠玉は苦笑する。おかげで彼女に対する態度は大体定着しつつあった。

「はいはい、また明日にでもおいで下さいね」

「まだ話は終わっておらぬというのにつ、これ」

辟易する相手ではあったが、つつい自分の祖母にしていた様な態度が甘いのかも思いつつ、老婆の背に手を添え外へと誘う。だが相手が渋って抵抗するせいで、客人の方が開け放たれた戸口に現れてしまった。

「一瞥以来でございます、奥方様」

槐苑の背中を押すのも忘れて、翠玉は床に跪くその人物を見下ろした。

以前見たよりは幾分面やつれが取れ、玲瓏とした美しさが加わっている。

否、「取り戻した」のだろうか。

「……榮葉さん」

「何じゃと！ 不躰ですぞ。一体何の用向きがあつて参られた」

呆然とするばかりの翠玉に代わって、声を荒げたのは槐苑だった。

榮葉は面伏せたまま、両手には腕半分ほどの布包みを掲げている。

「重々承知しております。ですが一言お礼に参りたく、無礼を承知で伺いました」

「お礼？ 奥方様、この女に何かして差し上げたのですか」

「い、いえ。私は何も……」

事態が全く飲み込めずにいると、榮葉に「ささやかなものですが」と包みを差し出された。

「……とにかく、顔を上げて中にお入り下さい」

「ありがとうございます。ですが、すぐお暇しますので。宜しければここで失礼させて頂きます」

ようやく顔を上げた、その双眸が翠玉をまともに捉える。

あの時と、同じ瞳だ。

何故哀しげに自分を見るのか、聞いたらどんな答えが返ってくるのだろう。

「私に礼とは、どういう事ですか」

代わりにそう尋ねるしかなかった。

「はい、一つは手前の事情で南楼を騒がせましたお詫びと、それをお許し下さった事へのお礼を。今一つは我が一族所蔵の首飾りをお買い上げ頂きました上に、この度御館様の計らいで嫁ぐ事になりました。一族共々、とても感謝しております。……ご夫妻が、幾久しくお健やかにあられます様、父がこれをお贈りしたいと」

榮葉が持参した包みを片手で紐解くと、中からは鳳の細工がきら
きらしい螺鈿らでんの高飾台が現れた。

「おお。何と美しい……」

飾台は主に小物を置く為に使う。富貴な家では必需品だが、ここ
まで凝った意匠はそうそう見つからないと思われた。鼻息の荒かつ
た槐苑でさえも息を呑み、黙り込んでいる。

「どうか、お納め下さいませ」

再び掲げ頭を垂れた榮葉を前に、翠玉はしばし黙っていた。

「奥方様。折角だから貰っておきなされ。これはもう宝、貴人の房
にこそ相応しゅうございます」

「……ご結婚される、というのは」

脈絡のない言葉にも、榮葉は特に動じなかった。

「わたくしは桐に以前、婚約者がありました。訳あって離れてしま
った、その方の許に嫁ぎます」

故に本日ここを去る運びとなりました　彼女は顔を上げて、柔
らかに微笑んだ。

貴女は、本当にそれで良いの？

口にする事の出来なかつた問いが、翠玉の頭の中から離れなかつた。

客人が去つた後の房に一人佇んで、卓に置かれた飾台を眺めながら思う。凜とした優美さが、彼女を思い起こさせた。

こんな風に考えるのは偽善かもしれないし、もし榮葉が「本意ではない」などと答えたら自分は間違いなく困るだろうともわかっていた。

「……一体私、どうなれば納得するのかしら」

この胸のつかえは何なのだろう。夫が自分への贈り物に、かつての恋人の伝手を頼つたからか。

それとも、榮葉があえて自ら乗り込んで来たからか？

答えはどれもそうであるかもしれず、またどれも違つ気もしていた。

乗り込んで意地悪の一つでもされればまた違つたものを、彼女はあくまで心を込めて礼を尽くしている様にしか思えない。潔いだけに、一層戸惑いは深まつた。

足元で鳴声がして、翠玉は着物の裾に纏わり付く飼猫に視線を移す。いつの間にか、散歩から帰って来たらしい。抱き上げると喉を鳴らした。

「折角帰つて来たけど、また散歩に出てもらつたよ」

内廊下まで抱えて連れてゆき、階を下ろす。

だが莉は房に戻っていつてしまった。

鳴声からお腹が空いているのだとわかつて翠玉は憮然とする。

こうなつたら、仕方がない。

「紗甫、莉に餌をやっておいてもらえるかしら」

「翠玉様、どちらに!？」

「すぐ戻るから!」

呼ばれて房に入つて来た侍女の驚く顔に見送られて、彼女は庭に『いないはずの猫探し』に出る事にした。少なくとも、誰かに咎められたらそう答えようと思つた。

もしかしたら、開けてはいけない扉なのかもしれない。或いはもう、榮葉はここを出ているかもしれない。

それでもどんな思いでいるのか、確かめずに悶々としてはいられなかつた。

蓉天楼に近づぐにつれ、遠目に人の姿が見える。着物姿でこちらに背を向けていた。榮葉に間違いない。

まだ間に合つた。

更に近寄ろうとして、翠玉は咄嗟とつさに近くの茂みに隠れてしまった。顔だけを覗かせてにじり寄り、様子を窺う。

「支度が済んだ様だな」

客房の奥から、聞き覚えのある男の声が出たからだつた。

「この度は大変お世話になりました。ご恩は終生忘れは致しません」

「桐に戻つたら、吏庾殿に宜しく伝えてくれ。急な要請ではあ

つたが、彼ならば良い町長になれるだろう。期待していると」

「はい。ありがとうございます」

碩有様。

中庭からは榮葉の話す相手の姿が影になってよく見えない。だが間違えようのない夫の声、よりによって二人が会話するのを盗み聞く羽目になるとは。

理性は帰るべきだと警鐘を鳴らしていた。

「……初めてこちらに伺った時は何と壮麗なお屋敷かと驚きました。今更ながら、碩有様はご領主様なのだと言感させられます。桐においでの際は」

榮葉は笑みを浮かべている様に見えた。先ほどと同じ表情を。

「正直あの時は、過去に戻ったと錯覚しそうになりましたが。奥方様にお目にかかって、それは幻想に過ぎないとわかりました。いえ、もしかしたら五年前からそうだったのかもしれない」

「幻想ではなかったよ。……少なくともあの時は」

彼女はゆるゆると首を横に振っていた。

「最後に一つだけ、我儘を言わせてください」

これ以上は聞いてはならない。いたたまれず、翠玉は意思の力を総動員して踵を返そうとした。

「お別れの挨拶に抱き締めてくださいませんか。今この一度だけ、あの時の様に」

駆け出した足元の草が、茂みが身体に触れ音を立てた。

「誰かいるのか！」

鋭い声は碩有のものだとわかったが、翠玉は駆け出す足を止められなかった。後ろを振り返りもせずに駆ける。駆けて駆けつけて、全く見た事がない建物に辿り着いてしまった時、初めて彼女は足を止めた。

此処がどの楼か、そんなものはどうでも良かった。全身の震えを納めようと必死で、しばらくは何故胸が苦しいのかが理解出来なかったから。

例えどんなに碩有が妻は自分だけだと断言しても、絆を信じられずに脆く彼女はつまづいてしまう。

信じられない己がまた、悔しかった。

何故彼の過去は翠玉のものではないのだろう。自分が今まで歩んで来た時間も、何故夫のものではないのだろう。

何て、愚かなのかしら。

後悔したくないと榮葉の元に行った。自業自得なのだ。

過去は過去だと割り切って目をつぶっていれば、少なくともあんな場面を見ずに済んだだろう。碩有は自分がいたとわかったかもしれない。妻の、人として恥ずべき振る舞いをどう思っただろうか。

涙は出なかった。きっと、泣く事ではないのだろう。泣きたい気持ちではあつたけれど。翠玉は遂にその場にくずおれ膝を付いた。

どこかに行つてしまいたい。侍女にも、誰にも会わずにすむ場所に。

目の前に聳^{そび}える楼閣に、彼女はふらつく足を再び持ち上げ 中
へと入つて行つた。

十二 或いは罰を

建物の中は、普段翠玉が起居しているものと造りが多少異なっていた。

廊下の壮麗な意匠や、手入れの行き届いた様子は変わらない。午を大分過ぎた時刻の為か楼内はやや薄暗いが、使われていない建物というわけではないらしかった。

翠玉は重い足取りを進めながらも、ぼんやりとつい先ほど己が目にした光景について考える。

碩有様は、榮葉さんの願いに応えたのだろうか。

かつては思いを交わし合った仲なのだ。榮葉自身には未練がある風を感じた。けれど碩有の心中はわからない。もし同様に思っていたのならばあの様な展開にはならないと考えたいが、未練がなくとも触れるぐらいはするのかもしれない。

それは自分に触れたと同じ様に、だろうか。

翠玉にはよくわからなかった。自分がもし婚約者と今再会したら、と想像しようとするが、うまくいかない。

二人が寄り添っている姿ばかりが脳裏を支配してしまうのだ。

私つて、こんなに嫉妬深かったのね……。

廊下の左手に房の扉が見えたちようどその時、向こうから複数の人間の足音が聞こえて来た。

咄嗟に彼女は扉に手を掛ける。鍵が掛かっていなかった事に驚いたが、迫る人の気配に構わず中に飛び込む事にした。

「……ちよつと、貴方！ 鍵が掛かっていないじゃない。言ったで

しよう、例え僅かな間でも、ここの房は鍵を掛けて出て行きなさいと」

房に入って来たのは女性二人、どうやら掃除をする使用人らしかった。

翠玉が飛び込んだ一瞬後に入って来た彼女達は、ときばきと室内を清掃していく。

こちらに来たら、どうしよう。

翠玉は今、房の『次の間』と呼ばれる小さな部屋に隠れていたのだった。

次の間とはある程度身分がある者の房にしか付いていない、側仕えの者が出入りしたり控えに使う部屋だ。

私室の場合廊下側は施錠されているが、房に向かう扉は開いている場合が多い。誰のものはわからないが、此処も例外ではないのが彼女には好都合だった。

仕切りの戸は鎧戸の形になっていて、板の隙間から房内が見える。使用人が主の様子を窺いやすい作りになっていた。

「も、申し訳ありませんっ」

叱責したのは年嵩としかまの女、もう一人はごく若い娘らしい。やや高めの声が狼狽している。

作業をしながらも、女は溜息混じりに言った。

「御館様が最近あまりこの房を使っていなくてまだ良かったわ。午に仮眠を取る為だけに戻られるから、今日も多分もつこちらにはいらっしやらないと思うけど……今はたださえ、護衛の者が出払っているのですから。気を抜いてはいけませんよ」

「……はい。それにしても、衛士の方々はどうなさったんでしょう。急に呼ばれたみたいですが」

「何かあったのかしらね。さ、余計な事は考えずにさっさと仕事を終わらせてしましましょう」

二人は棚という棚や床を磨き上げ、寝台を整えると、来た時と同じ様に掃除道具を持って去っていった。どうやら次の間を掃除する気はないらしい。

扉の向こうで鍵を掛ける音を確認してから、翠玉は再び房に入った。

今、何て？

無人の空間は確かに彼女のものより広く、書棚や卓、それに寝台の様子からも女性の部屋ではないというのはわかった。

改めてまじまじと室内を見回すまでもなかった。最初に入った時に、どうして気づかなかったのだろうか。

碩有様の房に、間違いない。

碩有の匂いがした。恐らくは普段焚きしめている、柔らかかな香の匂い。

此処が普段、生活されている場所なのね。

という事は、自分は奏天楼に入ってしまったのだ。見つければさぞやお咎めを受けるだろう、そう思い至った所で翠玉は自嘲の笑みを浮かべた。

六天楼を一人で抜け出した時点で、充分錠を破っているではないかと。

一体何をやっているのだろうかという気はしていたが、初めて見る夫の私室に興味も湧いた。

右手奥の壁にある書棚に近づいて、棚に並ぶ書物を眺める。ほとんどが学問に関するものだったが、中には古典や物語の様な趣味らしき本もあった。実際、自分との会話からも彼の博識さは滲み出ていた気がする。

そう、いつもあの方は私の知らない世界のお話をしてくださいました。長椅子に座って……楽しそうに。

本の中身を見てみようと思っただけで手を力なく下ろして、翠玉はそのまま床に膝を付いた。

涙が零れる。

この部屋には、碩有を感じさせるものが余りにも多過ぎる。

「ふ……っ」

何故泣いているのか、よくわからなかった。ただこみ上げて来るものが押さえきれず、雫となって頬に溢れて来る。

自分を「ただ其処にあるだけで」と言った、あの意味。

もし、私と同じ思いであるならば、どんなに嬉しい事だろう

翠玉の感傷は、廊下を慌しく踏み鳴らす足音に拗って破られた。

慌てて頬の涙を袖で拭って、次の間に隠れる。

「女性の足で、しかもあの姿ではそう遠くには行かれませんでしよう。少しは落ち着かれませ。今は衛士も総動員で探しておりますので」

扉越しに聞き覚えのある冷静な声がして、扉の鍵を開ける音がした。

誰に話しかけているのかは明白だったが、相手の答える気配はない。ただ足音だけが明らかな苛立ちの響きを以って、房の床を鳴らしていた。

碩有様。

戻って来るとは思わなかった、と彼女は驚愕した。すぐに出て行かないだろうか。居座られては益々自分は帰れなくなる。

室内に入って来た碩有は、明らかに不機嫌そうな様子に見えた。だが長椅子に腰掛けたらしく、そうなると鎧戸からは表情がよくわからない。付いて来た朗世も扉近くにいらしく、声でその存在を知るのみだった。

「しかし六天楼を供も連れずに抜け出し、あまつさえ迷子になるなど前代未聞。例え奥方様といえども、この上は侍女共々、何らかの罰を受けて頂かなくてはなりませんまい」

淡々と語る朗世の言葉に翠玉は瞠目した。

罰。

六天楼には妻妾の守るべき数々の掟がある。戴剋時代からそれは知っていたが、表立って罰を受けた事はなかった。他の側室も既になかったので、知らず知らずの内に何処か軽んじてしまっていた。

「……その話は後だ。今は」

碩有の声は、聞いた事がないという位低かった。

言いかけて彼は立ち上がり、卓の上に紙を取り出して何やら文字を書いている。書き終わるとその紙を部下の目の前にかざしている

様子が見えた。

「 そうだな。供を連れてくれという私の意見を聞き届けず、拳
句邸内で何かあったとなれば。紗甫とか言ったか、それに槐苑も。
淀通りならば監督不行き届きで連座で罰を与えるべきなのだろう。
朗世、この様にすぐ手配してくれ」

一瞬の間の後、朗世の齒切れ良い返事が聞こえた。
翠玉の爪先がすう、と冷えて行く。

そんな。

自分のせいで紗甫達が罰を受ける、そんな事は考えてもみなかつ
た。

「因みに御館様、侍女達の罰はどの様な内容のものになさいますか」
「前例では監督不行き届きは、鞭で打つ事になっている。それに準
ずるのが妥当か」

「待って！ 待ってくださいっ！！」

気づけば翠玉は跳ね飛ばす勢いで扉を開けて、中に駆け出してい
た。

「悪いのは私なんです！ だから紗甫達には罰を与えないで。私だ
けなら、どんな罰でもお受けしますから！」

突然の闖入者にも関わらず、二人は全く動じる気配がなかった。

「朗世。 行け」

「はっ」

碩有は顔色一つ変えずに部下を一瞥、それを合図に朗世は房を出て行った。

「朗世さん！ 待って下さいってばっ」

追いつがろうと駆け出す翠玉の身体を、だが横から夫の腕が邪魔に入る。

「今の言葉、忘れないで下さいね」

あっという間に視界は碩有の身体に塞がれてしまった。先ほどまでのもの思いなど綺麗さっぱり吹き飛んで、翠玉は狼狽した頭で彼を見上げる。

なのでそこにあつた顔が、怒りとはまた違った不穏な表情をしているのに暫くは気づかなかつた。

「え！？ ああ、勿論です。でも朗世さんの指示が！ 罰を与えに行ってしまったのでしよう」

「まあそういつた事も充分考えられるでしょう、という話をしたのです」

「はっ いやあの。……どういふ事ですか」

腕の中でもがく妻を両腕で固定して、碩有はにっこりと微笑んで今しがたかざしていた紙切れを見せた。

そこにはこう書かれていた。

『琳夫人が見つかった 奏天楼にいるので心配しない様伝えて来い 明日には戻る』

「少しは反省して頂けるかと思ひまして」

「なつ　。　だ、騙したんですか！？　あんまりです！」

逃れようと更に手足を動かすが、殊の外強い力で捕まえられていて、びくともしない。

「あんまりだ、はこちらの言葉でしょう。『庭で迷った』かと思えば、よりよってこの部屋に入り込んでいるとは　鍵が掛かっていた筈です。一体どうやって　いや」

腕の力が緩んだと思うと、翠玉の両頬にそつと手が添えられた。

「……それよりも房に戻っていないとなれば、周りがどれだけ心配するか。わからないわけではないですよね」

怒鳴られるより尚酷い、と彼女は覗き込んで来る夫の眼差しを見て思った。

しかも真剣な表情になると、気のせいか疲れて憔悴している様にも見える。

『庭で迷った』という表現を使ったという事は、自分が其処にいたとわかっていたにも関わらず、不問にしてくれるというのだろうか。

「ごめんなさい……」

この人はどこまで自分を、甘やかす気なのだろう。

厳しい言葉で罵ったり、言う通りの罰を与えられたのなら。

そうしたらきつと、この胸の苦しさはむしろ軽くなるのかもしれないのに。

「でも、どうして私がこの房にいるとわかったのですか」

「それはわかりますよ。次の間からものすごい気配がしましたから」
「まさか！」

確かに板の隙間から固唾を呑んで様子を窺っていたが、そんな念めいたものまで出していたのだろうか。

「……とまではいきませんが。匂いですよ、貴方のこの香の匂い。すぐわかります」

碩有は結い上げられた彼女の黒髪に顔を寄せた。

「碩有様……」

「ところで、先程の罰の件ですが」

「はい」

来た、と翠玉は表情を硬くする。

「言いましたよね。自分だけなら、どんな罰も受けると」

「は、はい」

「私が『榮葉には触れていない』と言った所で、何の証明にもならない事ですし」

「はい えっ？」

「正直、寝た振りも七日が限界です」

「一体何の話をなさって……ちょっと!？」

視界が見る間に展開し天井を向いたと思うと、翠玉は寝台に身体を投げ出された。

「どろどろしていきなり、今は罰の話をしていた筈じゃ ぶぐっ」

起き上がるうとしたが、強引に唇を奪われ阻まれる。執拗とも思える長い口付けの後、彼は自嘲気味に笑った。

「全く。……貴女の戸惑いが解けるのを待とうと思ったのに。これでは私が罰を受けている様なものです」

掠れた声で囁かれた言葉に、再び唇を塞がれていた翠玉は答える事が出来なかった。

身体をなぞる指先に翻弄されながらも、ふと意識の片隅に、例の紙に書かれた文章を思い出した。

『明日には戻る』。今はまだ夕方にさえなっていない時刻だといふのに　もうその時に、もしかしたら。

この人は領主としてだけでなく、常に確信犯なのかもしれない。朗世が侍女に伝えた言葉の通り、翌日の午まで『夫の証明』を受けた翠玉は、くらくらする頭と疲労した身体で、嫌という程それを感じ知らされたものだった。

終

もう二度と会う事もないだろうと、碩有は思っていた。

だがその機会は予想に反してすぐに訪れた。しかも祖父の私室に側室がいる場面に出くわすという、かつてない状況の下で。

彼は面伏せて仕事の指示を受けながら、何故戴剋が人払いをしな
いのだろうと訝しく思った。さらさらと衣擦れの音が遠くで聞こえ
る。普段は開放されている二つの私室の間には、今日は簾が下りて
いて、向こう側に色鮮やかな着物の後ろ姿が見えた。

明らかに女性のものと思われる香の匂いが、辺りに優しく漂って
いる。水辺に咲く花の様な清しい空気は、翠玉そのものに思えた。

此処から、離れた方がいいのかもしれない。

そんな出来事が何度か続いて、彼は屋敷を離れ遊学する決心を固
めた。

本来は旅行程度の視察でも構わないが、この際外に目を向けるべ
きだと思ったのだ。

不可侵なる、祖父の側室。

同じ部屋にいながらも、決して言葉を交わす機会もなく。

目を合わせるわけでもない。

なのにいつの間にか思いは膨らみ、己を持って余している事に気づ
いて戸惑う。

相手は祖父の妻ではないか。……きつと、洛を離れば忘れら
れるだろう。

彼は自分がそう情熱的な性質ではないと考えていた。だから桐へ

の出立の当日、祖父の下へ挨拶に訪れた時も冷静に、心の中で別れを告げれば良いなど思っていたのだった。

戴剋が奥の部屋に向かって、「翠玉も何か言っていてやりなさい。許すぞ」と言い出すまでは。

簾の内、影が動いてこちらを向いたのがわかった。

「……お身体をおいとい下さい。領主補佐としての遊学、立派に果たして来られます様、お祈りしております」

優しい、愛らしい声に碩有は息を呑んだ。聞くのは二度目なのに、懐かしさすら覚えるのは何故だろう。

「ありがとうございます。……琳夫人も、お元気で」

全くどうかしている、と思った。政治には冷徹な手腕を評価されるこの自分が、女性の言葉一つに動揺するなんて、と。

おかげで声が上ずらない様に返事をするのに、意志の力を総動員する羽目になった。

貴女はきつと、ただの形式的なものとしてもう忘れているのだろうな。

碩有は戴剋の遺言の折、翠玉と言葉を交わした時の事を思い出していた。

簾越しの会見の思ひ出話は疎か、「他に思う相手がいるのなら」とまで言ったのだから、恐らくそうだろう。

けれど出会いから五年経った今、こうして自分は彼女を腕に抱いている。

帳の下りた寝台の中、安らかな寝顔を見つめる碩有の眼差しが、
込み上げる愛しさに揺らめいた。

代替わりした陶家の青年当主には、西楼に瓊瑶一つのみを抱くと。
後年貴人には稀に見る仲睦まじい夫婦として、広く領土内に語ら
れる事となる。

噂は多少の誇張を以て近隣諸国にも知れ渡るが　今はまだ、先
の話だった。

了

終（後書き）

ここまでお読み頂きまして、ありがとうございます。

二人の物語は、一旦は終了となります。

続編がまた次話として入りますので、お付き合い頂けると幸いです。

一 再会

昔話を致しましょう。

愚かな女の、退屈な話でございます。

ただ一言、しかしながらとても大切な嘘を付けなかったが為に、魂の欠片を失った女の言い訳とでも申しませうか。

貴方を愛していると。

あの時伝えるだけで良かったのです。そうすれば、せめて笑顔だけでも最後の記憶と留められたかもしれないのに。

……どうして私は、受け入れる事が出来なかったのか……

車窓からの風景は余韻を引く間もなく次々と通り過ぎて行き、それでも整備された街を抜けるには至らない。

「今さらですが……こうして見ると、洛とは随分と大きな街なのですね」

翠玉は窓にかじりついたまま、背後の人物に向かって振り返りもせずに話しかけた。

並ぶ建物の色は様々だが、概ね緑色を基調とする瓦屋根に朱色などの明るい色の外壁が、この辺りの一般的な建築様式だ。

街だけではなく、陶家の領土内では全ての家が階級や生業によつ

て建材に使える色が決まっている。

そして上流の家であればあるほど、柱の斗拱トウコウなど装飾は多く、離れとなる楼閣を階数高く多く持てるのが決まりだった。

洛はただでさえ、富裕な商家や升庁ヤクシヨが多く、石畳の路には行き交う徒歩の人々のみならず人力の車　華俤カシヤと言った　も往来し、雑多な賑わいを見せている。

「もしかして、洛の街中を見るのは初めてなのですか？」

返って来た声に僅かながら苦笑の気配を感じ取って振り返ると、すぐ隣にいたはずの夫が人ひとり分は離れた場所でこちらを見て微笑っている。

彼は公の場に出る際と同じ姿で、車の中に設えられた長椅子の中央近くに座っていた。

物珍しいのは街並みだけではない。今乗っているこの『車』も、人生においてはまだ二度目の経験だった。桐で製造されてはいるらしいが、主に交易に出され市井向けではないと聞く。確かに陶家に来るまでは、華俤ならいざ知らず、車など見た事はない。

いつの間にか自分がここまでにじり寄っていたと気づいて、翠玉は顔を赤らめた。

「あ、ごめんなさい。つい夢中になってしまつて」

とは言いつつも、声の弾んだ調子は押さえようもない。

「いえ、あまりに貴方が楽しそうなものですから」

碩有は不機嫌そうには見えなかった。それどころかいつものそう思つのは彼女だけなのかもしれないが　氷さえも溶かしそうな、甘い笑みを浮かべた。

「そんな顔が見ただけでも、付いてきて良かったと思いました」

こればかりは時間が経っても慣れそうにないと必死に平静を装いつつ、翠玉は本来の目的を思い出して居住まいを正した。改めて夫に向き直る。

両手を膝の上に揃えて頭を下げた。

「どうしたのですか、急に」

「この度は、外出を許可下さいまして、本当にありがとうございます」

領主の妻は通常、夫が生きている間には六天楼を出る事は叶わない。

それは戴剋の側室として邸に入った時に、槐苑や侍女達に宣言されていた決まりだった。

貴人の妻妾はその資産とみなされるのが当たり前この地方であるから、当然かつてはしばしば争いと呼んだという。

ましてや事が広大な領土を統べる者の話になると、単なる欲得には留まらない。戦いの火種となった史実さえある。奪うなら高貴なものを　と考える人間は領土の内外に存在するらしかった。

よって六天楼が整った時、当代の領主は『掟』を定めた。

領主以外の男性との一切の接触を禁じる事。たとえば家族であつても例外はない事。

六天楼からの外出を禁じる事（ただし、領主の命によって離縁あるいは隠遁させる場合は館から出された）。

その他、側室が複数いる場合、側室同士の接触も禁じられていた。無論、争いを避ける為である。

いかに当主が便宜を図ったとはいえ、陶家は他にも一族の者達が数多くいて、事業などを起こす時にはお伺いの様なものを立てたりすると聞く。自分を外に出すに当たって、すんなり同意を得たとは

思えなかった。

翠玉の危惧をよそに、碩有は全く事もなげな顔をしていた。

「何だ、そんな事ですか。気にしなくてもいいのに」

「……本当に良かったのですか。掟を破ったりして、一族のかたがたに反対されたではありませんか」

外出を許可された、と聞いた時の槐苑の不可解な態度を思い出し、翠玉は眉宇を曇らせる。

御館様のお気持ちはわからぬでもないが、領主ともあろう者が妻女に入れあげるとろくな事がございませぬ。不吉な。

不躰なのが槐苑だとわかってはいたが、言うに事欠いて不吉な、とはどういう意味だろう。

「破ったではありませんよ。変えたのです。確かに文句は言われましたが、元々決めたのも私の何代か前の領主ですから問題はありませんでしたよ。それでなくとも祖父の代の晩年には、有名無実に近いものになっていましたし」

言葉とは裏腹に、何故か碩有の表情に影が差した。

「えっ？ でも私は、戴剋様からその頃、決して房から出るなど……」

妻の言葉に幾分決まり悪そうな顔になり、影が薄れる。

「そうですね。お祖父様が何をお考えだったのかは、疑問な所もあるのですが」

わざとらしく咳払いをした。

「先代の 私の祖母に当たる人ですが 正室が父の数年後に亡くなつてから、祖父は側室を数多く迎えはしましたが、晩年には全て邸から出してしまいました。その辺りから、掟はあまり意味をなさなくなっていたのは事実です。適用される相手がいないのですから」

「じゃあ、私が入って来たから、復活したようなものだったのかしら……」

「そんなところですね。でも、他に側室はいませんから外出禁止の形骸だけが残った。本当に厳しく取り締まっていたら、私と貴方を会話させようとは思わなかつたでしょう」

会話、の辺りで翠玉は不思議そうな顔をした。碩有は一気に肩を落とす。

「覚えていないのならいいんです……」

「えっ？ いえ、覚えていますよ！ 庭で迷つた時の事でしょう？ 初めてお会いした時の」

でもあれは確か戴剋とは関係のない場所での話だ 首を傾げているうちに、見る見る夫の機嫌が悪くなつていつているのを感じて翠玉は慌てた。懸命に記憶を辿る。

他に会話した事なんて、あつたかしら？ 戴剋様が傍にいて？

「あっ、思い出しました！ 戴剋様が遺言をされた時ですね。枕元で」

「……もういいです。窓の外でも見ていてください」

どうやらこれも違ったらしい。

ふいと顔を逆側に背けてしまった碩有の端整な横顔を、彼女はやはりしばらく呆気に取りられて見つめていたが、思い出せないのは仕方がないと再び車窓の風景を眺める事にした。

けれどやはり、背後の存在が気になって今度はあまり集中出来ない。

怒ってしまったのかしら。でもどうして、思い出せないのだろう。

六天楼に入ってから若い男性と会う機会なんて全くと言っていいほどなかったし、ましてや話したとなれば覚えていないわけがないのに。

考え込む翠玉の目に、郊外の丘陵の風景が飛び込んできた。どうやら街をすでに抜けていたらしい。木々の合間に石造りの墓影がちらほらと見える。

その途端、今までの経緯を脇に追いやってつい話し掛けながら背後を振り返った。

「碩有様、見えて来ましたよ。あれが私の」

「ご生家の墓がある場所ですね」

すぐ耳元で囁かれる声、覆いかぶさる気配に急激に彼女の心音が早くなる。

碩有は翠玉の後ろに寄って、窓の外を見ようとしているだけなのに。

つい赤くなつて、俯いてしまった。

「……そう、です」

「集合墓地なのです。入口付近に車を止めて良いですか？ 歩く様なら、車を中まで入れさせますが」

外を見ながら答えていた彼は、返事がない妻の顔を覗き込んだ。

「翠玉……？」

結婚して半年以上も経つというのに。こんな何気ない時に、狂おしい位に心をかき乱されるのはどうしてなのだろう。

見透かされただろう恥ずかしさも手伝って顔を上げる事が出来ないでいると、柔らかく首筋に指が触れた。ゆっくりと撫で上げる様に顎を包み込む。

「……墓参りを先にしましょう。ここで貴方の着物を乱しては、両親に叱られるでしょうから」

「なっ！」

艶めいた笑いにかつとなつてようやく見上げた。さっきまでの子供じみた不機嫌顔はどこへやら、余裕さえ感じさせる表情を浮かべている。頬が火を噴いているのを感じたが、もうこれは開き直るしかない。

「あ、当たり前ではありませんか！」

「ですよ。今日はお父君の命日なので、たとえ貴方がどんなに煽る様な真似をしても、自粛するとしましょう」

「あ、煽るって……」

碩有は笑うだけでそれには答えずに、運転席側にある小さな窓を開けると、打って変わって毅然とした声で命じた。

「車を奥にやってくれるか」

はい、と遠くから運転手の声がする。ほどなくして周囲を黒く光る石塔に囲まれた光景の中で車が止まったので、翠玉はそれ以上追及するのをやめた。

扉を開けてくれた運転手に礼を言つて　少し驚かれたが　、
持参した供花を持って歩き出す。

「こつやつて皆で一緒に眠っているのなら、寂しくないのかもしれないね」

やけにしみじみ言う夫の言葉が何だかおかしくて、翠玉は少し笑つた。

彼女の实家の様な商家の者が所有する墓は、専用の土地に石塔婆の形で集つて建てられていた。石は御影と呼ばれる黒いものが主流で、塔婆の形は自由な為様々な意匠が並んでいる。

「陶家の御陵はやっぱり違うのですか？　勿論大きさは比較にならないでしょうけど」

「大きい事は大きいです。代々の当主の命日にいちいち参るのとは出来ないで、祖父母と父のだけに訪れるのですが。でもこことは違つて、ひどく寂しい場所ですよ」

「そうなんですか……」

彼の父は祖父より早くに若くして亡くなったという。話していたのは本人ではなく、槐苑だったかもしれないが。

そう言えば、あまり夫の口から戴剋以外の家族の話聞いた事がなかった。拳がらなかったところを見ると、母親は存命なのだろうか。

「確か　この辺りだったはずなんですけど」

墓石を覆うように周囲に群生し大きく枝を広げた樹木は目に涼しく、春の陽光に煌いて鮮やかだ。鳥の鳴き声も時折聞こえる。のどかと言えばのどかな場所かもしれない。特に今日の様な好天時には最後にここに來たのは陶家に入る前、つまり父の骨を納める時だったから　もう八年になるだろうか。流石に場所がうる覚えになっている。

六天楼に入ってから、戴剋が使用人に管理を命じてくれたらしいので荒れ果てているという事はないだろうが、少し心配だった。

「何か目印になるものはなかったのですか」

隣に供物を掲げ持って付いてきていた碩有も辺りを見回した。

「ええと……近くに大きな黄連おうれんの木があつて、一画の半ばにあつたと思うのです。でも、何だかお墓が増えたみたいで」

「掃除している者に聞いておけば良かったですね。黄連木は通常、対で植えられると聞いていますが」

「いえ、ここのは元から生えて……って、よくそんな事を知っていますね」

怪訝そうに夫の方を見返った矢先、その背後に見事な枝ぶりの大木が見えた。

「あ、ありました！　多分あれですっ」

思わず駆け出して近寄ると、やはり見覚えのある塔婆が傍にあった。周囲のものは真新しく、後から出来た墓らしい。

ここで間違いないだろう。だが

「どうかしたのですか？」

突然立ち止まって呆然と木の方を見ている彼女に、碩有は追いついて視線の先を追った。

「……誰か、先客がいるみたいですね」

親戚か、とは言わなかった。妻の一族は家が没落した時に離散したと、以前本人から聞いていたからだ。

二人とはまだ十数歩の距離があるとは言え、先客が若い男である事は容易に知れた。

歳は碩有よりもいくつか上に見えた。袖幅の短い旗袍きほつを上着にしている所を見ると、富裕階級の者らしい。

「知り合いですか」

重ねて問うと、ようやくええ、と小さく返事があった。声が震えている。

「翠玉」

あまりの様子に、一旦車に戻っては、そう提案しようと口を開いた時に、話し声に気づいたのか墓の前にいた人物がこちらを振り返った。

一見していかにも育ちの良さそうな青年だった。短めに刈り込んだ黒髪に、上背はあまりないが優美な物腰に顔立ちは柔らかく、悪い印象は何処にもない。にも関わらず、どういつわけか碩有の眉が不快げに跳ね上がる。

男は最初何故か、彼の方を見て目を丸くしていた。次いで隣の翠

玉に視線をずらすと、清廉な面にありありと驚愕の表情を浮かべて歩み寄って来た。

「翠玉。翠玉じゃないか！」

間が人ひとり分という所まで近づいた時、碩有は思わず前に出て翠玉を背後にかばった。

「悪いが妻は少し体調が優れないらしい。蕃家はんに縁の者か？」

男は目に見えて怯んだ。

「というと貴方は……」

「先に質問に答えてもらおう」

「わ、私はその。以前こちらのお父君にお世話になった者です。翠玉とは幼馴染だったものだから、つい懐かしくて」

碩有の冷酷にさえ思える迫力に圧されて、今にも降りたそうに腰が引けている。

「碩有様」

衣服の背中を掴む感触に彼は背後に首を向けた。翠玉がこちらを見上げて僅かに首を横に振っている。

「翠玉、しかし」

「……大丈夫。ちょっと、びっくりしただけですから」

手を離して彼女は前に進み出た。

「お久しぶりです、朔行兄様」

「あ、ああ。元気そうで　その、何と言ったらいいの？」

朔行と呼ばれた青年はしきりに、碩有を気にしてちらちらと窺い
見ている。

「あの時は……力になれなくて。でも、無事でいてくれて安心した
よ。こう言っているのかわからないけど。ご家族があんな事になっ
た後だったし……」

力なく「ええ」と答えたり、翠玉は言葉を繋がなかった。

二 怒りの理由

「許されるものなら、少し話をしたいんだ　昔の事とか、あれからどうしていたのかとか、聞かせてはもらえないだろうか」

目を伏せて黙っている彼女の前に、再び出ようと碩有が身体を動かしかけた。

「いいえ」

視線を上げて、翠玉は正面から朔行を見据える。無理やり口角を上げて笑みを形作った。

「あの時貴方がああするしかなかったのはわかっていたわ。だから話す事なんて何もないのよ」

「済まなかつ」

「謝る必要もないの。今となつては、もう」

言つて青年の横を通り過ぎる。

墓に供えられた花を見て、彼を振り返りもせずと言った。

「父は亡くなる直前まで貴方を信じていたわ。会いに来てくれて喜んでいられるかもしれない……」

墓標の前にかがみこんで、持っていた花を花台に挿した。黒い石肌を見つめる表情は硬い。

「翠玉　僕は本当は、あの時」

尚も言葉を続けようとしていた朔行は、隣にいる碩有の眼差しに気づいて口を噤んだ。

軽く会釈をして、踵を返し足早に去って行く。

後には静寂だけが残された。

翠玉は何も言わず、黙ってそこに佇んでいる。

碩有が供物台に持っていたものを置くと、小さく礼を言う声が返って来た。

「……今の者は」

「幼馴染なの。父が亡くなった後は家同士が疎遠になったけど……昔はよく一緒に遊んだわ」

「ただそれだけよ」と憂いを帯びた笑顔で、彼岸の家族に向けての言葉が後に続いた。

「長らく来れなくて、ごめんなさい」

かつて見た事もない儂げな表情で語りかける妻の横顔に、碩有の眼差しが悔しげに歪んだことなど　この時翠玉は全く気づかなかった。

どうしてこんな状況になってしまったのだろう。

耳元をくすぐる柔らかい唇の感触に、鋭敏になったはだ膚はおののき既に思考回路は言う事を聞かない。

「……誤、解……ですっ」

必死に自分を保とうと後じさっても、長椅子の肘掛という障害に

阻まれ呆気なく限界を悟る。

薄紅色に上気した頬に瑞々しい果実の様な紅い唇。伏せられた黒く長い睫毛を震わせ、嫌悪と羞恥がない交ざった姿が、一層見る者に愛らしいと思わせるなど本人は知る由もない。

「誤解？ 何の話ですか」

碩有は顎の稜線を舌で辿り、自らの身体全てで彼女を強く抱きしめた。あたかも、僅かな隙間さえも間に残すのを許さないとでも言っているかの様に。

彼女は顔を背けた。初めて身体を重ねて以来、実はどんな時でも夫を拒んだ事など一度もない。けれど今ばかりは、とてもそんな気にはなれなかったのだ。

外出から帰るなりの突発事、自室に入る前から侍女に人払いをした時点で何かおかしいとは思っていたのだが。まさかこんな風に迫られるとは 予想外もいい所だった。

「碩有様っ……！ お願いですから、聞いて下さい」

抗いながらも何とか記憶を手繰り止せて、此処に至る経緯を思い出そうとした。だが夫が器用に片手で帯紐を解きつつも、別の手で着物の裾を探るのが気になってとにかく考えがまとまらない。

碩有にしても、いつもならこんな昼日中から無茶な迫り方をしてくる事はなかった。荒々しい愛撫からも怒りだけはひしひしと伝わってくる。何故かはわからないけれど。

自分が何か怒らせる様な事をしたのだろうか。でも行きはともかく、帰りの車内は全く会話をしなかったのだから、心当たりはあるはずもない。

「何をお怒りになっっているのか、せめて仰っていただけません、か

……んんっ！」

口を開けば、執拗な接吻に息を奪われる。
入り込んだ舌に蹂躪しゅうりゅうされ、中から甘い痺れが身体に広がって行くのを何とか理性で踏み留まった。

此処でなしくずしに負けてはいけない！

長い拘束の後ようやく唇を離れた碩有を、恨みのこもった涙目で見上げた。

「こ、こんなの。碩有様らしくありません」
「私らしい？」

息を飲む程に美しく、そして冷たく黒い双眸がこちらを見下ろしている。

「これが本来の私なんですよ。いつもは抑えているだけです。相反するものに責め苛まれて……掟を作った領主の気持ちか、とてもよくわかる気がする」

いつその事、と自嘲気味に笑った。

「誰にも手出し出来ない場所に、閉じ込めてしまいませんか。貴方が他の何者にも、囚われない様に」

掠れた囁きと共に、長い指先が裾の合わせ目に滑り込んで 膝を割ろうとしたその瞬間、翠玉の我慢が限界を超えた。

「い……いい加減にしてください ！！」

「昨日より御館様のご機嫌が大層悪いらしい、という噂で奏天楼は持ちきりでございます」

隣に並んで歩く侍女阿坤あしんの淡々とした一言に、翠玉は思わず振り返った。

妻が出歩く時の護衛にと夫の碩有が新たに配したこの女性は、臆たけた外見に似合わず武道を嗜む剛の者である。侍女の着物を着てはいるが確かに身のこなしに隙がない。

顔面までも鍛えられたのかという程表情に乏しいのが玉に瑕きずだが、素朴な態度は信頼感を与える。少なくとも翠玉は結構気に入っていた。しかし。

「仕方がないのです。悪いのはあの方なのですから！」

強く言って足を速めたが、脚力の差か阿坤との距離が開く事はない。

二人は住居としている六天楼を離れて、歩きながら中庭を愛でている所だった。折から続く好天、午をやや過ぎた日差しは柔らかく庭の木々を揺らし、整備された石畳と芝に降り注いでいる。

広大な敷地内に四つの楼閣を主殿と建てられた陶家の本邸、翠玉はその主の夫人として楼の一角を与えられていた。

様々な趣向や意匠を凝らした庭園も、今となっては彼女の行動範囲と言っても過言ではない程になじみにはなっているが、方角に沿って季節の庭木が植えられているのを全て見ようとすれば丸一日は掛かる。

散策好きな彼女にとって、庭は格好の退屈しのぎだった。

名ばかりとは言え前の夫であった戴剋は、晩年迎えた側室を決し

て人目に出そうとはしなかった。唯一の例外が今の夫碩有で、その後翠玉は前夫の遺言によつて碩有に嫁す事となった。

年上の妻にひどく優しい今の夫は、邸内をほぼ自由に歩く許可を与えてくれた上、外出時にと洛内でも滅多に見かけない車を彼女用に用意さえした。

もつとも、外出する様な用向きなど実際はそう滅多にあるものはなかったが。

そう、甘すぎるくらいの人なのだ　恐らく基本的には。

「……私はただ、思いもかけない場所で幼馴染に会ったのが色んな意味で驚きだったのです。だから出来れば一人にして頂きたかっただけなのに……」

だから昨日、怒り心頭に達して彼を追い出してしまった。

あまつさえ「しばらく来ないで結構です」という捨て台詞付きで側仕えの紗甫は勿論、護衛の阿坤も女主人の叫び声に何事かと馳せ参じ　とりあえず一瞬で状況を理解したらしかった。

即ち、夫婦喧嘩というものであると。

「お気の毒な話ですね」

「でしょっ?」

「御館様が」

女主人の困惑の視線にも阿坤は全く動じなかった。

「かつてこれほど自由を与えられた夫人はいないと評判になる溺愛ぶりなのに、嫉妬一つで拒絶されるとは。心中お察し申し上げます
「お」

「……そんなに機嫌が悪かった？」

相手が誰であつても齒に衣着せぬもの言いをする彼女の美点にも、
今ばかりは多少の決まりの悪さを覚える翠玉だった。

ふと碩有が部下や使用人に八つ当たりをしてはいないか少し不安
になる。そんな人ではない筈なのだが。

「大丈夫ですよ。政務はいつもと変わらずこなされています。御気
色悪しといえども人に当たる方ではありません。ただ周りの者も毎
日見ていればわかるのでしよう。何も言わず、常に険悪な雰囲気を
漂わせている位ですからお気になさらず」

「……嫌味に聞こえるのは気のせいかしら……」

とはいえ、此处で折れるわけにはいかない理由もあつた。

第一ただ謝っただけでは、本当に自分が軟禁されそうな気がする。
翠玉は思わずため息を付いた。

「何かお悩みでもあるのですか」

「あ、いえ。……問題は碩有様の事ではないの」

「はい。その様にお見受けしましたので」

探る様な眼差しを向けた主人に阿坤はほんの少し苦笑を浮かべた。

「本当に他愛もない嫉妬の諍いならば 奥様の事です、折れる事
も造作もないでしょう。それが出来ないというからには、他に何か
気まずい理由があるのではありませんか」

翠玉は目を伏せると、すぐには答えず歩を進めた。

「……阿坤は私よりも、私の事がわかるのね……」

ぼそりと呟く。急に沈んだ声音に、侍女は立ち止まり軽く両手を前に組んで頭を下げた。貴人に対する礼を取ったのだった。

「差し出口を申しました」

「いいのよ、怒ったわけじゃないの」

彼女の家は小さいながらも老舗の商家だった。伝統を守り顧客の信頼も篤かったのだが、挑戦心を起こした父親の投機が失敗してからは転落の一途を辿る羽目となった。

不幸とは続くもので、同じ年に近隣では疫えやみが大流行しており、元々あまり身体が丈夫ではなかった母と、年若い弟を呆気なく彼岸へと連れ去ってしまった。

失意のあまり病みついた父を翠玉は必死に看病したが、命数を永らえる事は叶わなかった。そして、後に残されたのは相当な額の借財。

経営が安定していた頃に付き合いがあった者達は皆、傾きを知ると掌を返した如く付き合いを断ってきた。借金の返済に手を貸す者などましていず、孤立したまま亡くなった両親の最期は今でも脳裏から離れない。

朔行の家も船を見捨てた側に名を連ねていた。そして口に出しはしなかったが、彼は自分の婚約者で、初恋の相手でもあったのだ。

小さい頃から、この人と共に生きていくのだと思っていたのに。

裏切られた衝撃は、戴剋の元に来るまでに捨てた筈だった。なのに、本人を目にすれば蘇る思い出を止めるのはやはり難しいもので、朔行が墓地を去った時、翠玉は己の何かが剥き出しになっているのを感じた。何かの拍子に決壊してしまいそうな醜い危うさを。夫にそんな姿を見られるのは抵抗があった。ましてやとても求めに応じられる様な気分ではなかったのだ。

結局、決壊したのは碩有様に対してだったけれど。

自分の様子こそ変であると、彼が気づいてくれずに激情のままに振舞われたのが悲しかった。それともこれは、翠玉の勝手なのだろうか？

また一つ息を吐いたその時、目の前に阿坤が腕をかざしたのに気づいて彼女は顔を上げた。

「……奥方様。こちらはいけません、戻りましょう」

「え？ あら、そういえば。此処……何の建物だったかしら」

庭の探索に出始めても結構な月日が経つというのに、未だによくわからない楼閣が多い邸である。

建物自体はどれも似た造りをしているから、余計に始末に負えなかった。

目の前のものも、六天楼や奏天楼と同じ様な七階建ての櫓と、平建ての高殿を備えたもので、華頭窓に唐破風も寸分違わぬ形の意匠だ。紅い柱に褐色の葺、ただ庭に面した雨戸が全く開け放たれていないので使われているかそうでないかが判別しがたい。

「此処は許可なく立ち入るのを禁止されております。御館様でもおいでになれない場所ですから、見咎められては厄介です。お早く」「せ、碩有様でも？ 一体何の建物なの」

緊張感のみなきる常にならない様子に翠玉は驚いた。
しかも当主でさえも入れない場所があるというのは初耳だ。

「詳しくはわたくしも存じません。お戻りになりましたら、槐苑様にでもお聞きになられては如何いかがでしょう」

「え、ええ……」

呼ばれなくても来るであろう、西の邸のご意見番の老女の顔を思い浮かべて彼女は少し慥然とした。まあ珍しく役に立つ事を教えてくれると良いのだが　はつきり言って、槐苑があまり心楽しい情報をもたらした事はなかった。

聞くのは良いけれど、またこの上何か問題が起きる様な気がするのは何故かしら……。

散策から帰ると、予想通りに槐苑がこめかみに怒りの筋を立てて房内にて待ち構えていた。

「奥方様！　御館様と仲違いされたというのは真まことでございますか？」

「……流石、話がお早くていらっしやいますのね」

「やはりそうなのですか。何たる愚拳！　何たる無礼っ」

走つてでも来たのか、肩で息をし髪を珍しくも乱している老女にとりあえず翠玉は椅子を勧めた。

音もなく現れた紗甫から水の杯を受け取り飲み干すと、槐苑は更にまくしたてる。

「悪い事は申しません、一刻も早く謝罪なさいませ。この際どちらに非があるかなど、お目を瞑りなさい！」

あえて尊大に扇で顔を防ぐ様にかざして、翠玉は如何にもうんざりといった風情を見せる。すると老婆は大仰な溜息をついた。

「ただでさえ御館様は季鶯きおう様に似ておいでの所がおありじゃ。軽くお考えになつていては、今に取り返しの付かない事になりかねませぬぞ」

「季鶯様？ 何方どなたですか」

聞いた事がない名前だった。確か碩有しやくの父親は慎文しんぶんと言つた筈だ。以前に本人からそう聞いていた。

「……何と。奥方様は、季鶯様について御館様からお聞きではないのですか？」

「え？ ええ。聞いた事がないけど」

ふうむ、と彼女は険しい顔をして何やらぶつぶつと呟き始めた。

「あの。一体誰なのですか？ そんな風にされると気になってしまいます」

「詳しくは御館様からお聞きになるが宜しゅうございます。さつさと仲直りしてすな。子宝が未だと申しますのに、このままだとますます遠ざかるといふものです」

既に充分苛立っていた翠玉は、槐苑を追い出したい衝動を何とか堪えて重ねて聞いた。

「槐苑様ならこの館の内知らない事などないのでしょう？ 勿体ぶらずに教えて頂いてもいいじゃありませんか。知らなければ、間違つて出会つてしまった時に無礼を働くかもしれませぬもの」

「間違つて？ そんな事、天地が返つてもありませんぞ」

「からめて搦手作戦とばかりに優しく言つてみたにも関わらず、老婆の反応は小面憎いものだった。」

「季鶯様はこの二十年余り、つひつひ鉦柏楼から一度も外に出た事がないというのに出会うわけが」

「鉦柏楼……もしかしてそれって、北東にある離れた建物の事ですか？」

「きんてんろう昼間阿坤に遮られた謎の建物は、誰に聞いたわけではないが北の欽天楼と奏天楼の間程の位置だったと思う。」

「四つの主楼閣の話は最初に説明されたのに、何故その建物は知らされなかったのだろう。」

「何気なく言つてみたのだが、槐苑は顔色を変えて「知りませぬ！」と慌て出した。」

「いいですか、奥方様」

「とても齢八十を超えた老人とは思えぬ強い力で、彼女は主の両腕を掴んだ。」

「あの建物には興味を持つてはいかん　鉦柏楼には亡霊が出るのじゃ。……近づけば、必ず恐ろしい事になるでしょう」

「やはり槐苑の知識は朗報をもたらさない」

「翠玉は鬼気迫るその顔を凝視しながら、嫌な予感が当たった事に眉をひそめた。」

「そして残念ながら、事態はこれだけでは終わらなかったのである。」

二 怒りの理由（後書き）

脚注：疫 流行病の事です。

2011/3/20「きおつ」の使用漢字を一部改訂しております。

三 巨娥（こつが）の誘（いざな）い

奏天楼の執務房は沈黙に包まれており、大抵の事では動じない朗世でさえも、これはおかしいと思わざるを得なかった。

主碩有はいつも通りに椅子に座って、尚且ついつも通りに仕事をこなしている。表情も仕草も声音一つも、全てに特に表立った変化は見られない。山積みになった地方領土についての洛庁からの書類を、正確迅速に処理していく。

ただ広い室内には、主と彼の二人きりであった。他には壁際に置かれた獅子や龍を象った彫像や、座る者のない黒檀の長椅子がいくつかといった、人でないものばかり。つい先ほどまでいた部下達も、用事もないと退出させてしまっていた。

それにしても、入室する者達が後に口を揃えて「御館様は何かあったのですか」と自分に聞いてくるのはどういうわけか。

「御館様」

「何だ」

「そろそろ一休みされてはいかがでしょう」

「何を言う。ついさつき昼餉ひるごひを摂ったばかりではないか」

言いながらも、彼の視線は書類から上がりもしない。

隣の卓に向かつて認可印を押された書類をまとめる手を止め、朗世は軽く息を吐いた。

「もう夕餉の時刻になりますが。一休みというよりは、終了なさっても良いくらいのお時間です」

碩有はすぐには返事をしなかった。

数十箇所ある陶家の領地の細かな手続きの書類に、この青年領主

は全ていちいち目を通して。その日に来た全てを処理するのはどだい無理というもの、いつもなら時間を区切って仕事を終わらせているのだ。夫人との夕餉に必ず間に合う様に。

朗世は邸全てに独自の情報網を持っており、当然六天楼にて主が夫人と仲違いしたのも知っていた。それが結婚以来初めてのものだろうという事も。

けれど私事については彼自身あまり関わりがないので、一昨日から取り憑かれたごとく働き続ける碩有に、諫言するのは正直面倒だと避けていたのだが

「あまり無理をなさるとお身体を壊しますよ。気晴らしに何かされるなどして、そう根をお詰めになりませんよう」

「……無理などしていない」

碩有は溜息混じりに力なく答える。

「私に出来る事は、今のところこれしかない。だからそうしているだけだ」

「領主があまり働き過ぎると、部下の仕事を奪います」

素っ気無く言い放った朗世に苦笑して、彼は持っていた印璽いんじをようやく印座に戻した。

真っ直ぐに下ろしていた両脚を組んで、繻子張りの椅子の背もたれに上体をもたれかける。肘掛けに腕を投げ出し、くつろいだ姿勢で隣の席を振り返った。

「お前の家族は、変わらず息災なのか？ 最近話を聞かないが」

突然の自身への話題変えに、朗世はやや怯んだ。彼にとって実家の話題はあまり持ち出して欲しくないものだったからだ。

領主の片腕と名高いこの青年は、結構な上流家庭の出自だった。戸主は洛庁の上官を務めた者なども多い。

父親もまた結構な地位まで上り詰めたが、人格者で有名な人物だった。息子が奏天楼に入ると同時に「閥を作るに能わ^{あた}ず」と隠遁し、郊外で妻子ともども静かに暮らしているという。

「お蔭様で、息災でございます。祖父は大分耳が遠くなったそうで、声が大きくて周りは難儀していると。その程度の便りしか来ません」「常々不思議だったが……どうしてあの絵に描いた様な仲良し家族から、お前の様な息子が出来上がったのだろうか」

朗世はびくりと片眉を上げる。

「あまりお褒め頂いているとは聞こえませんが、意図をお知らせ頂けますか」

「いやいや、褒めているのだよ。何にせよ、家族というものは良いものなのだろうな。翠玉を見ているとそんな気がした」

つい先日冷たくあしらわれたはずなのに、何を思い出したのか碩有の表情は柔らかく和んだ。

「墓参りに行った時、墓石に向かって色々と言っていたのだが……仲の良い親子だったというのが伝わって来た。私はそういうものを知らないのでは、お前ならわかるだろうと思って」

朗世は 彼にとっては非常に珍しい事に 僅かにうるたえる気配を見せた。

即決即答が当たり前の有能さがまるで嘘の様に、長い静寂を作り出してしまったのだ。

「……御館様と戴剋様も、それに琳夫人もご家族ではないのですか」
精一杯考えて、ようやくそれだけしか出なかった。

「そうだな」

やや苦味の残る、紛れもない恋する者特有の笑みを碩有は浮かべる。

「あの人もそう思ってくれているなら良いんだが」

「当然でしょう。畏れながら、喧嘩するという事はそれだけ夫人がお心を開いているのだと、私などは思います」

今まであえて触れずに来た「喧嘩」という本題を、朗世は遂に持ち出した。

押さえている様に見えても、結局主は自分相手にこうして心情を吐露する事になるのだ。

全く勘弁して欲しいと思う。どうせならば、もっと大人で男女の機微に長けた園氏辺りに相談すれば良いものを。

ああだが奴はまた領土の視察に派遣されていたか　そう内心独りごちて、彼は次に来るであろう反応を待った。

「果たして開いてくれていたのだろうか。あんな哀しそうな顔は、初めて見た……」

憂いがちに遠い目をする碩有こそ、ひどく哀しそうに見える。これほどに妻を案じている夫が、何故当の本人の心証を損ねるに至ったのか謎だ。

予定外の機会だったが、朗世は切り札を出す事にした。

「実は御館様。その琳夫人ですが、侍女の阿坤の話では昨日の散策の途中に鉦柏楼を発見されたご様子です。戻って槐苑殿にも色々お尋ねになっていたそうですが、教えなかったと」

案の定、碩有の顔から憂いの色は瞬く間に取り除かれた。代わって訪れたのは、戸惑いと驚愕。

「全く好奇心旺盛な人だ　あの方は、日中は外に出る事などないだろうが」

「あの人」ではなく「あの方」に変わったのは、指し示す相手が翠玉ではなく季鶯に変わったからである。本来使うべき呼称を使わない所に、彼の複雑な心理が表れていた。

そもそも『鉦柏楼に亡霊が出る』とまことしやかに囁かれるのは、きちんとした理由がある。今現在主となっている人物は、時折夜に出歩く姿が目撃されているからだ。

「逆に夫人は夜は流石に歩かれませんでしょうから、ご懸念には及ばないでしょうが。念のため報告申し上げておきます」

碩有は黙して答えなかった。心なしか、気分を害してさえ見える。立ち上がり無言でてきばきと書類を片付け始めた。

「今日はこれでやめよう」

とりあえず、もの思いからは開放されたいらしいな。

季鶯が絡むと、何故か主はいつも思考を停止させる。

朗世は己の奸智を喜ぶべきか、はたまた嘆くべきか判別がつかないままに後に従った。

広い寝台の中で、翠玉は眠れずにもう幾度目かの寝返りを打った。見ない様に見ない様にとしていたのだが、つい隣の空間に目が行ってしまう。

自分で仕向けたくせに。

その度に自分を叱りつけた。自業自得なのだから、たった数日の独り寝くらい我慢出来なくてどうするのだと。

けれどもしばらく振りの静か過ぎる夜は心もとなくて、おかしな事に二人で眠る前よりも寂しい気がする。

ともすれば包まれるあの優しい腕の感触を思い出しそう、彼女は思い切って寝台から抜け出す事にした。布団の上に掛けてあった掛^かを羽織^{うわ}って、帳^とをくぐる。

両戸を閉め切った房内には月の光すら入らず、辺りは暗闇に閉ざされていた。

長卓の上にある飾台をようやくと探し当て火を灯すと、人心地ついた代わりに寒さが身に沁みる。

春半ばでも夜はまだまだ寒いのがこの地方の常とはいえ、こんな時にはひどく応えた。

どうやら貴人の家というものは火鉢など使わないらしく、生家で冬に役立ったそれを翠玉が手にする機会はなかった。

代わりに大きな炉というものが壁に据え付けられているが、これを使うには紗甫を呼ぶ必要があるだろう。

莉でも一緒に布団に入れば、少し違つかもしれない。

そう思って部屋の隅で眠る愛猫の籠に近づこうとした時だった。

庭で物音がした気がした。

木の枝を踏んで折った様なささやかな音だったが、夜の静寂に明らかに何者かの存在を知らしめるものだった。

ふ、不審者？

一瞬恐怖に駆られたものの、雨戸は頑丈な上にどこもかしこもきちんと施錠されている。

心配せずこのまま寝てしまえばいいのだと思いなおした。しかし。

何がいるんだろう。

しばらく考えた後、彼女はこつそりと次の間に移動する事にした。あそこなら小さな華頭窓があつた筈だ。

釣鐘形をした華頭窓は、外側に飾り格子がはまっついていて頑丈だ。透き見なら出来るが、子供の腕一本程度しか通らない造りである。

内側の引き戸を音を立てない様に向け、恐る恐る庭先を伺う。

どうやら今日は満月らしく、ようやく闇に慣れた目には思いの外明るく景色が映った。

「……あつ」

月明かりの中くつきりと浮かび上がる、白い人影。陰影で黒く見える木々のはざまを縫って動くそれは、現実離れしていて精霊とも見紛う。

女性に見えた。頭から白い布を被って顔を隠してはいるが、光に透かされた輪郭は華奢な顔立ち。そして腰まで届く黒髪が、動きにつられてしなやかに揺れている。

一体何処の何方なのかしら。

初めて見る人物だろうとは思った。使用人ならばこんな時間に出歩く不心得者はいないだろうし、陶家の一族は今現在、この本邸には碩有しかいないと聞いている。

本来多数いるだろう側室のたぐいも、今は一人として存在していない。

いや。他に考えられるものはあった。

確か『出る』と、槐苑は言っていなかったか。

「もしかして、あれが季鶯様……？」

鉦柏楼から出ないと言われている謎の人物。同じ場所にある亡霊の噂。そう考えるのは無理のある事ではない。

供も連れなのが多少気になるものの、自分も似たような真似をしている。何故かあまり恐ろしいとは思えなかった。

もっと良く顔が見えないかと窓に頬を押し当てると、半端に引かれてあつた内戸が肩に触れ、音を立てた。

同時に庭にいた人物は、何かに弾かれた様に踵を返す。

こちらに気づいた？

あつという間に視界から消えてしまった『亡霊』に呆気を取られながら、翠玉は窓の外をしばらく見つめていた。

確かこの辺りだったはず。

明くる朝、彼女は食事を摂るや否や無理やり阿坤を呼び出した。

庭に出ると、見当を付けた辺りを丹念に調べる。石畳のちょうど境目、芝草の植え込みがあった。

「何かお探し物ですか？ 奥方様」
「ええ。ちよつとこの辺りで落し物をしてしまつて」

半分上の空で返事をしながら草むらに視線を這わせる。しばらく彷徨つていたそれが、ようやく目当てのものを捉えた。

「……あつた！」

それは瓊瑶たまの付いた耳飾みみかざりだつた。

昨晩例の女性（恐らく）が去つて行く時に、小さな光が地に落ちるのを確かに見た。

透明感のある白い瓊たまは、中心近くが多色に光っている。のみならずそのものが紋様の形に彫られていて、細工の見事さは明らかだ。幾つもの種類の瓊瑶が下に連なつていて、相当の貴人の持ち物だと思われた。

やはり、あれは亡霊などではなかつたのだわ。

「これ、なんて言う瓊瑶か知つている？」

「わたくしに聞かないでくださいまし。奥方様の落し物ではないのですか」

「あ！ そうそう。そうなの、何でもないわ」

阿坤の眼光鋭い切り返しに慌てる。

調べるにはもっと違う手段を取らなければと、翠玉はその後槐苑が来るのを待つて卓のよく見える場所に、さりげなく拾つた耳飾を置いておいた。

「奥方様、これは一体」

予想通り顔色を変えて詰め寄る老婆に「ああ、今朝庭先で見つけたのですが、持ち主がわからないので其処に置いてあるのです」と
平静を装って答える。

「もしかして槐苑様、お心当たりがございますか？」

「い、いや、儂は知らぬが。御館様ならばご存知かもしれませんのう。娥玉がぎょくの耳飾など、よほどの貴人でなければ身に付けませぬからな」

昨日の今日なので、明らかに仲直りさせようという発言なのは明らかだ。だが後半の言葉で充分目的は果たした。

翠玉はにっこりと笑う。

「そうですね。では今度お会いした時にでも、聞いてみましょう」

しかし彼女が実際にしたのは、紗甫に娥玉について聞く事と、その日の夜に再び同じ時刻を狙って庭先を見張るといったものだった。

この耳飾の持ち主は、きっと取り返しにやって来るに違いない。

あまり瓊瑤に詳しくはない翠玉でも、槐苑が「よほどでなければ」というものをわざわざ夜に付けているのだから、かなりの思い入れがあるのだろうとは想像が付く。

本来、耳飾は客を遇するなど公の場でも出ない限り、付けないものだからだ。

華頭窓から時折庭を覗く事しばし、同じ体勢に身体が凝って来たなと思いはじめた頃に、ようやく「彼女」はやって来た。

やっぱり！

視界に白い姿を認めるや否や、翠玉は房に戻り予め鍵を外しておいた雨戸を開け放つ。

「待って！ 待ってください 耳飾を探しているのでしょうか!？」

音に気づいて即座に逃げ出そうとする人影に向かって、小声で、しかし鋭く呼びかけた。

ゆっくりと振り返る女の姿に息を呑む。

人ならぬものではないかと圧倒されるほどの存在感を、その人は持っていた。

翠玉は自分を叱咤すると、意志の力を振り絞って問いを重ねる。

「ご無礼を承知で申し上げます。 貴方、碩有様のお母君の季鶯様ではありませんか？」

四 掛け違えたもの

それは真に娥玉に相応しい持ち主だった。

娘にも老女の様にも見える、年齢不詳の美貌。月の女神こいづか巨娥もかくありきと言う風情の女性だった。

娥玉は元々「月の庇護を受けた瓊瑶」として有名だと、後で紗甫に聞いてみると教えてくれた。流石六天楼で働く良家の娘だ。

娥玉は知らなくとも、巨娥は庶民の間でも信仰されている。日輪はげい猊と呼ばれる男神が、月は巨娥が司るという自然崇拜の神話。

「どうして私の名を？」

外見を裏切らない涼やかな声は、仄かな明かりの宿る庭で余りにも現実味がなく。

幽玄の中でさえも色濃く、よく知る人の面差しを浮かび上がらせていた。

「そ、それはちょっと。聞いた事があつたものですから」

「私の話を？」

季鶯は首を傾げる。

「あの子が母親の話をするはずはないし、おおかた魔物が幽霊ぐらいの扱いかしら。どちらにしてもすっかり忘れ去られたと思っただわ」

皮肉めいた言葉が翠玉を現実に戻した。

返答に困って黙っていると、何故か逆に相手の方が決まり悪そうにする。

「あ……またやってしまったみたいね」

碩有の母親ならば少なくとも四十は間違いないく越えているはずなのに、悪戯を見つけた少女の様に口をとがらせた。

「私はどうも口が悪くていけないの。別に貴方をどうこう言うわけではないから、気にしないで」

ありがとう、と手を差し出して季鶯は優婉に笑った。

「耳飾りを拾ってくれて。とても大切なものだったの」

月明かりにさえ輝くその貴石を受け取り握り締め、すぐさま自分の耳に付ける。一瞬翠玉は彼女が泣き出すのではないかと思った。口元は笑みを形作っているというのに。

「……思い入れのあるお品なのですね」

きつと恋人からの贈り物だったのだろう。普通に考えれば、碩有の父親からという事になる。

夫の両親の恋愛を思い顔を綻ばせた翠玉を、迎えたのはだが複雑そうな瞳の色だった。

「ええ、忘れてはいけないものだという点ではすごく。思い入れというよりは妄執ね」

「え？」

「何でもないわ。ところで貴方は今日一人みただけど、あの子とはどう、上手くいっている？」

翠玉はすぐには返事が出来なかった。不躰な内容と、痛いところを突かれたと思ったからというのもある。

「私、まだ名乗ってもいないと思うのですが」

ようやく切り返すと、軽やかな笑い声が上がった。

「ここは六天楼の主人が住まう房ですもの。側室なら別の房に入れられるし、夜中にそんなあられもない姿で房から出て来るなんて、当主の夫人しかありえないわ」

「そ、そうですね。なるほど……」

絹の寝着に袂を羽織った姿をあられもないと言われれば、確かに紗甫などはそんな恰好はしないだろうと思った。

さらに言外の意味を汲み取れば、この人はかつて此処に住んでいたはずだ。見覚えがあつて当たり前だろう。

「最近の邸内の話はあまり聞いてないから、詳しくは知らないけど。早いものよね、もう夫人を迎えたなんて」

季鶯の眼差しは遠く、何処か別の場所に思いを馳せているかに見える。

領主が結婚する年齢としては、二十五歳は決して早い方ではない。この辺りでは、庶民でさえもおおむね二十歳前に結婚するのが慣例だ。

それは男女の別を問わないし、貴人ならば尚の事、政略的な思惑も絡んで婚約なども早く、十代での婚姻も珍しくなかった。

「碩有様は御年二十五にお成りですが……遊学なさっていないければ、二十歳にはご結婚なさっていたでしょう」

戴剋の思惑など知らないままな彼女は、ただ前夫が側室の処遇を案じて計らっただけだと思っている。

もし二十歳の頃なら祖父は存命だ。自分などとは結婚しなかったのだろうな。想像が飛躍して勝手に少し切なくなりそうなのを慌てて振り払った。

それにしても明らかに高貴なこの女性は、息子の年齢をまさか覚えていないのだろうか。

夫から父親はともかく、そう言えば母親の事を聞いた覚えがない。なのでこちらからもあえては聞かず、漠然と亡くなったのだろうと思っていた。だが。

「そうね。でも私が言うのはそんな意味ではないのよ。あの子が貴方みたいな伴侶を得られる日が来るなんて、と思ったの」

あの子は私の血を分けた人間だから。

呟くとやはり先ほどと同じほろ苦い笑みをひらめかせた。

何か言おうと翠玉が口を開いた一瞬に先じて、季鶯は「此処は冷えるわね」と身を縮める。

「今日は本当にありがとう。良かったら明日にでも、私の住まいにいらっしやらない？ 改めてお礼もしたいし」

「いえ、そんな。ただ拾ったものをお返しただけです。お気になさらないでください」

「じゃあ、気軽に来て話し相手になってもらえる？ 実は私、長く世間から離れていたの。貴方みたいな方が訪ねてくれたら、鉦柏楼も華やぐわ」

それじゃあ、と片手をひらひらと振って彼女は来た時同様、闇に溶け入る様に去っていった。

遠慮がちに手を振り返して見送り、翠玉は房へと戻る。身体がすっかり冷えてしまっていた。

何処か腑に落ちない。

亡霊と囁かれるからには、もっと奇矯な人物を想像していたのに。

全くそんな風には思わなかった。人懐こい、いかにも育ちの良さそうな女性ではないか。

ただ季鶯の印象と、何処か陰りを見せる言葉の数々は落差があり、翠玉の興味をかきたてた。

明日、鉦柏楼を訪問してみよう。

阿坤は「禁じられている」と言ったが、住人に許可をもらったのだ。今度は駄目と言われはしないはずだ。

翠玉は籠に丸まって眠る莉を抱き上げ、寝台へ持ち込みながらそんな事を思った。

「駄目です」

あくる日の朝、食事を終えるや否や鉦柏楼へ行きたいと告げると、阿坤はにべもなく答えた。

「どうして！ 季鶯様が『来てほしい』って仰ったのよ。一体何の不足があつて」

「鉦柏楼に人が入るのを禁じているのは、棲んでいる方ではないからです」

「じゃあ誰が！」

言いながらも嫌な予感がして、翠玉は言葉をためらった。
そんな事が出来る者なんて、一人しかいない。

「はい。御館様に許可を頂かなくてはあちらに渡る事は出来ません」
「え、でも確か貴方、『此処は御館様自身も入るのを禁じられてい
る』って」

「だから、でしょう。詳しい事情はわたくしにはわかりかねますが、
どうしても仰るのであれば、許可を頂いて下さいませ」

槐宛ならばともかく、恐らく他意はないのだろうが 皮肉だろ
うかと勘ぐってしまう。

夫を遠ざけてから早三日目、もはや完全に仲直りする時機を逃し
てそのままにしてしまっていた。

最初の頃こそ感じていた憤りも冷え、今ではあちらに落ち度があ
ったわけではないとさえ思っている。

だからこそどれほどに怒っているかと恐れて、つい後回しにした
いという逃げと、会えない寂しさとの板ばさみになっていたのだが。

「……わかったわ。許可をもらってくれば良いのでしょう。付いて
きて」

「どちらへ」

「もちろん決まっているじゃない。 御館様の所よ」

今ならまだ執務に向かう前だろう。翠玉は庭に降り立った。

邸の当主が棲まう東の奏天楼は、彼女が起居する西楼とちょうど
向かい合う位置にあった。

普通に行くと、各楼を繋ぐ廊下を渡り南か北の楼を通り抜けなけ
ればならず、家人に出会う機会も多い。

格式ばったものに未だ慣れない彼女にとって、庭をまつすぐ突っ切った方が話は早いと思われた。

の。
大分庭の様子もわかって来たし、迷わなければすぐに着けるも

阿坤も今度は反対せず、黙って後に付き従っていた。

薄曇りの空のせいか庭はやや暗く、邸の中も今日はあまり良く見えない。

それでもほどなく見えてきた建物の中、開いた房の奥に目指す人物の姿を認めると翠玉の心は躍った。

碩有様。

長椅子に斜めに座って肘掛に腕を投げ出すという格好は、疲れて見えた。いつも姿勢の悪くない彼には、らしからぬものだ。やつれていて尚色気さえ感じる姿が、まるで知らない人の様に新鮮に映る。翠玉は自分が妙に緊張しているのを感じた。心臓が早鐘を打っている。

その存在から目が離せないのに、同じくらい息苦しくて逃げ出したい。

「奥方様、お時間が」

背後からの冷静な囁きに弾かれ、足を進める。

階近くに立つと、踏みしめた砂利が音を鳴らした。

「碩有様」

掛けた声あまり上ずっていないかった事に、翠玉は己を褒めてや

りたかった。

驚きに目を見開く夫と、更に奥に控える朗世がこちらを凝視している。

「おはようございます。あの、朝から申し訳ないのですが、すぐに終わりますのでお時間を頂けませんか？」

明らかに歓迎されていない雰囲気は、彼女を打ちのめした。

やはりお怒りなのだろうか。それとも単に執務前に邪魔が入ったのを非常識だと咎めているのだろうか。

返事がない無言の間にそんな風に考えていると、二人が何やら耳打ちするのが見えた。

次いで朗世が一礼して房から出ていく。

碩有は椅子にもたれた体勢のまま、感情を窺わせない眼差しをこちらに向けた。

「それで、いきなり何の御用ですか」

ああ、やはり怒っている。当り前か。

いたたまれない己を叱咤しつつ、言葉を探した。

「……先日は済みませんでした。追い出したりしてしまって、反省しています」

彼はこめかみを押さえていた右手を離し、少しばかり姿勢を正して座り直した。

「とりあえず 中に入ってください」

断られたらと内心気が気ではなかった翠玉は、そうと知られぬ様息を吐いた。黙って庭に控える阿坤を待たせて、房内に入る。

「座らないのですか」

長椅子の空いた部分をちらりと見るものの、腰を下ろすのをためらっている怪訝そうな声が出た。

「いえ……すぐにお暇しようと思っと思っていますので」

「立ち話も忙しなんでしょう。それとも、何か急ぎの用事だったのですか？」

これから執務に向かう時間のなさを配慮したつもりという言葉だったのだが、どうも雲行きが怪しくなってしまった。慌てて碩有の隣に座る。

「急ぎといいますが、早い方がいいと思っ」

仲直りは。

きつと自分は、先に仲直りをしたかったのだと気付く。

季鶯の話もいい口実でしかないのではないかと、いざ会いに来てみるとそう思えた。

だが今さら引つ込みも付かない。傍らの人物が「じゃあ早く話せ」という苛立たしげな気配を放っている。

こんな冷たい態度は久しぶりで、どうしていいものか判断に困った。

「実は季鶯様からお招きを頂きまして、鉦柏楼にお邪魔したいと思うのですが」

許可を頂けませんか、そう続ける前に「駄目です」という返事が返って来た。

「ど」

理由を聞こうと尚も口を開いた翠玉は、夫の表情を見てそのまま何も言えずに閉じるしかなかった。

これはものすごく怒っている！

「……こんな時間にやって来るかと思えば。貴方はよほど他人が気に掛かるのですね」

真つ直ぐこちらを見下ろして来る黒い瞳は、強い怒りを伝えて余りあった。

背筋が凍る思いをしながらも、この表情は以前にも見た事があると記憶を巡らす。

同じ目をしている。墓参りから帰った後、彼女に荒々しく迫ったあの時と。

違うのは、今回夫は自分に触れていないという所だった。

「私がいるだけでは駄目なのですか」

「だって、貴方のお母様なのでしょう。他人ではありません」「あれは母親などではないのです」

ようやく碩有自身の口から出た季鸞についての言葉は、衝撃的なものだった。

「噂なら聞いたでしょう。その通りなのですよ。取り戻せもしない過去に縊り、周りの事など顧みかえりもしない。亡霊と言うに相応しいあの人の時間は、もう止まったままなのだから」

碩有は立ち上がり、「話がそれだけでしたら、お帰りください」と庭にいる侍女に顔を向け促した。

「仕事に向かいますので」

またいずれとも言わず、妻が房を去るのを黙って見送る。

「奥方様」

余所余所しいばかりの態度に、触れられる事も。

すぐ傍にいたというのに、触れる事も叶わないなんて。

侍女の問いかけに何も言わず来た道を引き返す翠玉の目元から、小さな雫が零れ落ちていった。

四 掛け違えたもの（後書き）

脚注・しむ掛はあてルビです。

五 季鷲と禎文

「翠玉様……炉に火を入れても宜しゅうございますか？ 急激に冷えて参りましたし」

それまで黙って時折様子を窺っていた紗甫は、いくら経っても主が長椅子に座ったまま身じろぎする気配がないので、いよいよ心配になって来た。

翠玉は手に書物を持っていたから、表向きは読書に没頭しているかに見える。例え頁が開いてから一度としてめくられていなかったとしても。

「翠玉様」

重ねて聞くと、彼女はまるで初めて房内に侍女の存在を認めた様に驚いて顔を上げた。

「え、ええ。そうね。そうしてもらえ」

曇り空は夕方になっても回復する事なく、春とは思えない寒さである。故に昼を境に雨戸も閉めてしまい、室内はもう灯火が灯っていた。

ぼんやりと侍女の火興しを眺めていた翠玉だったが、不意に「消す時はどうやって消したらいいの？」と尋ねた。

鉄の格子扉を閉め、中の火がきちんとはぜているのを確認して紗甫は振り返る。

「おき火がなくなれば自然に消えますが、急に消したくなつた時はこの把手とくてを右に回してください。中の換気が切り替わって、炭に蓋

がされますから」

指で示された炉の飾り縁の上に付いている小さな金具を、翠玉はしげしげと眺めて頷いた。

「でも危ないですから、私を呼んでくださいませ」

「ええ、わかつたわ」

につこりと笑う主にどうやら安堵して、紗甫の表情もまた明るくなった。

けれど卓に置かれた食膳の様子を見て、すぐにそれは消し飛んでしまう。

「翠玉様……」

「ああ、ごめんなさい。今日はどうも食欲がないみたいなの。下げてもらえるかしら？」

普段なら滅多に出された食事を残す事などないというのに、膳の中身はほとんどが箸を付けられないままである。

それでも作業などで熱中して、という場合には遅くなっても必ず後から平らげるのだが、娘は主の気丈さが、見せ掛けのものなのだと気づいた。

阿坤を連れて朝方外に出た後、すぐに帰って来た時翠玉は泣いていた。

しばらく一人にしてくれと言われて席を外したものの、心配になった紗甫は気づかれぬ様、実はこっそり次の間から中を覗いたりしていたのである。事情を阿坤に聞こうにも、元々あまり多くを語らない女性なのでこちらで察するしかなかった。

「奏天楼に行きました」という短い報告と、主の涙で。

「……今日はもう寝ます。火は自分で消せると思っから、支度をしてくれたら退がって構わないわ」

使用人にさえ気を遣う翠玉は、何もかも紗甫に打ち明けるといっわけではない。

今ばかりはその優しさを寂しく思いながらも、紗甫は異を唱えずに食膳を手に掲げ、房から立ち去った。

実は見た目ほど、翠玉は悲しみにくれているわけではなかった。

こちらに戻ってしばらくは泣きもし己を責めてはいたのだが、その内にふと、今回の仲違いの発端が自分の婚約者との再会にある事に気づいた。

自分がそうであつた様に、夫にも触れられたくないものが存在してもおかしくはない。

哀しい事ではあつたけれども、幸せな記憶よりも辛い記憶の方が爪痕となつて、強く残るもの事実だ。

問題は、私が知つた方がいいのか、それとも知らない方がいいのかという事。

朔行との事はいずれきちんと話をしようと思つているが、碩有はどうだろう。

言われるまで待つていた方がいいのだとは思うのだが、そもそも、今となつてはどう仲直り出来るのかわからない。

謝つても解けなかつた怒りは、どうしたら解けるのだろうか。

こうして食事も忘れて考え込んでいるうちに、瞬く間に日は暮れ夜も更けていった。

いくら自分だけで考えても答えは出ない。紗甫も寝支度を終えて

出て行ったのを見て、諦めて眠ろうと炉に近寄った。
何処からか奇妙に響く音が聞こえる。

庭から？

こつん、と小石が当たる音に思えた。

「まさか」

翠玉は雨戸の門かんばんを外し、勢い良く押し開ける。

「こんばんは」

来てしまったわ、と季鶯が外套を羽織った重装備な姿で庭に立っていた。

「どうなさったのですか！ こんな寒い日に。お身体を壊しますよ」

「とにかくお上がり下さい」と脇に避け促した。鷹揚と言つべきか、遠慮する気配もなく彼女は階を上がって房に入る。

「良かった。門前払いをされるのではないかと、少しだけ心配していたのよ」

ああ寒い、と身を揉む様にして炉に近寄り掌をかざした。

「此処は暖かいわね。私の所は火を入れていないから、寒くてしょうがなくって」

「何か暖かい飲み物でも、持ってこさせましょう」

椅子を勧めつつ戸口に向かおうとした翠玉を、彼女は手をかざして押しとどめた。

「お構いなく。私が此処に来ていると使用人に知れたら、困るのは貴方じゃない？」

「……そう思うのでしたら、何故おいでになったのですか？」

「喧嘩しているのでしょうか？ 側室もいないのに二日連続で来ていないなんて、そうとしか考えられないわ」

翠玉は義母をねめつけた。多少不機嫌でも罰は当たらないだろうと思った。

「質問しているのは私の方です」

「だからよ、だから。あの子が何故ああなってしまったのか、話しておいた方がいいと思ってあえてやって来たってわけ」

「第一、もし此処に碩有様がおいになっていたらどうなさるつもりだったのですか」

人の気も知らないでよく言う、と刺刺しい質問を投げると季鶯は挑む様に笑う。

「小石を投げても中から反応がなければ、お取り込み中だと思ってしまうつもりだったわ」

言葉を失って、翠玉は隣の椅子に座り込んだ。

「……お話を伺います」

まあきつと私のせいなのは間違いないと思うのだけど、そう苦笑を浮かべて季鶯は話し始めた。炭がはぜる音がして、炉の中から漏

れる炎の明かりが彼女の頬を照らしている。

「昔話よ　ある一人の愚かな女の、長くて退屈な思い出話」

嫋嫋たる声音ウツクシクで紡がれたしたのは、眠れそうにない夜に　いかにも似合いの物語だった。

四番目に生まれた娘だから「季鶯」と、名づけられたと聞いてい

る。
上は男ばかり三人兄弟。ただ一人の姫として、甘やかされて育つたという自覚がなかったわけではない。兄達はいつも季鶯を遠出に連れて行ってくれたし、父や母も欲しいものは何でも与えてくれた。ただその嗜好は少しばかり偏っていたから、よくある着物や瓊瑤の様なものではなかったけれども、より手に入れにくいわけでもない。山野を駆けずり回って育った娘は、鳥や野草についての書物が大好きだった。瓊瑤よりも川に転がる石を集めるのを望んだ。

ともあれ彼女は十八の歳まで、自然豊かな鄭家の領地ていで何不自由なく過ごしたものである。　以前交わした約定通り、陶家に嫁ぐ日がやって来るまでは。

口さがない彼女付きの侍女は、陶家を「格下の成り上がり」と陰で蔑んだ。確かに歴史は鄭の方が大分古いと、母ですらも言っている。それを嘲る理由はよくわからなかったが、何処か頭の隅にあったのかもしれない。

だから季鶯は、夫となる楨文を初めて目にした時思ったものである。これからはこの優しげな人が、家族の代わりに私の世話をしてくれるのだと。

「野遊びが好きだと聞いていたけど、貴方の肌は白いのだね」

嫁して最初に肌を許した時に、その白さを褒めて楨文は微笑んだ。破瓜^{はか}の衝撃に微笑み返す事は出来なかつたけれど、言葉は印象強く彼女の記憶に残っている。

思えばあの時から既に、夫に笑顔を向けられない日々は始まつていたのかもしれない。

楼から一歩たりとも出られないという閉塞した環境は、想像以上に辛いものだった。

此処には自分を慰めるものが庭の木々しか存在しない。あんな人工的に植えられた生命を愛でると言うのか。憤りは募るばかりだった。

陶家の次期当主楨文は一人息子で、元々係累^{すくな}の寡^{すくな}一族だという。多産で知られる鄭家の血筋を迎える理由はわかりきっていた。季鶯自身も、夫人はそうあるものだ^と教えられていたのだ。子を生し、出来るだけ多く育てる。それだけの役目だ。

故にこそ不満に耐えかねたのは、楨文に側室が多い事だった。

「父親の戴剋様程ではないが、血は争えぬ」と、家人の口の端に上るだけでも両手に余る側室を持ち、全てに平等に寵愛を分け与えているという。

それは困ると思った。

側室に割く時間の分だけ、自分が跡継ぎを設ける可能性が減るではないか。これでは何の為に生国を離れたのかわからない、と。

「側室の方に通うのを、せめて世継ぎが出来るまで控えてもらえませんか」

臆面もなく夫に申し出たのは、ひとえに愛情がない事の証だったが、本人はまるで気づかなかつた。いつも細やかな気遣いを見せ愛想の良い楨文はからかう様に、

「貴方の言葉が嫉妬から出ているのならば言う通りにもしようが、

そつでない以上は聞けないな。彼女の方がよほど私を必要としてくれるからね」

と全く取り合わない。

「良いのかしら。世継ぎを必要としているのは、私ではなく陶家でしよう?」

年上でしかも夫という目上の立場であるにも関わらず、季鶯はいつも彼に対してそんな態度だった。この優雅な魅力を振りまく青年は、何故かいるだけで彼女の苛立ちを誘うからだ。

自分には許されない自由を持っているからだろうか。気ままに好きなだけ、行きたい所に行けるといふ。

皮肉の応酬の後、決まって楨文は苦笑し、妻の顎に指を掛けこう言つのである。

「まだまだ子供だね。もう少し大人になったら、自然に世継ぎが授かるだろう」

何を世迷言を、と季鶯は房を去って行く広い背中を冷たく見送りながら嗤^{わら}った。

大人でなくとも身体が成熟し、行為さえあれば子供は出来るといふのに。

楨文が傍目には良き夫であるのは 貴人の常識の範囲内では どうやら間違いがなさそうだった。様々な贈り物を欠かさず、異国出身の妻が過ごしやすい様にと故郷の内装を房に取り入れる。暦を見ているのかというほど判で押した様な訪ない。遠ざかるでも、執着するでもない。

他の女性に対しても同じ事をするのか、と聞いた事もあった。月見をしていた夜の話だ。

「まあそうだね。他の人たちはもう少し喜んでくれるけど」

「貴方は私を喜ばせようとしているの？ それとも怒らせようとしているの？」

「その言葉はそっくり返すよ。全く季鶯と来たら面白いね。今ぐらいは情緒というものを汲み取って欲しいな」

まるで巨娥の様だ、と彼は頭上に広がる澄んだ天穹てんきゆうを見て笑った。真円に満ちた月は煌煌くわうくわうと闇を照らし、雨戸を開けた房は灯火がなくとも明るい。

「ではご自分は差し詰め猯とでも言うおつもり？」

華やかなおおらかさと博ひろい情。灼熱のそれではなくとも、春の日和程度なら似つかわしいかもしれない。秋や冬の憂いを決して知る事などない光輝だ。

「まさか。猯ならば巨娥には触れられないからね……」

弓の名人でもあつた猯は誤つて天を射抜いてしまい、天の神堯ぎやう卯の罰を受けて妻に永遠に会えなくされる。だから日と月は同じ時に姿が見えないし、見えても昼の月は顔色が悪い、という謂いわれだ。巨娥に会えなくなった猯は己の行動を悔いたが、彼女は不名誉を受けたと夫を憎んでいる為だという。

一体いつまでこんな事が続くのだろう。

伸ばされた手に身体を委ねるしかないというのに、幾度迎え入れても一向に夫の肌は己に馴染まない。

女性の身体を知り尽くしているであろう愛撫も、広がって行く彼女の内なる空洞を埋める事は出来なかった。

六 季鶯と禎文

六天楼に入り一年が経過した頃、季鶯は身ごもった。

「おめでとうございます。これで御子が男子ならば、鄭の御館様もお慶びになるでしょう」

周囲の侍女の穿った祝いの言葉に、戸惑いを隠せないまま頷く。うろたえたのは彼女の言葉にではない。季鶯の傍仕えはほとんどが鄭家から付いてきた者達だ。主以上に、禎文を非難し側室に対抗意識を持っていた。

問題は自分の身体の変調だ。

何、これは。

何を食べても胸の悪さはおさまらないし、頭痛がひどく身体が鉛の様に重たい。あれほど房を出て外を動き回りたいと思っていたのに、今は全てがわずらわしくなっていた。

「初めての時は大抵症状が重いものじゃ。しばらくは安静にして、冷えや締め付ける衣服は避け、身体に負担を掛けぬように過ごせば宜しいでしょう。食事も変えなければなりません」

六天楼を長く取り仕切っているという槐苑は、皺顔を綻ばせて祝いの言葉を述べ「もうご自分ひとりの身体ではないのですから、ご自愛めされますよう」と結んで帰っていった。寝台の中に、独り茫然としている季鶯を残して。

この中に、子がいる？ あの人の？

まだ平らなままの下腹部に手を当てて、彼女は自分がいかに「子を生む」という作業を絵空事に考えていたのかと愕然とした。

「よくやってくれたね。嬉しいよ。君に似るのなら、どちらでもきつと美しい子になるだろう」

楨文は満面の笑みで懐妊を喜んでくれた。それがあまりに予想外だったので、またも季鶯は対応に困り黙って頷くしかなかった。

「具合が悪いのかい？ 最初はそういうものらしいが。何か欲しいものがあれば、遠慮なく言いなさい」

青ざめてまともに返事もしない女に、どうしてこの人は暖かさに満ちた手で触れるのだろうか。不思議でたまらなかった。

楨文は妻の頬を撫でながら、房を見回して「香を焚くのはやめた方がいいね。身体に障るといふよ」とたしなめた。

季鶯はそれでも答えなかった。知っていたからだ。槐苑にも侍女にも言われたが、いつもの香りがしない室内はひどく気に障った。ただでさえ調子が悪くてふさぎ込んでいるのに、あれも駄目これも駄目と禁じられ、懐妊がわかって数日にして我慢は限界を超えていたのだった。

「楼にいる者で、過去に同じ様な真似をして子を流した者さえないんだ。貴方も気をつけないと」

季鶯はそれまで背けていた顔を上げ、楨文を睨み付けた。

「出て行って」

「季鶯」

夫の表情は初めて見るものだった。張り付いていた笑みは消え、戸惑いさえ浮かんでいる。

「私を氣遣うと言つのなら、しばらく放っておいて。静かに過ごしたいの」

優しさから出た言葉と頭ではわかっているのに。季鶯は顔を背けて庭から視線を動かす事なく、遠ざかってゆく足音を聞いた。

懐妊したのは私が最初じゃない。詳しくて当たり前だ。

槇文には既に側室に女兒が二人いる。それぞれ別の腹から生まれたい子供だ。詳しく知ろうとしないだけで、側室の数を考えればもつといたのかもしれない。流産死産も珍しくはない世の中だ。何故これほどまでに、自分は彼を疎むのだろう。相手を思いやる余裕もない。一体いつまで礼儀をわきまえない子供なのか。子供が子供を生むなんて、お笑い種もいいところだった。

出来るわけがない。この子の母親になるなんて。

いずれにしても、槇文はもうこちらには訪れないだろう。

自嘲気味に笑って、彼女は生まれてくるわが子を初めて不憫に思った。

だが予想に反して、次の日も槇文は季鶯の元にやってきた。手には盆、上には皿と鮮やかな黄色の果実が載っている。

「杓桶しやくびくを持ってきたよ。食欲がないそうだが、これなら食べやすいと思うんだ」

「……もう来ないでと、言わなかったかしら」

相変わらず寝台から離れられない季鴛はすっかり憔悴せうすいしていて、昨日の様な強い口調さえも出なかった。対して彼はいつもの口調で、「言われなかったと思うけど。何を怒っているのかわからないが、貴方に今大事なのは丈夫な跡取りを生む事だろう？ 失敗したら苦痛が長引くだけだと思うよ」
とからかう様に笑う。

「今だって充分……苦しいわ」

流産の苦痛を指して言っているのだろうと思って訴えると、楨文は少しだけほろ苦い表情をした。

「まあ、とにかく人の言う事は聞けって話かな」

寝台脇に椅子を持ってきて、腰を下ろすと杓桶の皮を器用に剥き始めた。

「厨房で切れ目を入れてもらったんだ。鄭領では今が収穫時期なんだってね」

恐らく彼は知っていて取り寄せてくれたのだろう。妻が故郷で好きだったものを、侍女辺りから聞いたに違いない。いつもそうだ。そつがない。

「口を開けて」

季鶯は肩肘を立てて、半身を起こした。

「病人扱いしないで。自分で食べられます」

「じゃ、はい」

皿ごと差し出された皮と同じ色の瑞々しい果肉を、彼女は匙で掬い取る。

久しぶりに口にした食物は懐かしい味がした。

「どう？ 美味しい？」

「……ええ」

「良かった」

成熟した果実よりも、楨文の言葉は甘く響いた。それでも季鶯は彼を見ようとせずに、ただ黙って杓桶を口に運んだ。

沈黙に耐えかねて、小声で礼だけを言うと顎を持ち上げられる。

「……付いているよ。口の横に」

拭ったのは手ではなかったが、季鶯は特に抵抗するでもなく受け入れた。唇の横から徐々に移動して来ても、歯の隙間から舌が滑り込んで来たとしても。

「季鶯」

唇を離れた刹那、次に何かを言おうとしている夫に彼女は冷えた視線を向けた。

「具合が、悪いの」

「ああ、わかっている」

「夜伽はしないわ。必要なら、他に行つて」

硬く強ばつた面で告げると、彼は「そこまで不自由してないよ」と苦笑して立ち上がった。

「帰るの？」

「まるで帰つて欲しい様な言い草だね」

だが彼は房を去るところか、枕元に積まれた書物の一つを取り上げてまた腰を落ち着ける。

「そう言えば、貴方は石が好きだと聞いていたけど。この本には瓊瑶はあまり載っていないみたいだな」

「違つわ。私が好きなのはごく自然のものよ」

手にしたのは、山河にある石の種類と特徴について書かれたものだった。

「女性は大抵、瓊瑶が好きなのだろうと思つていたが」

「貴方の知っている女性が、でしょう。少なくとも私は興味がないわね」

言つてしまつてから季鶯は決まりが悪くなつた。これではまるで、自分が彼女達に嫉妬しているみたいではないか。

「……自然の中の石や草花は、そこにあるから美しいのよ。女の身を飾る為にある瓊瑶とは違つ」

恥ずかしさをごまかす為に、今まで侍女にさえ言わなかつた思いを口走つた。

ふうん、と気のない相槌を打ちながら、楨文は書物をぱらぱらとめくる。

「瓊瑤だつて元々は山奥にあるただの石じゃないか？ 美しいと決めたのは人間の感覚さ。そしてほとんどの人間は、美しいものを手に入れたがる」

たとえばほら、とある頁で手を止めて項目を指差した。

「これは陶の領地の一つで採れる『娥玉』という石だ。一見白い不透明な石に過ぎないが、割れた角度によっては断面に多色の光彩が見えて実に美しいと言われている。だが偶然割れたものを発見されるまでは、ただの石として採掘場でも邪魔もの扱いされていたんだ。緋鉍石と同じ地層に現れるからね」

石の話題を広げられると思っていなかった季鶯は、俄かに興味を示して書物を覗き込んだ。次いで彼の顔を。

「石に詳しいの？」

「私は色んな事に首を突っ込む性質でね。特に領土内の事には」

返つて来たのは、明らかに愉快そうな笑みだった。

「緋鉍石は鄭では珍しかったのよ。貴方は採掘場に行ったりするの？」

「時折ね。工業に欠かせない石だから、特に気をかけているんだ。ここでも石を狙って盗賊が現れるぐらい貴重な石だよ」

「そうよね。車に使われていると聞いた事があるわ。確か桐でも…」

彼を何とかして追い出そうとするのも忘れて、気づけば季鶯は夜近くまで夫と話し続けていた。石の話題から始まって、使われているものから山の気候にまで話は及んだが、楨文はそれら一つ一つに造詣が深く、彼女は驚いた。楽しくて笑顔さえ浮かべていた。

今までまともに会話しようと思わなかったから、わからなかった。

夫としてではなく、一人の人間としてなら仲良くしていけるかもしれない。そのまま彼女の寝台に潜り込んだ楨文の寝顔を眺めながら、季鶯はようやく少しだけ、歩み寄ろうという気になった。

年が暮れて月は満ち、生まれたのは健やかな男子だった。

六天楼を始め、陶の領土全てが世継ぎの誕生を喜ぶ声に溢れた。季鶯の元には次々と家臣や楼内の人間が訪れ、祝いの言葉と共に様々な品物を置いていく。侍女達は取り澄ました側室の顔を陰ながら眺めて、溜飲を下げたらしい。誇らしげな会話は主の耳にも入っていた。楨文が毎日此処に来る様になったから、尚更なのだろう。

「やはり貴方に似ている気がするな。髪の色や、目元なんてそっくりだ。賢い子になるに違いない」

赤子を覗き込んで彼が言うと、周囲に控えていた侍女達も楽しそうに笑った。

「御館様。嬰兒の髪の色や顔立ちは成長と共に変わりますぞ。勿論どちらに似ても、伶俐な御子になるのは間違いないでしょうが」

槐苑が横からたしなめて、また笑いが起きる。

見るからに幸福に包まれた光景を、季鶯はどこか遠くに思いながら冷やかな眼差しで眺めていた。

「どうしたのだ、身体の調子が悪いのか？」

「い……いいえ。何でもないの」

心の奥で囁く声がする。この人がこうして私の元へ来るのは今だけだ。跡継ぎが出来たのが嬉しいのであって、いずれまた来なくなるに違いないと。

以前ならそうあって欲しいと願っていたはずだ。なのに。

脇に眠る、産着にくるまれた小さなわが子を見下ろす。夫の言葉は誇張ではなかった。慎文は髪の色がやや明るく、肌は浅黒い。女子かと思えるほどに、赤子は自分に似ていた。

「大事を成し遂げてくれたのだ、産後の肥立ちが悪くてはいけないからね。槐苑、侍女達も一層気を配ってやって欲しい」

それからも何かにつけて訪れては子供の 父親によって『碩有』と名づけられた 顔を見ては帰っていく。だが予想通り、しばらくするとやはり以前の様に定期的な訪れとなった。息子の顔を見ても、泊まらず帰るといふのもしばしばあった。

ああ、やはりそうなのだ。

かねがね「子を産むのが役目だ」と公言していたにも関わらず、開きかけていた季鶯の扉からは隙間風が入って来る様になった。風はひどく身に沁みて、どういっわけか悔しかった。

「お一人ばかりを寵愛なさっていは、楼内に争いを生みますから

のう」

槐苑などは当然だという顔をしていたが、季鶯はどうにも納得出来ずに扉を閉める事にした。碩有が生まれる以前に戻ればいい。難しくはないはずだと。

楨文は妻の態度の変化に気づいていたらしいが、口に出しては特に何も言わなかった。彼自身はずっと変わらないのだ。ただ訪れる頻度が変わっただけ。泊まる時には妻に手を伸ばすというのも変わらない。

変わったのはむしろ季鶯の方だった。

最初の内は「まだ身体が戻っていないから」と断り続け、言い訳も尽きると「気分が優れない」と背を向けた。

そんな事が何回も続いて、遂に楨文は妻に詰め寄った。

「身ごもっている時はあんなに素直だったのに。一体何をそんなに怒っているんだ」

怒ってなどいない。ただ哀しいだけだ、などととても言えなかった。

「……もう、私の役目はこの子を育てる事だけだから」

出来る事ならもう、その優しい手で触れないで欲しい。身体は心に繋がっている。今夫に抱かれると、二つが引き離されてしまいそうな気がした。

俯いて目を合わせようとしない季鶯を、楨文はしばらくじっと見つめていたが、ふと息を吐き、

「なるほど。確かに貴方には身を飾る瓊瑶は必要ないな……」

と謎めいた言葉を残して、静かに房を出て行った。

七 季鷲と楨文

それきり、楨文の訪れは途絶え一月が過ぎた。

当たり前だわ。あれだけ拒まれて、愛想が尽きないわけがない。

今や侍女達でさえ、直接的ではないにせよ彼に対して同情を示す様子があつた。流石に主に対しては「跡継ぎは碩有様なのでですから、ご心配なさいますな」と表向きは非難しないものの、態度もどこか沈みがちだ。

季鷲は寝台の帳をわずかに開け、中ですやすやと眠る息子を見て自嘲気味に微笑んだ。

本来生まれるとすぐ東の奏天楼に移されるのが世継ぎの定めだが、彼女は一度だけ夫に文を出した。生国の母を見習って出来る限り乳母の手ではなく、自分の手で育てたいと。

返事は「三歳をもって東に移す」というものだった。

三年、という根拠はわからなかったが、許しが出ただけでも嬉しかった。初めて見る夫の筆跡は総領らしく達筆で、彼女は返事の文を胸に抱きしめて、知らず涙さえ零したものである。

何もかも予定通りになったのに、この胸の苦しさはどうした事だろう。

答えはある初夏の昼下がりに、槐苑の一言がきっかけで訪れた。

「御館様が明日より呉くれに向かわれるそうじゃ」

解せぬのう、とこれ見よがしに首を捻る。この老婆は常に情報通だが、原因はこういつた思わせぶるところにある、と季鷲は思っていた。

それでも黙っていると、さらに言う。

「今あの町に入るなど、危険だと聞きましたがのう。鉾山で盗掘が相次いでおるとか。そんなもの、洛庁の役人を向かわせれば良いものを……一体何をお考えなのか」

槐苑の魂胆は見え透いていた。領主の女達をまとめるのが役目だとかねてより公言している。疎遠になった自分と夫との仲を取り持とうとしているのは明白だったから、手に乗るのは癪だったが、『呉』という地名に思わず反応してしまった。

「あそこは……緋鉾石が採れる町でしょう」

楨文が本を見て指差した、娥玉も採れるという場所。

「そんなに盗掘の被害がひどいの？」

「定期的に何者かが石を横流しにしている疑いがあると、もっぱらの噂ですじゃ」

ひどく胸騒ぎがして、その後の槐苑の話も上の空になった。

直轄で監督している鉾山だと聞いている。彼女は陶の政治にはあまり詳しくなかったが、鄭ではよく父や兄の教えを受けた。

不正を行うならば、現地の上役人が関わらないとまず出来ないのではないか。

だとしたら、彼らにとって楨文の来訪は 危機であり、好機でもある。

止めなければ。そう思ったが、六天楼を離れるのは掟で禁じられていた。

あのひとに……せめて文を出して、忠告を。

筆を執ろうとして、その手がひどく震えている事に驚いた。

まるで時機を計ったかのごとく、寝台の中の碩有が泣きだす。お腹が空いたでも下布を替えるでもない泣き方は彼女の不安を煽った。

「大丈夫よ……」

抱き上げてあやすものの、言葉の確かさを季鷲自身が一番信じていない。

「随分と大きな泣き声だね。もの静かな子だと思っていたのに」

聞こえるはずのない男性の声に、耳を疑って彼女は寝台から赤子を抱えたまま飛び出した。

房の中に槇文が立っていた。背広ではなく略式のいんたの衣を着ているという事は、執務が終わったのだなどと、呆然としながらも思った。

「……貴方、なぜ此処に」

「ひと月も会わなかった割には、暖かい挨拶で嬉しいよ」

今までの狼狽など何処かへ行ってしまったかのように、季鷲は目を吊り上げた。

「それはこちらの言葉だね。質問に答えて」

槇文は笑った。全く以前通りの、彼独特の屈託のない笑みだった。

「もしかして、怒っている？」

季鷲は確かに怒っていた。だから怒りのあまり答えられなかった。自分で自分がわからない。表情一つ、仕草一つで身体が引き寄せ

られてしまいそうになるなんて。

「……明日、呉に行くそうね」

必死に話を逸らすと、彼は「槐苑だな。余計な事を」と顔をしかめた。

「危険過ぎるわ。罨でも張られていたらどうするの?」

「聞き間違いだろうか。貴方が私を心配してくれるなんて」

今までならこんな台詞と共に手が伸びて来たのだと、季鶯は内心身構えた。だが彼はそのまま動こうとしない。

「大丈夫だよ。腕の立つ部下達も護衛に充分連れて行くし。それに万一の事があっても、父上はまだ達者でいらっしやる。もう碩有もいるしね」

「何を馬鹿な事を。冗談ではないわ!」

楨文は苦笑して一歩、妻の元へ歩み寄った。唇が触れんばかりに顔を近づけて囁く。

「……賭けをしないか。私がもし、無事に戻れたら。その時貴方は私が贈った瓊瑶で身を飾るといふ」

意味がわからず、季鶯は目を見開いて静止していた。

確かに彼女は着物以外に装飾品を全く身に付けていなかった。夫からの贈り物の髪飾りでさえも、戸棚の奥にしまいこまれて日の目を見ずにいる。

「貴方には身を飾るものは必要ない。貴方自身の輝きは自然と同じ

で、脆く儂いものではないからだ　いや『なかつた』というべきか」

「い、一体何の話をしているのかわからないわ」

答える声にはかつての様に力が入らなかった。槇文の存在が、吐息が心をかき乱す。再び手の届く場所に戻って来るとは思わなかったから。

彼はほんの少し、哀しそうな表情をした。

「つまり単なる私の我儘だよ。少しだけ、貴方が私を思い出せる様にしたいんだ」

いつの間にか泣き止んでいた碩有の小さな頬に、指を添えて撫でる。

赤子は嬉しそくに笑い声を立てた。母親から抱き取り、腕に包み込んで彼もまた破顔した。

「私ができるんだね。……長い間放っておいて、済まなかった」

穏やかな、愛情に満ちていると誰でもわかるだろう声音が、季鷲の胸を締め付ける。

私は。

その言葉は、自分へのものではない。当然だ。

唇を噛みしめて悔しさを堪えていると、不意に槇文がこちらを見た。

かつて見た事がない、訴えてくる様な真剣な眼差しだった。

「それとも、賭けをする必要はない？ ……だったら今のうちに、

何か言っておいた方がいいと思うよ」

「 なっ」

秘密を暴露された時の気まずさにも似て、季鶯は顔を赤らめた。

「い、言ったじゃない。危険だから止めなさいって。聞き入れないというのなら、他に言う事なんて。気をつけて、ぐらいしかないわ」「そう。じゃあやっぱり賭けるしかないな」

顔がさらに近づいて、かすめる様に唇が触れる。

びくり、と震えた季鶯に笑って楨文は、赤子をその手に戻す。踵を返して戸口へと向かった。

「今日はもう帰るよ。明日は朝早くに立つ。戻るのは七日後だ。必ず戻るから、賭けに負けた時の心の準備をしておくんだね」

去っていくその背中を季鶯は呆然と目で追った。長い間、微動だにしないままで。

引き止めるだけでは駄目だったのだろうか。

もつと愛情溢れる言葉を期待されていたのかもしれない。他の側室達はきつとそうしたのでらう。

だが夫を愛しているかと聞かれれば、よくわからなかった。自分がよく知る愛情とは、こんなどす黒く燻くすぶるものではない。そう、彼が息子に向ける様な穏やかな感情ではないのか。

来てくれたのは嬉しかった。今日まっすぐに東に戻ったというのなら、恐らく最後に此処を選んだのだ。たとえ息子がいるからという理由だけでも、忘れ去られてはいなかったのだから。

ああ。それを素直に伝えれば良かった。

少しだけ後悔したが、きつと賭けとやらに槓文は勝ってしまっただろう。不運などには縁のない人種な気がしていた。戻って来たら、もう一度だけでも頑張っ て向き合ってみよう。今度こそ、きちん と。

久しぶりに触れた唇はほんの一瞬だけでも関わらず、身体の芯を揺るがすほどに鮮烈に心に残った。それが自分が何処か変わりつつあるという、確かな兆しに思えたから。

「奥方様！ お使者の方が参りました！！」

槓文が戻る予定の前日は、重苦しい淀んだ雲が洛の空を覆っていた。

彼が出立して三日目辺りから、長雨が降り続いていた。今日になってようやく止んだものの建物内は暗く、昼から既に灯火は上がっている。

ほの明るい房の中で季鶯は、危急の報せを持って来たと言うその使者の言葉に、頭を殴られた様な衝撃を受けた。

「な……んです……って……」

槓文が、呉の外れで山崩れに遭ったというのだ。

「盗賊は退治する事が出来たのですが、洛庁へと護送する手配が予定よりも延びたと急ぎ帰る途中でございました。往路の橋が大雨で流されてしまい、迂回をを選んだ山道もまた地盤が緩んでいたものと思われま……上からの落石を避けきれず……」

使者の女性は奏天楼の執務房に使える官吏で、説明は理路整然と
していた。それでも沈痛な面持ちが、嫌な結末を連想させる。

「それで あの人は 御館様は。ご無事だったの」

「重傷でございます。従者ともどもあちこちを数箇所打撲しており、
意識が回復しないと……今は呉の治療所に運び込まれていると報告
がありました」

目の前が暗闇に包まれて、視界が歪んだ。慌てた侍女が椅子を背
後に置く気配がする。何とか腰を下ろして、肘掛に縋りついた。

「奥方様 其方、もう少し言い方があるっ！」

「も、申し訳ございませんっ」

怒りを露にする侍女を制する為に季鶯は腕を上げようとしたが、
何故かいくら力を入れても動かせない。

「……いみじ医匠は何と申しているのですか」

自分の耳にさえ聞こえるかどうか分からない、小さな声しか出な
かった。

使者には何とか聞こえた様だ。身を硬くして彼女は口を開いた。

「非常に申し上げにくい事ですが 今夜意識が戻らないのであれ
ば、ほぼ絶望的だと」

回転を続ける季鶯の世界は、今度こそ闇に包まれ意識を失った。

必ず戻って来ると。そう言ったのに。きっとこれは悪い夢なの

だ……。

実はこの時点でもう槇文は息を引き取っていたのだと、戴剋が分別を働かせてささやかな嘘をついたのだと。

そして後一日待てば、川の氾濫は治まり普通に帰れるはずだったという事を。

彼女が知るのもっとずっと先の話になる。

結局若き領主の不運な死は公に知られる事となり、数日後槇文はもの言わぬ骸となって奏天楼に戻って来た。

慣例に従い、六天楼の女達に葬儀に加わる許可は与えられなかった。ただ一年の間喪に服す事と、忌みが明けたら執行されるべき彼の遺言が 何を思ったのか、槇文は出立の前にしたためていたと言う 戴剋によって公開され、命じられた。

一つには、次期領主を碩有と定める事。

成年になるまでは祖父戴剋が領主に戻り、後見を務める旨が頼まれてあったという。

その他領地の政務についての項目が驚くほど細かに記され、最後には六天楼について触れてあった。

側室は見合った財貨を与え、それぞれの希望を聞いた上で便宜を図って身の振り方を決めよと。但し二人の姫についてはしかるべく嫁ぎ先を見つけ、成年までは郊外の館にて養育する様に 既に館も用意してあるという周到さだった。

『宣言』と呼ばれる遺言公布の者が、朗々と夫の言葉を読み上げて行く。己が房で抜け殻の様に黙ってそれを聞いていた季鶯は、自分の名前が出てきた時にようやく顔を上げた。

三歳を迎えるまで碩有は母季鶯の元で養育するが、以降は奏天楼に移す事。

そして正室季鶯は、当人が望めば生国に帰してやって欲しいと
そう槇文は遺言を結んでいた。

「奥方様には、槇文様の形見分けがございます」

宣言がそう言つと、背後に控えていた侍女が静かに前に進み出た。
両手には高台を掲げ持っている。

椅子に縫いとめられたかの様に重たい身体を何とか持ち上げて、
季鶯はそこに載せられている小さな匣に手を伸ばした。

蓋を開き、中を覗く。一言も言葉を発しないままで。
息を呑んだ。

「従者の方のお話によると、呉にて以前、奥方様の為にお作りにな
られたものだそうでございます。事故に遭う前日に、職人より引き
取られましたとか」

見つめるばかりで何も答えない彼女の代わりに、槐苑が「見事な
娥玉でございますな。耳飾とは珍しい意匠にしたものですが。素晴
らしい逸品じゃ」と涙を零した。

「……この、匣」

掠れた声で搾り出す様に、季鶯はようやくそれだけを呟いた。

華やかな柄の布地で出来た匣、上蓋に黒く濁いた染みが付いてい
る。それはまるで、血の様な。

彼女の凍り付いた表情を読んだのか、先回りして答えがあった。

「いえ、これは泥でございます。拭き取りきれませんでした」

申し訳ございません、と侍女が頭を下げる。

「他の匣に移そうとしたのですが、戴剋様がこのままで良いと仰せになりました」

季鶯はその時、全てを悟った。

「奥方様……」

「……しばらく、一人にして」

気遣う侍女や槐苑を人払いして、碩有でさえも預けると季鶯は寝台に顔を埋めて泣いた。

嗚咽を聞かれるのをはばかっても、悲鳴に近い声が口から漏れるのを止められない。

鄭を離れる時ですら、こんなに涙を零す事なんてなかった。

あの時、せめてもっと優しい言葉を掛けてあげられたら良かったのに　後悔ばかりが彼女を苛む。

楨文はもう戻っては来ないのだ。自分の憎まれ口に呆れたり、笑っていた顔を思い浮かべる。甘やかな声で髪を撫で、抱きしめられる腕も、共に碩有の成長を見届ける未来も失われてしまった。永遠に。

戴剋様は、わかっておいでだ。でなければ、このような生々しい状態で渡そうとなさるはずがない。

耳飾の入ったままの匣を握り締めて、彼女はとめどもなく泣き続けた。

消えない染みは、恐らく泥などではないのだろう。そして義父は自分を責めている。そんな気がした。

八 束縛と開放

「……というわけで、私は三歳まであの子を育てられはしたけど、その後は隠遁して鉦柏楼に引きこもったのよ。もう育児も出来ないし、夫が亡くなったのはある意味私のせいと言えない事もないわ。だから碩有とはそれっきり。日に日に自分に似てくるから、会うのが辛かったの」

勝手な親でしょう、あの子がひねくれるのも無理はないわね
乾いた笑みと共に伏せていた視線を上げると、季鶯は翠玉の顔を見て目を丸くした。

「ちよつと……貴方、泣き過ぎじゃない」

大粒の涙をぼろぼろと零して、随分と彼女の目は赤い。

「だつ……て……！ あんまりです。せつかく仲直り出来るはず……
……だった、のにつ」

季鶯は自分の耳に下がる、瓊瑤に触れて薄く微笑んだ。

「もし無事に帰って来ても、仲直り出来たかどうかはわからないけど。せめて耳飾はあの人希望通りに身に付ける事にしたわ。私の愚かさへの罰として」

「罰……？」

「付けていれば、夫を忘れる事は出来ない。鄭に帰ろうかとも考えただけど……それだといつか、思い出に変わって私は幸せになつてしまふかもしれないわ。許されない事じゃない？」

人とも極力触れ合わない様に。日の光を浴びずに夜だけ外に出る。全て自分の望まない方へ生きるしか、償いの方法がわからない

翠玉は二、三度息を吸ったり吐いたりして、嗚咽を何とか落ち着けてから叫んだ。

「そんなの、間違っています！ どうしてお気づきにならないのですか」

「……え？」

「槇文様が実際何をお考えになっていたのかはわかりませんが、貴方は彼を愛していたのではないですか？ ただお認めにならないかっただけです。槇文様だって」

側室の為の館は、いくら身の危険を感じたからと言って手配が良すぎる。以前から用意していたとしか、翠玉には考えられなかった。

「賭けをしようと、槇文様は仰いました。勿論勝つおつもりだったのでしよう。ならば、三年は猶予だったに違いありません。貴方をふるさとに帰すか、帰さないかの」

もし戻って来て季鶯が折れたとしても、心が手に入るとは限らない。側室を出し三年の間に変化がなければ、鄭に返そうとしていたのではないか。

「領主の妻は通常、夫が亡くなれば年齢に関わらず尼僧院に入ると私は聞いております。遺言で指示でもない限り。それを『望むなら鄭に帰すと言われたのです。元々お考えだったとしてもおかしくはありません。貴方がご自分を罰しては、槇文様のお心に背くだけではないのですか」

あるがままの自然を愛する人を、六天楼（六）に繋ぎとめておくのは酷

だと。

楨文が聞いたままの人となりなら、きっと思ったに違いないのだ。

「そうかしら……」

しばらく押し黙ってから、季鶯は少しだけ瞳を滲ませて「かもしれないわね。誰にでも優しい人だったから」と寂しそうに笑った。

「遺言もそう言えば、側室一人ひとりに希望を取れと指示があったわ。誰もが困らない様に気を配る。最期まで、あの人らしいと思ってた」

いずれにしても、もう二十年以上昔の話よ　そう言って、季鶯は立ち上がった。

「季鶯様」

「ねえ貴方。名前をまだ聞いていなかったわね」

閉じられた雨戸に歩み寄って、首だけでこちらを見て問いかける。

「翠玉と申します。あの、差し出がましいとは充分わかっていますか……碩有様にお会いになっては頂けませんか」

「今更だし、きっとあの子は会いたがらないでしょう。それより貴方が仲直りするのが先じゃないの？」

複雑そうな表情は儚げにも見え、手を伸ばせば消えてしまいそうだ。人はこんな風に笑えるのかと、翠玉の方が哀しくなる位に。

「あの時どうすれば良かったのか、気づいたのはもう相手がいなくなっただけだったわ。翠玉さん　貴方も、いつでも取り戻せるなん

て思わない事ね」

言うだけ言って去ってしまった　季鶯の為に開けた雨戸を閉めようと手を掛けて、翠玉は溜息をついた。

夜の冷たい空気に顔をさらして、涙の火照りを鎮めようとそこにしばらく立っていた。

巨娥の祝福を受けた瓊瑶……か。

空を見上げてても未だ雲は晴れず、ぼんやりとした闇が広がるばかりだ。けれど月があるだろう場所には、うつすらと光の輪が見える。姿を隠した猊と、一人世に残された女神を思う。

触れ合う事が叶わなくとも、同じ空にいられるだけ幸せなのだろうか。それとも尚苦しいのだろうか。

楨文はいざという時には妻を手放そうとしていた。それが彼女を思っていた事であったにせよ、最善が常に正解とは限らない。

「碩有様とまるで逆だわ……」

片や手放そうとし、片や自分を閉じ込めようかと言う。同じ親子でもこころも違うものか。

「何が私と逆なんです？」

翠玉は自分の空耳かと思った。だってこれではまるで、さっきの話の様ではないか

「……碩有様」

階近くに立っているのは、紛れもなく自分の夫だった。楨文の幽霊などではない。

「何故、庭からおいでに。とにかく、お入りください。身体を冷やします」

脇に避けて中に促しても、彼は階を上がろうとしなかった。怪訝そうな面持ちで、今しがた季鶯が去った方角を見ている。

「貴方こそ、こんな時間に兩戸を開けるなんて感心しませんね。庭がどうかしたのですか」

「いえつ。何でもありません！」

さあさあ、とごまかすのも手伝って彼女は碩有の腕を取り、引張った。

奇妙な表情をして引かれるがままに中に入り、椅子に座ると特に何を話すでもなく黙っている。

沈黙が重たい。

仲直りと言っても……どうしたらいいだろう。

季鶯の話なんて今は絶対に出来ないし、重ねて謝るのも何か違う気がする。

「あの！」

とりあえず話しかけてみようと、隣に座って無謀に口火を切った時だった。

「……貴方が、庭から奏天楼に来たから。真似を試してみたのです。まさか戸が開いているとは思わなかった。その上私の名前が出て来るとは」

視線を合わさず、碩有がぼそりと呟く。

「え。という事は、もし戸が開いていなかったらどうなさるおつもりで……」

聞き返しながら、つい最近似た様な会話をしたと気づく。

「まさか様子を窺う為に、庭から来たわけでは……ないですよね」

返事はなかった。

一瞬の間の後、くすくすと翠玉は笑い出した。

「何を笑っているのですか」

「あ、いえごめんなさい。ちょっと思い出しただけで」

やはり、親子だ。発想が似ている。

「思い出したって何を」

見えない絆がまだ生きていたと、そう思うだけでいくらか救われる気がする。監視されるのは困るけど

不意に頬に柔らかく掌が触れて、翠玉は目を見開いた。

「……済まなかった」

どれほどの間外にいたのだろうか。碩有の指はまだひんやりと冷たく、腫れて熱を持っている目元に心地よかった。

何かを堪えているかに見える夫の顔に、安心させる様に笑う。自分を泣かせるのも、涙を拭い去ってくれるのもこの人なのだから。

「碩有様。閉じ込められるのは少し困りますが、間違っても手放さうと思わないでくださいね」

「翠玉」

「此処が私の居場所なんですから」

頬に触れたままの彼の手を、自分のそれで包み込む。どうすればいいのか、これしか結論は出ないのだ。最初からきつと。

同じ空にいるなら、私は寄り添う道を選びたい。

「……本当に貴方はわかっていませんね」

濡れた様な瞳に惹き付けられて、翠玉は瞬き一つ出来なくなる。

「貴方がそうやって容易く私を絡めとるから。閉じ込められているのは私の方だという事を」

「碩有様……？」

「あの時もそうだった」

碩有は言葉を続ける代わりに妻の額に口付けた。

頬を伝って頬、耳をなぞり、次いで貪る様に唇を奪う。髪飾りを外した長い黒髪に、指を差し入れて頭を抱いた。

「あの時って　墓参りの？　私は、本当にただ昔の嫌な事を思い出して……そんな姿を見られたくなかっただけで……」

唇が離れた合間に言うと、碩有は笑った。低く漣なみにも似て、それだけで翠玉の背筋がしびれる。

「いいえ、今日の朝の話です」

また怒るかと顔を覗きこんでみたが、そうでもない様だ。

「執務の前に貴方を見るなんて……おかげで今日一日、何度朗世に叱られた事か」

左腕を首の後ろに回して抱くと、自由な右の手指で髪を巻きつけ引き寄せる。

やや荒くなつた指の動きから、朔行の件はもう話さない方がいいのだと彼女は理解した。

そう、今は過去のあれこれよりも単純なものが大切だ。

望んでいたのは、自分も同じだったから。

目の前にいるこの人に、ただ触れたいと。

心を占めて離さない人が此処にいて自分を思ってくれる。本当に、何と贅沢な事なのだろう。

碩有の腕の中で己を満たす潮流に我を忘れそうになりながら、翠玉はいつもより少しだけ積極的になろうと反応を返した。

絡めとられているのは自分も同じのだと、せめて与えられるだけのものに少しでも近いものを感じて欲しかったから。

碩有に伝わったかどうか　その後結局倍返しをされてしまったので、詳しくはわからない。

あの事故には後日談があつてのう　と、翌朝訪れた槐苑は珍しくもの憂げに語りだした。

「落石に遭つたのは間違いないのじゃが、騒ぎに紛れて楨文様を襲つた者達がいたのですよ。呉の町長は傀儡かいらいでしてな、官吏が陰で盗掘の指示を出しておつた。情報もそやつらが操つて、洛に届くのがただでさえ遅れたのです」

碩有が執務へと出て行つたのを見届けたかの様に、上機嫌にやつてきた彼女を今日ほど歓迎した事はなかつただろう。

「仲直りなさつたらしいですな。重畳重畳」という言葉を無視して早速紗甫を呼んだ。老婆の好みものを用意し、話のついでに昔話をさせるのはさほど難しい作業ではなかつた。

仲直りへの安心感が、槐苑の口を軽くしているらしい。

「戴剋様が楨文様の亡骸に不審を持たれてのう。烈火のごとくお怒りになられて、一族郎党全てを挙げての解明を命じられましてな。かつては敵君と畏れられたお方、捕らえられなければ呉を滅ぼす時まで仰せでした。愛息を殺された怒りは、それはそれは烈しかったものです」

「それで、犯人がその官吏だとわかつたのね？」

「はい。皆自分が殺されると思ひ躍起になつて調査しましたからね。捕らえた者達を戴剋様は極刑になさいました。のみならず、呉の壊れた橋を非常に堅固なものに造り変えたのです」

当時の戴剋の悲しみを考えて、翠玉は目を伏せた　いくら後事を治めても、息子は取り戻せない。どれほどに嘆いた事だろう。

でもそれだと、季鶯は自分を責める必要はないのではないか。戴剋が悪意を見せる理由も。

「今の話……六天楼にも知れ渡っていたのよね？」

「うむ、まあそうじゃのう。公に知らされたわけではないが、女の口と耳は風の如しと申しますからな。知らぬ者はおらんかったでしょう。ただ」

「ただ？」

「戴剋様は呉に向かわれるのを随分と反対なさっていた、という話ですのう。それでなくとも、その頃六天楼の事ではしばお二人は揉めていたとか。仲の良い親子だったのに、一体何が原因だったのかは存じませぬが」

季鶯と楨文、そして楨文と戴剋の間に何があったのか。

だが悔やんだのはきっと、季鶯だけではなかっただろう。

やり場のない怒りは負の連鎖を生み、今は季鶯と碩有の間にも影を落としている。

「いずれにせよ、もう全て昔の事です。奥方様がお気にされるには及びませんぞ」

思索に耽っていた翠玉は、顔を上げて老婆の顔を見つめた。

この人は、もしかしたら全てを知っていて黙っているのではないか。そんな気がした。

「槐苑様は……本当はご存知なのではありませんか？ 楨文様は六天楼から側室を出そうとして戴剋様と衝突された。違いますか？」

さあ、と空とぼけて老婆は出された茶をゆっくりと啜る。じれったいほど時を置いてから答えた。

「そうだったかもしれん。だかのう奥方様。今となつては、それはどうでもいい事じゃとお思いになりませぬか」

季鶯と碩有が疎遠になつた事の方が問題だつたと、槐苑は溜息混じりに言った。

「仮にも御館様のお母君をこう申し上げるのは無礼じゃが、もう少し季鶯様が母としてお強くなられたらと儂は時折思つておりました。奏天楼に引き離されるまで、碩有様をそれは大切にお育てになつていたというのに、移るとなると見向きもしなくなつておしまいでしたからのう。全く愛されずにいるよりも酷な仕打ちじゃ」

返す言葉を見つけられず、翠玉は黙っているしかなかった。果たしてそんなに簡単に、わが子を手放せるものだろうか。

日に日に自分に似てくるから、見るのが辛かつたの。己を責めていた季鶯は、もしかしたら恐れたのかもしれない。いつか近いうちに、自分が息子を愛せなくなつてしまうのではないかと。

あるいはそれも罰として科したのか。相手がいなくなつてから、ああすれば良かったと思つても遅い。翠玉には、このままでいいとはどうしても思えなかつた。

九 春嵐

一言に仲直りさせるといっても、方や昼間は外に決して出ない蟄居きよの身だ。

しかもお互いに自発的には会おうとはしないだろうし、今の時点では翠玉自身すら季鶯に表立っては会うのを許されていない。

まずはそこから解決していかなければ。

あれこれ思いを巡らせていると、「失礼致します」と紗甫が角盆を掲げ持って房に入ってきた。

「本日は第一節氣しちじゆきの中な日でございますから、薬玉くすりたまを飾らせていただきます」

盆には色とりどりの紐が複雑に結ばれた、円形の紅い鞠の様なものがいくつか載っている。紐の中心には若葉の枝も添えられていた。

「そうだったわね。今年は春が来るのが早かったから、忘れそうになっただけだ」

紗甫は房の入り口と庭に向いた扉に手早く薬玉を結びつけ、にっこり笑う。

「本日の夕餉かんそうは寒粽かんそうになります」

「……わかったわ」

冷たい餅を思い浮かべて、翠玉は苦笑した。実はあまり好きではないのだ。

曆の上では節気をもって春夏秋冬を分けるのだが、邸では入りと中間日に様々な飾りつけを行う。

それは貴人の家に限った話ではなく、彼女の生家でも春の節気には冷たいものが食卓に出た。寒粽とは主食の穀物を蒸してから敢えて冷やす料理で、味はともかく妙に固いので食べにくい。

侍女が出払った房の中で、美しい意匠の薬玉を眺めていた翠玉の頭にふと、ひらめくものがあった。

紅い玉……。

「緋鉾石が見てみたい、ですか？」

その日の晩、元通りに宵をめぐがけてやってきた碩有に思い切つて聞いてみると、彼は少しだけ不思議そうな顔をしたものの、穏やかに聞き返してきた。

「はい。桐で採れるのでしょうか？ 珍しい石だと聞いて、もし出来れば見てみたいなと思って」

「珍しいというより、産業によく使われるものですから貴重ではありません。物自体は手に入りにくいわけではありません」

「珍しいと言えば」と碩有は固い料理にも顔色を変えることなく優雅な仕草で箸を付け口に運んだ。寒粽は食べにくさを考慮して小さく作られている。ややあつてから再び口を開いた。

「貴方が何か欲しいというなんて、よほど気になったのですね」

「え、ええ。黒くてそれでいて光の加減で紅く見えるのでしょうか。神秘的だわ」

「ですがあれは飾りに出来るものでもないですよ」

「いいのです。一度眺めたらお返ししますから」

翠玉は少しの間逡巡した。季鷲と会ってもいいか、と聞いてみたかったが今はどうにもその時期ではない様な気がした。

ふと、碩有が何かを思い出す様な表情をしているのを見咎める。

「どうかなさったのですか？」

「緋鉾石と言えば、父の霊廟にもそんなものが飾られていたなと思ひまして」

「本当ですか!？」

妻のあまりの驚きぶりに、今度は碩有が啞然とする番だった。

「遺言の形見分けにも入れられておらず、お祖父様も処遇に困りまして結局ずつと持っていたとか。今、そんなに驚くこと言いましたか？」

「ああいえっ！ ちょっと話が早いなと思っただけで 何でもありません！」

「そうですね、確かに霊廟に行けばわざわざ取り寄せる必要もないです。お祖父様も喜ばれるかもしれない」

どうやら彼女の発言を違った意味に取っただけらしい。

「え、ええ」

流れて頷いたものの、そう言えば彼は蕃家の墓に来てくれたのだ。

「私が行っても良いものなら……」

「ご先祖に叱られるのでは、と付け加えると、碩有は破顔一笑して妻の危惧を軽く払った。

「どろどろという事もありませんよ。問題を抱えているのは、いつだって生きている者なのですから」

「翠玉様、何をなさっているのですか」

いつもと変わらぬ何気ない阿坤の口調にも飛び上がりそうになりながら、翠玉は目の前の枝に薬玉を結んだ。鮮やかな紅い色の飾り紐は、房にあるものを真似て彼女自身が手ずから作ったものだった。全く自分は謀はかりごとや駆け引きに向いていない、と思う。そう言えば常に感情的に真正面からぶつかってばかりな気がする。あまり自慢出来るものではないのは確かだ。

でも、今はかりは適当にごまかさねばならない。

「この木、ちょうど私の房から見えるでしょう？　ここに薬玉をかけておけば、外を見た時に眺められると思って。無病息災の厄払いですものね」

「雨風で汚れてしまうのでは……」

「大丈夫よ。枝葉が傘になってくれるし、しばらくは月も太っているわ。雨になりそうだったら取るから」

「それを仰るなら、月の周りが白むかどうかでしょう。春嵐が来ねば良いのですが」

「まあ、似たようなものよ」

上機嫌に言っつて紐を結び終わると、翠玉はさっさと踵を返して庭から房へと戻っていった。

季鶯様、気づいてくれるかしら。

その日は何事もなく過ぎた。碩有が再び来る様になったというのもあり、始終庭を気にかけるわけにもいかなかったが、ふとした折にでも雨戸を叩く音でもないかと神経を研ぎ澄ませて反応を待った。薬玉には細工がしてあって、手にとつて眺めればすぐに中央に切れ目が入っているのがわかるだろう。そして中に文が入っているという事も。

お節介なのは百も承知、けれど時ある限り望みを繋ぐのもまた、生者の特権ではないだろうかという気がしている。　靈廟に参る日程が決まらないのか、碩有からはまだ何も具体的には言われなかった。一族に反対されているのかもしれない。

「……どうかしたのですか？」

耳をくすぐる声に逸れかけていた意識を戻し、翠玉は慌てて首を横に振った。

小石を投げて返答がなければ、お取り込み中だと思つところだったわ。

来るなら宵も早いうちでないと、帰られてしまつては困るのだと思ひながら。

しかし予想に反して、次の日の晩も季鴛からは何の音沙汰もなかった。無為なまま二日が過ぎ、夜を迎えた。

「ひどい雨だわ……」

華頭窓の格子の隙間から庭を覗き見て、翠玉は散策の時に薬玉を引き上げてこなかったのを後悔していた。

夕方までの晴天が嘘のように夜から降り出した雨は勢い強く、屋根と庭を打ち鳴らしている。

いきなりのものだったのでつきりにわか雨だと思っていれば、刻を過ぎても止む気配はない。いくら緑生い茂る枝葉の中とはいえ、これだけ降っていれば水浸しになっているのは間違いないだろう。

「いつまでもそこにいると、身体を冷やしますよ」

「そ、そうですね」

「庭に何かあるのですか？　そう言えばこの前も」

「何もないですよ。ただ、庭が好きなものですから」

房の中からこちらに近づいて来た衣衫姿の碩有を、押し戻す様にして窓を離れた。

「毎日見ているではありませんか」

からかい気味な笑いに決まり悪くなって、「月琴でも弾きましよう」と話を逸らした。

こんな雨降りだもの、季鶯様が来るわけもないし。

「月琴で思い出しましたが、近々隣国から客人を迎える事になりましてね」

長椅子に並んで腰掛けると、妻の持つ楽器を眺めながら彼は言った。

「驚おどろという領国をご存知ですか？　この月琴もそこで作られている

ものが有名で」

その時だった。雨戸の外から、戸板を叩く音がしたのだった。

「え」

撥を構えていた翠玉よりも、碩有の表情が険しくなり、即座に立ち上がり扉に向かった。

雨の音では決してない、高く重たい音が鳴り響く。明らかに拳で殴っている様な音だった。

まさか。こんな天気の中？

慌てて彼女が駆け寄る間もなく、夫が扉の把手に手を掛け、開けると同時に素早く外を窺う。

「せ、碩有様、私が開けます」

「何を言うのですか。万一賊でも入り込んでいたら大変です」

言うが早い、彼は雨戸と内廊下の間にある廂の下へと、一歩足を踏み出した。

歩みが止まる。

「いやもう、ひどい雨ね！ 流石の私も行き倒れるかと思ったわ

」

「季鶯様！」

夫の肩越しに声を掛けると、着物から髪から滝にでも打たれたのかという様な出で立ちの季鶯が、顎から雨滴を滴らせて呆然とこちらを凝視していた。

正確には、間に立ち尽くすわが子の顔を。

「せ
」

だが開かれた唇は、後が続かず止まったままだった。

「……これは一体、どういう事ですか」

碩有は振り返り、季鶯ではなく翠玉に向かって問いかけた。

「え〜と……何と言ったらいいのでしょうか。つまり……」

騒ぎに駆けつけてきた紗甫に、布を持って来る様に頼む。所在なく咳払いなどしてみた。

「とりあえずお上がりください、季鶯様。そのままではお体を壊してしまおうでしょうか」

前に来た時と違って、季鶯は促されても房に足を踏み入れようとはしなかった。

「いえ　　ここでいいわ。すぐに帰るから」

手に持っていたものを掲げて翠玉に示す。

「雨に濡れていたから、気になって。貴方が飾ったものでしょう?」

枝に括りつけてあったはずの薬玉は、色が変わってしまっていた。思わず手を伸ばすと、碩有が脇に避ける。翠玉はうるたえた。

「……まさか、こんなひどい雨の中においでになるとは」
「中に手紙が入っていたでしょ。『見せたいものがある』って。気になってしょうがなくて来ちゃった」

あっけらかんと笑う様子が、ひどく子供じみていて、緊迫した場の雰囲気になくそぐわない。

お邪魔だったわね、と踵を返す季鷲の腕を掴んだ。

「いえ！ そんな姿で帰ってはお風邪を召しますっ。せめて身体を拭いてから、回廊を渡ってお帰りになってください」
「でも……」

ちらりと視線をやるうとするものの、見る事さえはばかれるといった様子だ。

「翠玉。私は今日は奏天楼に戻る事にします」

夫の声は硬かった。すぐさま歩き出そうとする袖を、こちらも掴んで留める。

「碩有様もお待ち下さい！ これにはわけが」
「わけてどういふこと？」

受け取った布で身体を拭きながら、険しい表情で口を挟んだのは季鷲だ。

「もしかして翠玉さん、これは貴方が仕向けた事なのかしら」
「し、仕向けたってどうか……その」

「よくある表現で『大きなお世話』っていつの、知ってる？」
「それはもう、重々承知しております。でも でもですね」

語尾が消え入りそうになるのを奮い立たせて、昂然と顔を上げる。

「仰る通りです。私は季鶯様に緋鉾石を見てもらいたかった。だから、お二人で霊廟にお参りに行つてはどうかと思つてっ！」

申し訳ありません、と二人に頭を下げた。

「翠玉……」

「……緋鉾石？　それが霊廟に？」

それぞれ別の理由には違いないのに、親子は揃つて同じ表情をしている。つまり、理解に苦しむという。

「でもあの人が亡くなる時には、形見にはそんなものなかつたはずだけど……」

あの人、という言葉に碩有は初めて視線を動かした。それまでは決して母を見ずに、そつぽを向いていたのである。

「何故、父上のものだと思ひか」

最初自分に掛けられたものだと思つていなかつたらしく、季鶯はややあつてから目を見開いた。まるで、天上からお告げを聞いたかの様な顔をして。

結局答えずに、俯いてしまった。

翠玉は義母の顔を覗き込んだ。

「季鶯様。楨文様は遺言に記しはしませんでしたが、緋鉾石を持ち帰っていた様ですよ。もしかしたら、耳飾と違つてご自分で渡すお

つもりだったのではないかと、私などは思うのです」

娥玉の耳飾は以前から注文していたものだから、遺言にも書けるだろう。だが緋鉾石は、恐らく耳飾の数倍は季鷲が喜ぶであろうその石は 当時の状況を考えれば、実際に手渡して笑顔を見なければ意味がない。

当初翠玉は、楨文を思い出すであろうその石を見せると彼女を呼び出して、碩有と鉢合わせをさせようと目論んでいた。だが。

周到だった彼が、恐らくはたった一つだけ予定していなかった事。

「……そんなの……わからないわよ……っ。本人に聞いたわけでもないのに……」

声を詰まらせる季鷲は、きつと置き去りにされたあの頃のままなのだろう。

「わからないですよね。だからせめて お二人で、恨み言でも言いに行ってみてはいかがですか」

潤んだ瞳をしきりに瞬かせ、戸惑いの表情を浮かべた。

「恨み言……?」

「私の両親と弟、立て続けに亡くなったんです。病で苦しんで、誠心誠意看病したけど駄目でした。特に父なんて、母が亡くなった後すっかり意気消沈してしまっ」

翠玉は寂しげに微笑った。灯火が消えていくのを止められない、あの無力に打ちひしがれた日々。忘れようとしても、おいそれと忘れられるものではない。

「娘の私では、生きる意味にならなかつたみたいでした。元気だった時は二人ともとてもいい両親と弟だったと思います。でも、やっぱりお墓に向かうと悔しい気持ちなんかも出るから。そんな思いも話しかける事になっているんです。……で、大抵いつの間にか、ただの報告になってしまったり」

「翠玉さん……」

「もちろん亡くなった人は何も言わないですよ。そう理解させられるのも、ふんぎりを付ける為に大事なのかなって思ってたあ、私の話じゃないですよ。すみません」

両肩を柔らかく包み込まれる感触に、見上げると碩有がすぐ傍に立っていた。

一瞬こちらを見つめてから、季鷲に視線を移す。まっすぐ、捉えて。

「行ってもいいですよ。お参り」

「碩有様」

声を上げた翠玉も、言われた当人に負けず劣らず驚いていた。

「ただし、昼に出てもらいます。それで宜しければ」

一拍の間を置いて、季鷲は激昂する。

「な……私が、夜しか外に出ないの知っているでしょう!」

「昼に出られない支障があるという報告は受けていませんが? 夜に霊廟に行くなど、貴方がたを連れては危険過ぎます」

いっそ冷ややかとも取れる表情で、挑戦的に言い放つ。

泣き出しそうな顔をしたまま、彼女は息子をしばらく睨んでいた

が、ややあつてぼつりともらした。ふてくされた様に。

「……貴方のそういうところ、あの人にそっくりだわ……」
「初耳ですね。邸の者達は皆、口を揃えて貴方に似ているとばかり言うのに」

和やかな雰囲気とは程遠いが、恐らくは二十年以上ぶりの、これが親子の会話なのだ。

素っ気なく応じる夫の強張った頬に、笑みに似たものがわずかに掠めるのを　翠玉は確かに見た様な気がした。

十 石の記憶

「お墓参り、聞き入れてくださってありがとうございます」

季鶯に阿坤を付けて廊下から帰すのを見送り、翠玉は言葉寡ない夫を振り返った。

その背中は既に房内を向いていて、やはり黙ったまま長椅子に身体を投げ出す。もの憂げな顔をしていた。

「碩有様」

「……わかっています。礼を言わねばならないのは、本当は私の方なのだ」

苦笑が零れる。

「今まであの人の話題は、口に出す事さえ避けていました。話してもどうにもならないと思ったからです」

体勢と同じく、何処か投げやりな口調だった。

「父を拒み正妻として母としての役目を拒み、拳句当たり前の人生さえ拒んだ。私もこの家の人間です。愛情を期待していたわけではありません。……それでも」

自分の生みの親が理解しがたい人物だという事実は、どこか触れがたい恐怖に繋がったと語る。

「聞く限りでは父はあの人をそれなりに大切にしていたのだと思います。けれどあの方は理解しようとはしなかった。父を愛せなかつ

たから、息子の私も受け入れなかったのでしょうか。楼に閉じこもり日中外に出ないが夜彷徨い歩くのも、狂気めいたものを感じていました」

彼は途方に暮れた様に自らの髪を手でかき上げた。

「同じ血が私にも流れている。ただでさえ周りは表立ってではないにせよ、あの人に似ているとばかり言うのです。いつか私も妻を迎えた時、あの様になってしまふのでは　そんな風にさえ思えて」

黙って夫の告白を聞いていた翠玉は、髪を弄び続ける手を自らのそれで止めた。

それは違つと、きっと季鶯は楨文を愛しているのだと。

本当は言いたかった。だが当の本人でさえ不確かなものを、少なくとも自分が告げるべきではない。

碩有は逸らしていた視線を妻に向ける。眼差しが恐れに揺らいでいた。

不安を払ってあげたくて、代わりに微笑みを返す。

「私は、季鶯様が嫌いではありません。……いえ、好きですよ。碩有様のお母様だからではなく、一人の同じ女性として、気持ちがとてもわかります」

欲しかったのは、「手に入れる」にはあまりに不確かなもの。傍にいても、決して叶わない事だつてある。でも二人にはきつと、圧倒的に時間が足りなかっただけ。

「季鶯様のなさった事を狂気だと仰るのなら、それはとても強い感情故でしょう。冷酷な人は最初から惑いもしない。……似ていても良いではありませんか」

彼は再び視線を逸らした。何処か遠い場所を見つめている。

「……確かに今日、直に言葉を聞いて思ったのです。もしかしたら思っていたよりも、父はあの人にとって重要な存在だったのかもしれないと」

「『母上』、でしょうか？　そう呼びになっただけですか」

一瞬怯んで言葉に詰まり、ややしばらくしてから碩有は言った。

「……母は、緋鉾石ですぐさま父を思い浮かべた。憎んでいる様には見えませんでした。ならば何故」

言いさして、決まり悪そうにする。

「何故？」

「……いえ。これはそのうち、本人に直接聞いてみます」

妙に落ち着かなくなった夫に翠玉は首を傾げた。

「急にどうなさったのです？」

「何でもありません。それより、さっき言ったのは本当ですか」

「え？　どれの事でしょう」

色々言った様な気がするので、何についてか見当がつかなかった。

「母に似ているという事は、多少鬱陶しい所もあるかもしれない。それでもいいと言えますか」

挑戦的な口調に何だか可笑しさが込み上げてきて、翠玉は笑った。

「ごめんなさい。それだったのですね」

「笑いごとではありませんよ。もうわかっていると思いますけど、私は父の様に器用ではないし、多少執念深いところもあります」

「ええ、勿論知っています」

事もなげに返すと、自分で言い出したくせに碩有は憮然としたらしかつた。笑いを堪えて続ける。

「その不器用さが、私には嬉しいのです」

碩有が槇文と同じ道は歩かないという証明にも思えるから。

「碩有様が私を戴剋様からの遺言だと、義務の様に扱わなくて、本当に」

最後まで言い終わらないうちに、彼女の唇は夫のそれによって塞がれた。

「……義務だなんて、最初から思わなかった」

唇を離れた時に囁かれた言葉、声の響きに翠玉の身体の奥が震えた。恐怖のおののきではなく、もっと度し難く馴染み深い疼きに。

「知りませんよ。どうなっても」

「せ、碩有様。まだ」

話は終わっていない様な気がする、そう抗議したいのに。出来なかった。

「いつか私は、貴方を壊してしまうかもしれないのに……」

紡ぐ言葉が、苦痛の呻きに似ていたから。

「構いません、それでも」

触れた部分から、取り戻せない彼の幼い日の孤独が伝わって来る。抱き締められたらいいのに。こぼれ落ちない様に全てを。

荒くなつてゆく息の下、翠玉は碩有の頭を胸に抱き、その伏せた脛に唇を寄せた。

三人揃つての霊廟への訪問は、それから更に二日後にようやく実現した。

碩有が一族の古老などからの反対を押し切つたらしい、とは本人の口ではなく例によつて槐苑の話である。

山とも見紛う小高い丘に、石造りの寺院の形に起伏をなす、美しくも確かに何処か寂しい場所だった。

建物はあつても、生者の気配はない。静謐だけが辺りに満ちている。

「……楨文様」

重くきしむ扉を開けて中に入り、中央の祭壇に辿り着くと季鶯は震える声で告げた。

白き玉石で出来た繊細な装飾の祭壇の手前には、花に囲まれた棺の形をした台座。

そして花々に埋もれる様にして、黒く光る石が置かれている。

「棺の中には亡骸のみを納めるのがしきたりなので、供物と同じ扱いに致しました」

大きな廟堂の内に、碩有の声はやけに響いた。
季鶯が手を伸ばして緋鉾石にそつと触れる。

「冷たい……」

両手に包み込んだ。

「本当は、石が好きだと言った理由を今まで誰にも語った事はなかったの。変わっている侍女達に言われそうで黙っていた。……なのにどうして貴方に言ってしまったのかしら」

亡き人への手向けの言葉だったとわかっていたから、碩有も翠玉も答えなかった。

「貴方は知らなかったでしょうけど、私は結構色んな話をした方だったのよ。……そうね。楽しかったのかもしれない」

愛おしむ様に石肌を撫でる。

「この石の冷たさが好きだったのに。不思議ね、今はとても……悲しいの」

涙を零したわけでもないのに、翠玉ははっきりと季鶯がな哭ないていると思った。

「素直になれなくて、ごめんなさい……」

彼が生きている間は決して口に出来なかった言葉。

消え入りそうにかすかに呟いて、石を抱いたまま彼女は項垂れ表情を隠した。細い肩が、わななく様に震えていた。

これできっと親子の溝が埋まる。

そう思っていた翠玉の期待を裏切る様な報せが届いたのは、靈廟に参ってから僅かに二日後の事だった。

「季鸞様が邸をお出になるのですか？ 本当に!？」

驚きの余り後半裏返った声のせいではないだろうが、いつもの宵始めにやってきた碩有は力なく椅子に身体を投げ出し頷いた。

「ここを出て、陵に住まいを移したいと言って来ました。それだけではなく、各所を旅して鉱石の採集を始めたいと」

「そんな だって、あの場所には人が住める様な設備はないですよ」

「隣に楼閣を建ててだそうですよ。母には確かに陶家だけでなく鄭家からも結構な資産が与えられていますから、自分の費用だと言われれば反対する理由はありません」

翠玉は思わず椅子に乗り上げ、額に手を当てて呻く夫の襟元を両手で掴んだ。

「だとしても、地所が陶家のものなら断れるものではありませんか。あんな周りに街もない、寂しい場所に住まわれるなんて絶対にいいません！ 碩有様、まさかそれでお許しになったのですか？」

「私だつて反対しましたよ。しましたが」

『元々領主の母親だつて、本来は六天楼から出られなかったはずでしょ。比べれば尼僧院でもないし、辺りは自然に囲まれているし私にとつては願つてもない場所だわ。侍女に少し申し訳ないから、色々考えるつもりだけど。やっぱり私、石が好きなのよ』

それに息子の貴方はもういい大人だし、何の問題もないと思わない？ 邪魔しちゃ悪いでしょ

季鶯は妙に楽しそうに笑つたらしい。

「……いい大人と言われてしまえば、まるで私が駄々をこねている様で。それ以上は止められませんでした」

翠玉は彼女の心中がわからなかった。

碩有は今まで母と心を通わす機会を持てなかった。だから強くは止められなかったのだろう。

これが幼い頃から仲睦まじくしていた親子ならば、止める事も出来ただろうに。

会つて自分からも話をと気を急いでいた彼女は、ふと夫の様子を訝しく思った。

「……碩有様は、あまりお怒りではないのですか？」

悲しげでも不快げでもない。例えて言うならば諦観している風にも見えた。

「いずれにしても、楼閣が出来るまで数年は掛かるでしょう。旅はすぐに始めるそうですが、帰ったら必ずお茶に呼ばれると。そう言っていましたよ」

「何なんですか、その決定事項は……」
「鉦柏楼にいた侍女達は『昔の季鶯様に戻られた様だ』と驚いていました」

呆気に取られた翠玉の脳裏に、楨文が最後の逢瀬に語ったという言葉がよぎった。

貴方には身を飾るものは必要ない。

虚ろに媚びる、脆く人工的な美しさではなく。
束縛を嫌いなながらも自らに囚われ、それでいてこうと決めたら数十年も、変わらずに一途に思いを貫く。

確かに鉦石の様に頑固で、自然に、ただあるがままなのかもしれない。

「……楨文様は、やはり季鶯様をよく理解なさっていたのかもかもしれませんね……」

「え？」

石造りのあの壮麗な墓陵は、鉦石好きの少し風変わりな女性には
良き居場所になるのだろうか。

その前に恐らくは、旅の土産話を嬉しげに息子に語る季鶯が見られるはずだ。

もしかしたら、自分達の子を授かった時に珍しい石の話を、子守唄代わりに聞かせてくれたりするかもしれない。

少なくとも同じ空にある限り、未来は繋がるだろう。

翠玉が傍らを見ると期せずして夫と目が合った。思わず微笑む。

「悪い話ではないですよ、きっと。そんな気がします」

「仲笈なかつの娘むすめに墓はかで会あったのか」

いずれの邸か、焚き染められた香の白気にむせ返る部屋の中で男は問いかけた。

艶やかな憂いを含んだ、「わくてき」 蠱惑的な声だった。声がかうのは遙か下座、貴人にする跪礼きれいの体勢で、答える青年の声に苦いものが混じった。

「はい。よもや生きているとは思いませんでしたが」

「美貌の娘だったのだらう。買う者がいればそうたやすくは死ぬまいよ」

「それが御館様、陶家の領主の妻となっておりました。いくら美しいとは言っても大層な出世で、驚くばかりの強運でございます」

「まさか。人違いではないのか」

「あの出で立ちは見誤ろうはずもございません。それに御館様もお聞き及びでいらっしやいますでしょう。当代の領主碩有は一瓊のみを寵愛すると有名でございます」

上座に一段上がった場所で、男が椅子の中に投げ出していた半身を起こす気配がした。

「確かに聞いている。先代より譲り受けた瓊瑶だそうだな。……さぞや見事な玉であろうよ」

楽しみが増えた、と彼は浅黒く締まった口元で薄く笑う。

整った造作にも何処か残忍さを湛えた笑みに、傍らに座ってしなだれかかる黒髪の女が、僅かに顔をしかめた。

「陶の瓊瑤ならば、我が鷲家に取って不足はなし。まずは是非とも、ひと目なり姿を見たいものだ」

「しかし、あの陶家を敵に回すのはいささか支障がありませんか」

青年は口に出してしまってから主の勘気を知ってさらに頭を下げる。

男は高らかに哄笑した。

「文弱に名高い君主よ。力でねじ伏せれば済むだけの事　朔行、お前にもひと働きしてもらおうぞ」

暗雲の兆しが、陶家に忍び寄って来ていた。

了

十 石の記憶（後書き）

ここまでお読み頂き、ありがとうございます。

第二部は終了となり、第三部へと続きます。

少し時を置く事になるかと思いますが、第三部再開時にまた、ご縁がありますと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1026o/>

六天楼の宝珠

2011年9月14日18時18分発行